いとしのカメレオン

島さち子

いとしの　カメレオン

装画　島　さち子

いとしの　カメレオン

――第1部――

――もっと死体が生まれるようなら、担いであげてもいいのですよ。

――まだまだ腐ったのや干からびたのが、彼らに化けている筈でしょう。

二人の間にある少女の顔が後に押しやられ、口が開き、靴のない両足が同時に床を叩く。

今、映画のスクリーンにクローズアップされた少女の顔の中を、死体らしきものを引き摺って男がいく。日輪をちりばめたプリント模様のプリーツが一杯に広がり、運ぶ者たちの足に巻きついていく。

――軽やかに飛んだのになあ、そう見えましたが？

――落ちたのは、自分の肉の翼ではなく、髪の翼に、全てを委ねたからなんだよ。
――今頃あの世界からの手紙が届いたりするから、いけないんじゃないですか？
――今からでも間にあう、そう思ったのだろう。彼のところへ行こうとして、跳び出したまではよかったが、とうの昔に彼が亡くなっていたことを思い出したってわけさ。そのショックで落ちた。
――死ぬ時は、所構わず死ぬものでしょうか？
――冥福をお祈りしよう。次にまたときが過ぎて、われわれが、うまく、生涯を運んであげたらいい。
引き摺られていく少女の、喉は引き摺られるリズムにのって脈打ち、動悸が叫びだしている！
――本当に死ぬなら、このあたり、もっと青白いものが漂っている筈だ。果して死んでいるのかどうか、怪しいものだな？
――この少女姿は化けの皮。少女姿の老婆は夢をみるんですね。
――いつまでも、少年や少女のままでいたい、それはわからなくもないが、この頃は、悟ったような少年や少女が、早々と老化して死を急ぐ。われわれも眼が離せないな。彼らは、あらゆる穴に狙いをつける！
――本当に孤独なれした女だったら破滅とは無縁で気楽。いま身を地上に投げ出し、死んで見せて

も、突然、音を立てて跳ね起きてしまうかもしれない。現在から、過去の底まで沈み、上下運動をし、弾んでいれば、何ほどかの手紙屑をまた掬い上げるでしょう。

〒[――僕は飛ぶ生きもので、走る生きものではない気がするんだ。それなのに、根本的な欠陥は僕が翼を持っていないことだ。腕は翼だろうか？　きみの黒髪は翼だ！　きみの翼に乗って、僕も飛びたい！！……]

少女姿の老婆の手に握り締められている手紙には、若々しいハートマークがのぞいている。

――この子は人に酔ったんじゃないでしょうか？　人を何より嫌う性質なんですよ。人酔いで倒れたのだから、誰もいない、いい空気のところで休ませてあげましょう。俺たち、実はまだ、雪の精や、鶴や蛇のお化けに憧れているのかもしれませんね。すべての夢を諦めさせないで下さい。墓を幾つも掘らせようなんて悪趣味はやめて下さい！

誰かの少女を引き摺っていく男たちは、言葉など振り払いながらいく。二人とも少し身をひねり、汗をいっぱい流して、シャツまで水撒きしたように背骨に貼り付けているが、誰かの少女は風に吹かれた花びらの戯れのように、前へ、前へ、苦もなく運ばれていく。

――母さんはお前のことなら、何でも知っているのよ。
火薬庫である誰かは、母親の口をふさぎたくなる。
――母さんから引き継いだ染色体のやっとこは、一本残らず頭を揃えてお返しします！　いくら母さんだって……。
わたしは脳細胞のなかに住んでいたことがあっただろうか？　記憶はない。柔らかい足で、跳ねてみる。見えないために何処にもいるあなたは、何時もわたしを監視しているから、わたしに潜在的不幸がつきまとう。
――でも、わたしは他人を着ているのよ。
なら安心だ。わたしはためらわない、わたしは彼を払いのける。彼の身体が鞠のように転がっていくのが見える。子供たちが指さして笑い出した。
――だって、おかしいんだもん！
――きみたちは、その口で、その母親譲りの蕾のような口で、揃いもそろって、人を食っているなあ！　僕はきみたちの父親だと言われているんだよ。僕には実感はないさ。男にそんなものあるわけないんだから……。

――パク、パク、パク、パクパクパク、パク！
――パクじゃない、パパだ！
――ママ、ママ！
――それは間違いだよ。僕はパパでママではないよ。パパ、パパパパですよ！　お前たちには分からないだろうが、パパとママの違いは大きいのだよ。
わたしの回りを駆けているのは、子供たちだ。子供がわたしの子供でないことの不安や不満で、幾つかの顔が幻のように浮き沈みしている。わたしのなかですくんでいるのは誰れ？　わたしを核として湿った夜が凝集していく。
子供は振り返っては、ママ、ママという。
――何故、わたしがきみたちのママになるのよ？
囁いているのは誰？
払い除けられたために変形した彼には重さがない。彼が突然増殖をはじめる。何処も此処も彼でいっぱいになる。入り乱れて走ったりひっくりかえったり、あかんべえをしたりする。抑圧されていた自己を解放したのだろう。彼は防衛することに飽いていたのだ。
――自分が変な人間だなんて、わかっているさ。僕が自分に悪口雑言を吐きかけたいくらいだ。

わたしが深呼吸すると、震えが止まった。
頬と頬を寄せ、手をとりあい、口移しに毒薬をおくりこんだ。胸には丸いプーケを飾って！　この胸に抱きしめ。
――子供たちがプーケを狙って、近づいてくるのがわかっていたわ。わたしは目を見張っていたの、それがただ一つのわたしの仕事だというように……。でも、もしもあの時……。
――あの恐ろしい待ち時間、あなたにそれがわかるかしら？　永遠に続く待ち時間よ！　それは人間であることさえ否定してしまうように、わたしには思えたわ。あなたの評価を待っていたのよ。でもある日から、わたしは待つのを止めたんです。わかってくれなくて構わないのよ。何時か分かってくれる人間が生まれて来るまで、苦しむのを止めたの。新種の人間が生まれてくるのを待てばいいわ。そう、思い当たったのよ。でも、もしもあの時あなたの作品が正当に評価されていたら……。
――おれたちは横になり、また立ち上がり、また横になる。全く際限もなく繰り返しているなあ。立ち上がるのを忘れたり、横になることを嫌ったりはしないものさ。真っ当な人間とはそういうものさ！　いや、魚だって横になって眠るのがいるそうだよ。でもな、もしもあのとき、母が送ってくれ

た根室への切符が届いていたら、空襲にも遭わず、もっとましな人生を・・・・・。そう思うことがあるんだよ。

地獄だったな。今でも無数の目玉が川底でぎらぎら光っているんだ。川のなかは炎に追われた人々で一杯だった。街は燃えていた、空も燃えていたよ。泳げなかったおれが何故生き残ったのか？　おれはその核心で目をつむる。そこをすっ飛ばして生きてきたんだ！　戦争と言うやつは歳をとらない、何時でも昨日のようだな。それにくらべて、平和は歳をとるね、間延びした時間は、あくびでいっぱいだ。なに、おれが残滓であることに文句はないさ。おれは死に損ないだから。その証拠におれには腐敗の自由が残されていた！

――おまえは戦争のあとでも人を殺したかったか？

男の顔がそっと揺らいだ。男たちが無言で死体を回収していく。

驚異的な進歩をとげたというこの社会で、何千もの何万ものクラクションやブレーキやエンジンの音が同時にわめきまくるから・・・・・。おれたちは神経を震わせ、空虚を確かめ、老いを加速させ、ようやく築いた平和の道の上で子供たちは戦争ごっこをはじめる。

――そうさなあ。思いはのこるさ！

――ふわふわ、だらだらしているとき、ぼくは自分が何を望んでいるか分かっていました。何故なら、そんな時、僕がどうなりたいか、考えられたからです。僕の内面が僕の外面をつくっていくのを感じていました。僕は世間から不良といわれて退けられ、無能と蔑まれてきました。でも、もしも、あの時、あれが、合格通知が届いていたら・・・・・。僕は今の僕ではなかったって、わかっています。

老人姿の少年は我慢できなくなる。自分自身を他人が誤認し続けると言うこと、僕自身が僕自身を誤認しはじめるということに・・・・・。

――もうすぐ、僕は、がまんできなくなる、切れてしまう！！

空はベールを張り巡らし、その間を風が行き来し、ゆったりとした襞をはためかせる。ご機嫌よう！また明日！　お逢いできて嬉しいこと！

世間の人々は何と優しげな会話で埋まっているのだろう。

それなのに、僕は、誰かを殺したい！　あいつも、こいつも、そいつも！

その気になれば、恋人くらい見つかるだろう。でも、もしも、あの時・・・・・。

喜びの太陽は今日も昇らないだろう、なにもかも、めちゃくちゃにした後で、漸く、静かな時間を獲得したのだ、僕は自分の過去を振り捨てて歩く。

わたしは皆から遅れて歩いていた。誰のせいでも、自分のせいでもなく歩いている。大声が叫んだ。
――皆さん！　わたしたちは、遠い昔から、いろんな命をはらんで生きて来ました！
――なーに？　はらむって何のこと？　わたしはずーっとこの命一つでーす。
誰かが応えている。
――へーっ！　何百年も？　その命一つだけ？
――ええ、こんな姿をしているのは、ただ古びたというだけで、ずーと一続きのわたしなんです！
みんなだってそうなんでしょう。違うんですか？
大声はマイクだ。マイクが話しかける。
――お互いに、生まれたときのことを、死んだ時のことを忘れ果てて、気にも止めないでいるんですね。今日は、何かの力によって何万人もの人々がここに押しかけて来ています。うまくいけば、人ごみに紛れて、産み逃げ、殺し逃げしようと考えている人もいますでしょう！　あなたが、あなたの夢に反して、あなたがあなたの才能に反して、心情に反して、愛に反して、現在こうあるのには理由があったはずです。必ず、理由があったはずです。転帰があった筈です。生まれたときからの忘れて

いることを思い出して下さい！　みんな、もしも、あのとき！　多分あの時！　と、そう思って集まって来たのでしょう？

聴衆が息をのんでいる。

テレビの催眠効果に誘われて、こんなところまで来ているわたしは、葉書をバッグから取り出して、行き先を確め、地図を思い浮かべ、イベント会場に続く列から脱出するが、巨大な会場は半回転するうちに趣を異にする入り口が幾つとなくあり、それぞれ別世界に開いているようにわたしには思える。

この埋め立てられた人工の島を囲んで、青すぎる海が見え、太陽光が虹をつくって垂直に立ち上がり、穏やかな昼が耳をすます。

逡巡したあげく、わたしは一つの入り口から入り、滑る道路に乗って人々の行く方向へ、ゆっくりと移動する。

横に少女がいて、萎えた唇を微かに動かし声をこぼしながらいく。風変わりな舌の位置でする発音。

――かあさま！　かあさま！　かあさま！

此処には、老婆の少女姿も多いのだろう。かあさまと言ったからって、少女とも言えない。

老婆姿の少女も、少女姿の老婆も、老婆姿の老婆も、老人姿の少年も、少年姿の老人も、老人姿の老人もいて、友人にも、恋人にも、夫にも、子供にも、社会にも背かれて、ずっと独りぼっち、微か

に呟いている言葉は同じものだ。
みんな種も仕掛けもない生き方をして、生まれた時のまま、何ひとつ自分に手を加えていないようだ。母親に先立たれた子供たちが、母親に捨てられた子供たちが、母親に殺された子どもたちが。母親を捨てた子供たちが、母親を殺した子どもたちが、囁いているのだ。
――お母さん！　かあさん！……。
鼻に皺を寄せて、突然少女が大声で叫んだ。
――ママ！　ママ！
耐え切れなくなって、少女姿の老婆が叫ぶ。
一呼吸の間。周囲から、ぱら、ぱらと臆病そうな拍手が起こり、ぱら、ぱら、ぱらと、もっと気弱そうな拍手を巻きこみ、ぱら、ぱら、ぱら、ぱらと、もっと消え入りそうな拍手を飲み込み。更に、恥ずかしそうな、少年たちや老人たちの拍手を乗せて、もう、拍手が鳴り止まなくなる。
みんな、共感を持って受け入れ、魂を浄化した気分で、同類といる気安さで。共鳴原象を起こしたように鳴り止まない群衆。
わたしは、そのことに驚いてしまう。
人生でたった一つ確かなことがある。それは誰にも母親がいたことだ！！　それだけは誰にも肯定

できることなのだ。つぶやき続けて、墓へ、老人ホームへ、それより相応しいと思っているのは、孤児園に入ること！

禁じていたものから開放され、みんな、恥かしさを捨てているのだ。少女の乾いてうろこ状になった唇の薄皮が、なめらかな新品の唇の上を滑りおち、少年が額の皮を持ち上げると、びっくりするような青白い目が現れる。この群集から飛び出す勇気が、わたしに正気を引っ張る。

わたし自身は自分がいつも何を呟いているのか、いないのか自覚がない。老いてもいないし、少女でもなく、中途半端で怠惰、もしかすると老人ホームか孤児園のどちらかに入りそうだ。こんな場合、わたしが何を呟いているのか、聞いたなら教えて欲しい。

ココ会館は２３階建のビルで、全館空色にいろどられ、窓が空を映し、建物の存在を不明にしている。

廊下の行き止まり、鏡で出来た壁の前に女達が十数人いて、はにかみながら囁きあっている。本物の姿や、化け具合の出来不出来を、判定しなければならない破目に陥ったらしい。

わたしは顔を鏡の中の誰かに見ている。上から下へ、髪から額、目から口、胸から腰、腰から足まで、ひとわたり見終わるまで目を放せない。どこで目の向きをはずしてしまったのか、腰から足にかけて、隣にいる緑色の女の下半身に繋いでしまう。緑色の女の下半身から上に目を戻していく過程で斜視になって、自分自身の顔に到達している。

わたしの下半身が別の誰かと入れ替わって颯爽といく。あの時のように……。

生まれてから、一度だけ行ったことのある銭湯。クリーム色の光が湧き上がる生あったかい湯気の中、わたしが体を洗っている前は横に長く連なる鏡になっており、鏡の下の方は空いていて、向こう側にいる女の裸の下半身が見えていた。

わたしの鏡に映っている上半身は、向こう側の女の下半身と連なって一つの身体になっていた。わたしの手は首を擦っているというのに、下半身は向こうの女の手でせっせとシャボン玉の入道雲を作り上げられ、お湯をざぶんとかけられる。

――いや！　また触った！

わたしが頭から湯を被って顔を拭くと、わたし自身の下半身は思いがけなく、すらりと可愛いい少女の上半身をのせ、軽々と運んでいってしまう。わたしときたら下半身なしで、座ったままの形で立ち上がれない。

今此処に、何人かの身体があり、何人かの目があるが、どんなに目を見張っても、みんなの目は小さく、ふらふらとミミズのような身体の間を浮遊し、ストローの穴から覗いているようなものだ。

見るものを信じる限り、わたしは少女と連なり、老婆と連なり、いたるところでどんな組み合わせで構成された人物もいることになる。

わたしを形作っているのは夥しい数の光の粒子で、液晶画面の文字よりも千変万化に人を描き出すことが可能なのだ。誰がそのキイを操るのか、わたしにはわからない。

この機械は単純構造で、光の粒子はピンクとブルーしかない。

ピンクは若さ、ブルーは老いを現わし、ピンクが光ってブルーが消えているのが子供、ブルーが光りピンクが消えているのが老人、ピンクもブルーもほぼ同じに光っているのが、中年ということになるらしいが、混ぜんと混じり合うものもあり、上半身と下半身がピンクとブルーに色分けられる中年も、一秒/一分、一時間、或いは一日ごとに、ピンクとブルーに交替するという中年もある。少女姿の老婆も、老婆姿の少女も、ともすると中年女なのかもしれない。

わたしは見たままを信じ、鏡の向こう側を伺って前にでる。

中の一人は、壊すことのできるものや攻撃相手に飢えていて、鏡の壁に突き当たって稲妻になる！雷が湧き起り、目の中に暗がりがきて風が吹き渡ると、爽やかなかおりがくるが、嗅ぎ直せば血の匂

いだ。
わたしは血の循環などと生臭い付き合いはしたくないのに、傷から血が滴りおちる。
窓から見ると、宇宙の重心が空に移っているのだろうか？　空の一点に向かって人々が、動物が、家が昇っていくのが見える。いや、落ちて行くのだ！　誰が世界の軸を回したの？
つややかな赤い石の床には黒い三日月模様があって、この建物の中の現在位置を示している。どちらかに曲がれば満月や星型もあるだろう。金泥を塗られた植木が二三十本並んで、交叉する通路を遮るから、その向こう側に目的地がありそうに思われてくる。わたしは植木の間をつき抜けようとするが、そこもまた鏡で左側が本物なのだ。
壁にきっちりはまりこんで蝶ネクタイの男がいる。
――並んでいる植木は、鉄の壁ですよ。
不意に現われた老婆が植木鉢を倒して向こうに突き抜けて見せる。
続くわたしの横隔膜も喉笛もへの字への字、口も眉も何処もみんなへの字になって、どちらかへ。不服いっぱいに転がりこむ。
オカッパ頭の老婆が振り向いて、わたしの腕を引っ張る。
――ちょっと貸して！　持ってらっしゃるのでしょう？

――何を借りたいの？
――これを読みたいんです。眼鏡、眼鏡を貸してくださいな！
――眼鏡？　近視？　老眼？　わたしは若いのに、そんなもの持っているわけないでしょう！
――あら、近頃は、ほら、目が遠くなるにつれて、見た目だんだん若くなる方がいらっしゃるから、お聞きして見ないと分らないじゃありませんか。ここは目的地なのかしら？　読んで下さる！
オカッパ頭の老婆の持っている葉書を受け取って、わたしは惨めなほど落ち着きを失ってしまう。老婆の顔がわたしの顔すれすれに来て、二人の言葉は脇の下から這い降りる。
――お読みになって下さい。何をたじろいでらっしゃるの？
――これ、あなたの受け取った葉書ですか？　…この文章はわたしのところに来たのと全く同じよ。
わたし自身がわたし自身に当てて出した葉書の文面と同じ。それに受取人も差出人も同一人、老婆から老婆自身への葉書だ。
――あの日、あなたがポストに入れた葉書は、ぴちぴち光って流れる真昼の時間をどう過ごしたのか、あなたの郵便受けに戻ってきました。あなたに郵便が来るなんて珍しすぎるから、あなたはぽかんとして、葉書を投げ込んでいった郵便配達夫の人型と鞄型の陽だまりを見ていました。宛名も差出

人も筆跡もあなた自身の、凡そ見るに値しないこの葉書を手にしたまま、ドアに押し込まれたように部屋に入って、何を怖がっていたんです？　あなたは裏面に文字を書かずに自分宛に葉書を出して、果して届くかどうか、郵政が死に瀕しているから、郵便鞄に人工呼吸をする意味で、実験して見たに過ぎないのに。いつ、どこで、何から滲み出たのか、葉書の裏に文面があった。

〒[…お寂しいことでしょう。お気の毒に思います。お預かりしてある大切なものをお返し致しますので、７月７日、ココ会館ビル２３０８号室にお越しください。なお、電話によるお問い合わせには、応じかねます]

そういうわけで、いままで、ポストはあなた宛の手紙をすっかり飲み込んで消化してしまっていたのに、今回に限って配達してくれたのでしょう。ねえ、当たり！！

――なら、もう一度これをポストに戻したら、この文字、消えて帰ってくるかしら？　「受取人不在」の付箋を貼ったら？

――石を投げられたら、投げ返すか？　でも、そんなことをしたら、また跳ね返って、あなたが二階建になるかも？

わたしは推理することをやめ、よわよわしく鼻かぜを引いたような顔になる。老婆は葉書から目を放し、改めて期待を込めて周りを見回す。

ホールにはテレビがついていて、その四角のなかで見えること、聞こえること以外はなにもおこらない、すべてが澄まして画面だけが、老婆自身と同じくらい親密に入り込んでしまう、間抜けなあなた。

老婆がわたしに近づき重たい瞼を上げる。

――ああ、あなたはわたしと同じだから分り過ぎるのね。あなたはテレビ宣伝していたイベント会場に紛れ込んでいたでしょう！　たしかあなただった。あなたの叫び声を聞いたわ！　確か・・・。

オカッパ頭の老婆は腕を上げてそれを遮ってしまう。わたしはぼんやりしていても、髪の毛一本の先で考えているという自覚だけはあって、気付くと、その一本が抜けてしまう。

――抜け毛があっても、まだ、三十代、いや、三十八、わたしの目は1．5よ！

少女姿の老婆は、染めきれない白髪の先をぴかぴか震わせる。

――ここは目的地なんだから、すぐに誰が書いた文か？　何を返してくれるのか、解りますよ。それにしても、あなたと同じじゃわたしだって、嫌！　気に食わないわ。あなたと同じということじゃ……。同じ文章では、わたしの人生の何の足しにもなりはしない！

わたしは老婆と話し合っても、自分にしか通じない言い方で、やがて口を閉じる。

独り言を洩らせるほどに親しくはないし、自分にとってさえ、自分は誰かだ。

目的地はこの建物の中、すぐそこ、もう歩き止まる筈なのだが、二人ともなんとなく遠回りして、目的地を作らないために歩いている。

――びくついているのね！

老婆の知人は誰もいない。ここだけではなく何処にもいないのかもしれない。

本当に老婆姿で老婆と自認している数人が、ベンチに腰を下ろし、若つくりの老婆が多数立って待ち、ひそひそした時の刻みは進まない。

わたしには本当のところ、どう考えても、ここに来た意味がよくわからない。

赤い扉があって、その中から誰かが、暫く待てと合図を送ってくる。

――そのうち、時間がざんぶ、ざんぶと音をたてて押し寄せてくるでしょう。

わたしの前の豪勢な金色の腰がぶつかってきて、跳ね返すと、派手に縮緬皺を寄せて縮み上がり、謎ときのしようがないと思わせる。

これが何かの罠に連なるのなら、早く蹴落としてしまいたい。わたしに限って言えば掴まえるのに時間は要らない。動物や子供、狂人なんかは、唸り鋭い爪で引っ掻くだろうけど、わたしは無抵抗！戦うことはしないのだから・・・・・。

突然、大声が降ってくる。

――みなさま、お集まり下さって有難うございます！　お待たせ致しました！　それでは、本日、あなた方の過去を、みなさまに、未来の如くお届けしたいと存じます！！　あなたがたの過去を、未来の如くお届けできることを、わたしたち社員一同、大変光栄におもっております！！

この孤独な男女の顔の上を光が走り回る。小躍りしたい衝動を押し殺して、薔薇色の耳をした少女たちがグループをつくる。人々は司会者の前を蟹のように横に歩く。彼らを囲む円の中に入りきれない人たちが、中央にいる者に押し返され、退けられたものたちが、軽々と一線を越えてしまうのが見える。

――過去？　過去を利用して、何か脅迫するつもりかしら？

――だから浅い過去しか持たない者と、深くて遠い過去を持つ者とに、区分けし、脅迫整理しているのよ……。

――お届け出来ると言うことは？　お楽しみというのは？

――福引みたいなものです。

誰かが答えている。

――あなたの欲しいのは、あなた宛のメールを食った配達鞄ではありませんか？　手紙？　ああ、それなら、あなたの過去は羊のお腹のなかでしょう！

――そうよ、楽しみとはこんな謎解きを指しているのではないかしら。謎の出題者はだーれ？

少女姿の老婆たちが、ずっと立ちつくしていて、自然に前屈みになってしまう背を、同時に自覚でもしたように、ついっと伸ばした。

――取り越し苦労することはないわ。どうせ私、過去をむしり取られるほどの人物じゃないんだもの。指輪の数、石の大きさを見れば、ばればれよ！

――あら、嫌だ、むしり取られる側かもしれなかったじゃない。夢はみるものよ！

老婆たちは短く笑い、目を活発に動かしながら椅子のある方に移動していく。

澄まして椅子に腰掛けていた少女と、椅子を譲られた少女は、うなずきあっている。

――お互いさまね。後で交替しましょう！

どちらも本物の少女である。どちらも本物の少女ではない？　どちらか一人が本物の少女である。

今のところ、わたしの息の入れ方、目の擦り方でどちらにも見えるらしい。

顔の正面から当る光だけで、自分を他人に見せて、わたしは少女姿の女達の中にいる。

一日のうちに何が変わったというの。わたしがサバを読んでいるにしても、もともと老人ホーム行きでも孤児園行きのどっちでもよく、平気だったのだ。いまその椅子に腰掛けたのがわたしでもありうる。

あなたには未来と言えるほどの未来はなく、過去と言えるほどの過去もない。はっきりしていることは、生きている誰にも手紙を出したことがなく生きている誰からも手紙を受け取る当てなどないと言うこと。

当てがないからといって一通も来ないということではない。何十通来ることもありうるし、来ないこともありうる。

何も来ないからと言ってあなた宛に一通も手紙が出されなかったと言う証拠にはならない。そうよ、何千通投函されたかも知れないジャン、わたしは欲張ってみる。欲張った結果、ここにいるのかもしれない。あなたは皆に若く見られて、何を待つのか知らない者たちの、わくわく溜まりのなかにいるのだ。

司会の男は目に覆いかぶさってくる髪を払うと、右手に持っている手紙の束を高々とかかげる。

――昔、何十年かまえ。遠距離コミュニケーションが主として手紙だった頃、ある男は新品の郵便鞄を与えられて、暇があると真剣に磨きあげ、かっこよく逞しい肩を反らせ、街を闊歩していました！

しかしだんだん手紙以外の大型郵便物が増え、鞄のなかに納まりきらなくなったのです。男は徒歩から自転車に、そしてバイクに乗り替え郵便物を籠に入れて配達しました。それでも、あふれ出ている分を消化するのがやっとだったのです。そこで男は考えました。

「手紙などたかが紙屑じゃないか。届いたところで不幸の始まりさ・・・」男は手紙を配達出来ないことを悪いことだなどとは思わなかったのです。殆どがダイレクトメールです、勇気さえあればそんなもの直ぐ棄てることも出来たでしょうし、辞表を出せば責任から逃げ出すこともできたでしょう。そう思いながらも男は何年か、ともかく勤続したあと辞職することにしました。郵便配達をやめることにしたんです。そこで、汚れきった郵便鞄をごみ箱に押し込みました。ごみ箱の中は腐敗した食物でいっぱいでした。押し込んだ鞄のために蓋が閉まらなくなり、隙間から蝿が湧きあがって、ツィーンツィーンと飛び出しました。あとからあとから、後続部隊の蝿の雲が箱の中から湧き上がって、鞄ははじき出されて、ごみ箱から飛び出してしまったんです。男は背を押して突き落した筈の鞄に恨めしげな顔で甦られて、びっくりしました。恨めしさに蝿の雲を浮かべて膨れ上がった鞄をその男は慌てて又も肩に掛け、興奮し続けて、それでまた何十年も配り続けました。あなた方にはその苦労はわからんでしょう。わたしたちは、あなた方を怒らせない為に按配して話しているのですが、配達されない郵便のために犠牲になったのは、あなた方ばかりじゃなかった。鞄もバイクも、その男もだと解っ

てもらいたいのです。昨日も配達されなかった郵便物でいっぱいの貨車が発見されました。今でも不幸が繰り返されているのです。

ほうら、この鞄！　見えますか？　もう、誰かの首にぶら下がろうと騒いでいるんですよ。口にするさえ恐ろしい。何時だって鞄のなかに手が入らないほどの郵便物なんです。よく耳を澄ましてごらんなさい！　郵便鞄が膨れ上がって破裂する音が聞こえるでしょう！！

なにか鈍い音がして、司会の男が見えなくなる。

赤いドアを押し倒し乾いた息を吐きながら、人々は転倒している司会者を弾き飛ばし、部屋の中へと雪崩れ込んでいく。部屋のなかは一面、封書葉書の山だ。

――こんなに！！！　わたしは押されて、つま先立ちの小走りになる。

老爺姿にも、少年になる術も性転換も、マスターできていないらしい男が二三人、埃の汚れを額から頬に斜めにこすりつけ、封書を両手に鷲掴みにしお手上げのポーズをとる。その足の上で浮き沈みする郵便物。

――古い手紙ですよ。

――古くはないさ、まだ封が切ってないのだから。

――真新しいってことになりますかな？

――最近のものだってあるわ。

――あってもないと同じ、紙屑なんでしょう？

何故か、靄の立ち込めようとする朦朧とした出生前の記憶のようなものをわたしは踏みつけているのだ。手紙の上に立ち尽くし、ここはどこ？　鳥が耳を澄ましてあたりを窺うように首をきょときょとさせ、試みに餌を啄ばむという俯き方で、わたしは一通の封書に触ってみる。今から二十五年前、見知らぬ宛名だ。

――これは、犯罪！　二年や三年のことではなく、郵便史何十年分かの怠慢の集積！！　郵便局に置くのが恥ずかしくて、長い間、こんなところに隠匿されてきたのよ？　これは個人だけでなく、組織的に関与していたことになるのでは？

――そのたった一人の郵便配達夫の話ではないわね。一体、何人の配達夫が、配達業務を放棄していたんです？

――それともせっせと此処に配達を続けた集団があったのかしら？　ちっとも配達されないのは、孤独のせいだと諦めてきたのに、このありさまは何？　配達夫にだって良心や責任感くらいはあったでしょうに……。

――このなかに、わたしの運命を変えたものが入っていないと言えますか？　わたしだって、もし

も、あのとき、そう思って生きてきたのよ。

――そうです。そうなんです！！

――そうです、そうなんですよ。そうなんです！　今日ここに集まってこられたみなさんは、みんな、もしも、あの時！　そう思い続けて、ここに集まって来られたのです。

司会者は跳ね飛ばされて、転倒したとき負傷でもしたのか、頭を包帯で覆って、高い台に猿のようによじのぼる。その真剣さが笑いを封じている。

一番せっかちな者から、郵便物をかき回し始める。

――この不名誉な事実が発覚したとき、当社の幹部からは、焼却して責任回避するよう、至上命令がだされました。しかしわたしたち社員はそのことによって、運命を狂わされてしまった人々がいたのではないかという反省にたち、幹部の命令に反しても、配達を開始したのであります！！　すでに、三分の一は配達が終わり、悲喜こもごもの反応が伝えられて来ます。そこで、まだ配送されていない膨大な郵便物のなかから、もしも、あのとき！　と、思い続けてこられたみなさんによって、ご自分宛の手紙や葉書を直接受け取って戴くことと致しました！！　未配達のピークはここ五年間と、十年前から二十五年前の十五年間と、三十年まえから、四十五年前までの十五年間であります。ここにあるものはほぼ、その三つの期間のものです。青いテープを超えた向こうには、よほどの年配者でない

と用はないと思います。あ、あ、あ、戻って、戻って！　間違えて探し回っても、縁もゆかりもない亡者ばかりが出て来ることになるでしょう。まあまあ、怒らないことです。お若いおばあさん！　それは、猫や鼠でさえ、無視したんですよ。齧られた跡もありません。さあ、まだまだ、間に合うかも知れないのですから・・・・・。グッドラック！！　わたしたち社員は、みなさんの幸運を祈ります！！！

誰かに放り上げられて、螺旋を描いて緩やかに降ってくる葉書の矩形が、わたしの耳をかすって肩に積っては滑る。

黒枠の葉書はわたしの死亡を誰かに知らせるもの。自分宛のものを見つけたとしてもその場で捨て場を探さなければならないのかもしれない。

オレンジ色の地色にスキー姿、青い雲のなかグリーンのジェット機が消印に鼻先を削られている切手。紫の地に鮮やかな切り口を見せるレモンは、皆既日食の紅炎をネガにしたような消印に蝕まれている。

――こんなことをして、孤独な者達が見落とした相手を、過去から本当に掘り出すことができるだろうか？

――さあね、もしかしたら、過去の沈黙の中から潜水夫のように現れてくる、怠慢なあいつらを、

この戦ったこともない内気なものたちが捕えるかもしれない！
――恐らく読めば時間の襞のなかに隠れていた未発見の自分自身に救われることになるでしょう！
密封されていた気の毒な若い頃の自分や、愛犬や、両親を救いだしてあげたらいい！
――そうかなあ、新しい苦悶の餌食になって、もっと狂って、正常な生活に戻れないのでは？
――魔法の山に到達したのなら、ありったけ抱えられるだけ抱えこめ！　退屈なら、現在に不服なら、他人宛の手紙からだって、未来を拝借したらいいんだ。そのくらいの根性がなければ、敗者復活とはいかないのだから・・・・・。
映画のスクリーンにクローズアップされた少年の顔のなかを、郵便物らしいものを引き摺って男たちが行く。日輪を散りばめたプリント模様のプリーツが拡がり、運ぶものたちの足に巻きついていく。
一通一通丁寧に裏返して、そこの誰かの指は単純な機械。後向きの誰かの、ベルトのないベルト通しが弛んで葉書が一枚引っかかっている。
突然、みんなは探すための極意を探し当てたように、山のようなダイレクトメールの中から自分宛のものや、自分の書いた手紙を見つけ始める。
生死を越えて新品の死体らしきものを男たちは引き摺っていく。風がそよぐたびに、無数の花びらが、男たちにも降り注ぐ。

――重すぎるよ、もっと軽やかに人生を楽しむんだ！　ステップを踏むその足で、死体を次々蹴落として。笑い転げながら……。

頬を膨らませた少年が覗き込んでいる。少年は隠れる、要点から逃げ続ける推理みたいに！

――投函した者たちは、忘れ果てているだろうに……。

くばり遅れた手紙は、色々な物語に出会い、今華やかな犯罪として花開こうとしている。これが届かなかったためにあった開放感を誰も思い出したりはしない。五年前、二十五年前が見つかるなら、五十年前も、過去に向かって進めるなら、逆向きで生きること。今まで生きてこなかった人生の逆転を目指して！

――早死にはしたくないわ。だって、わたしたち、逆転ホームランだって、打てるのよ！！

そう思うことで、みんな貪欲に、生まれた頃やその先まで、探したくなってしまう。

――目が利かないなら鼻が利くでしょう？

――封を開けなくたって中身がわかるのかも知れない。もっともっと、鼻に寄せてみるんだ！

わたしは健康そうな愚かさを顕わにして、来る宛のある手紙を思い出そうと首を傾げ、潮干狩りの要領で、手を熊手にして手紙をひっくり返していき、蛤でも取り出したら、昔と同じ口笛を吹こうとする。

封がはげてぱっくり開いた口が話し掛けている？　下の封筒の傷口と、上の封の傷口が噴出し笑いをする。突風にあおられ、入り乱れた声がワーッと来る。

――息を吹き返すのが早すぎるんだよ！

まだ受け取り人がいないのに膨らみきった封筒を、男たちが慌てて叩き潰している。

わたしは探し続けて、宛名を見ないで、ある一字だけに目印をつけ、見付けたものを集めて、そのあたりをわたしの領土にしてしまう。他の郵便物は沈没していき、こんな宛名のものばかりだが、これがわたしの名前だったかどうか？　この楔形文字が？　こんな書き方もあったかどうか？　首を捻る。

立ち上がってみると郵便物でできた白々しい丘が続く。姿勢を低くしている誰かの旋毛の周り、羽毛のような細い幾筋かの白髪。わたしはつまんでみたい誘惑にかられるが、つまもうとしても触れない。一種の幽霊が立ち上っているのだ。

――余程昔の、お手紙を探していらっしゃるの？

――ここがあなたの場所ですか？

――大体集めてみただけです。

誰かの郵便を集めて置いた領地はまだ未開のままだ。痩せこけた肩に髪を埋めて、瞑想し、かあっ

と方向を見据え、見据えた先から自分宛の一通を拾ってくるのは老婆姿の少女だ。
遠くを見て、体を伸ばしきったまま何処にもぶつからずに走って、何処までも行くことが出来、何をするにも、いくらでもいい手が出てくる、怖いもの知らずの始まりが来ていることに、わたしは気づく。
生きるための第一日目だというように、わたしを形作る薄明かりの老いの部分を消し、わたしは若さを光にしている。中年のわたしは少女に追い駆けられるように、其処此処を通りすぎ、遂に追いつかれて、鼻、目、口、知っている限りの少女である自分の顔を思い出す。窓際に行き、自然光で見る老婆たちの仮面じみた少女姿とは違う。わたしの少女は、すみずみまで絶対に誤魔化しのない、しっかりとした驚異的な本物なのだ！　幻覚でない証拠として、曇りも臭気もない新品の肉眼で見える確かな少女らしい体験が、もうすぐくる。
触ると、手紙はかすかな湿り気を帯び、二十数年前の少女は、今と比較にならないほどの強い日差しにさらされて、さらさら髪を靡かせる。

十年前の消印、裏を舐めて貼った人物の舌裏のざらつきが分かる。切手が曲がっている。わたしが両手に封筒を挟むと、封筒の中から解読出来そうな信号がくる。同情を求めて叫んでいるのだ。

――時には知らない誰かの秘密に、かかわり合ってもいいんじゃないか！！

〒　［伯父様のおすすめで、とうとうオーストラリアに来てしまいました。広い広い草原をカンガルーが、ビューン、ビューン、一っ飛びに跳んでいきます。目を凝らせば凝らすほど、その速さにびっくりしてしまいます。許されるならわたしも、カンガルーの袋に入って跳んでみたい！

お祖母さま、泣いていらっしゃいませんか？　お声が聞こえたような？　皆にどんなに勧められても、どんなことがあってもお祖母さまと御一緒にいるのだったと後悔しています。

本当は旅行になど出掛ける気分ではなかったのに……。わたしのいないうちにお祖母さまの身の上になにか起こるのではないかと心配でなりません。

外出は控えていてくださいね、飲み物にはご注意ください。油断しては駄目よ！！　心を赦しては駄目です！！　こんなことを書かなければならないこと、残念でなりません。一週間後には帰ります、待っていて下さいね。

わたしは元気です、お友達もできました。飛行機でご一緒だったんです、お祖母さまをご存知だとか？　大村信也さんとおっしゃいました。

それでは、何かあったら、弁護士の山水さんにすぐにご連絡ください。
お祖母さま大好き！！　大好き！！　早くお会いしたいです！！

オーストラリアから　愛をこめて、ゆき　］

読まない前に読んだことのありそうな、誰かが待っていた覚えのありそうな文面。同情も笑いも遅すぎるが。わたしにも地の果てから果てまで、弾んで跳んだ経験のある足と連結した記憶がある。
誰かの運命に影響のありそうな響きがくる。全部の音を拾うことはできないが、地獄谷へと転げ落ち、時が薄れていくような。ソルックル、ソルウル、ルルッレ、ソルゥレ、ソルックル、ルルッレ、ソルックル・・・。
――運命を狂わされた人は必ずいるのよ！

わたしの後ろで動悸の静まるのを待っていたらしい老人姿が、はっと振り返る。
――合格通知がいま届いたんです。入学させて下さい！！　僕は難関を正々堂々突破していたんですよ。これは、不正入学の代替として排除されていた合格者の訂正通知です。・・・勿論そのときは僕だって何度も確かめましたよ。自信がありましたから・・・。でも、不合格だったと答えるだけでした。

僕は秀才の名において失敗が許せなかったんです。僕の誇りにおいて、それ以上追求することができなかった。それなのに、今頃になって、不正入学の代替になっていたなんて！　どうしてくれるんです！　それがわかっていたら、僕にそれがわかっていたら、こんなみじめな敗北の人生を歩いてはいなかった筈です！！

――今からでも、遅くないんじゃないか？　何年たっているの？　五年か？　多分？

――ほんとに？　もしかしたら、今からでも、遅くない？　ほんとに？

もしもと、多分が、沸騰する。わたしにむしゃぶりついているのは、恐怖だろうか？　それとも期待か？

〒　ソラ、ソラ、ソラ様［愛しています。ずっと、ずっと、愛していました。これを受け取ったら、僕のところに来て下さい。明日旅たちます……］

背から首に手紙を突っ込まれ、戸惑っていたわたしの老婆が、突然、目から涙を噴出させて走り出していく。老婆は少女のような恥じらいをみせる。さっきのさっきまで、長い長い間、気の遠くなるような日々。徹底的に無視され、愛されていないと思い続けて来たのに！

――これからでも遅くないのね！

風がそよぐ度に無数の花びらがわたしの老婆に降り注ぎ、花に群がっていたブンブン蜂が突然プーケに変身する。

――娘よ助けてください！

何時間もかかってわたしの少女は来たのか、いきなり来たのかわからない。睡眠のように、時間感覚の向こうからわたしの少女は現れる。

――怖くなんてないわ。だって、老いるなんて考えて見たこともないもの！　何なら、考えてあげてもいいのよ。わたし六十六歳になったのかな？　七十七歳になったのかな？　死者がわたしのなかに、墓地をつくっているんじゃないかと疑って見てもいい！　わたしは墓地で筋肉は盛り土？　これって、怖わーい！！　はずれ？？　そう！

ああ、思い出したわ。わたし、老人になると、こんなになるのよって、いくつもいくつも砂袋を巻きつけられて、よろよろしたことあるんだもん。老人って、すすけた眼鏡をかけて、耳のなかで蝉をかっているんだって・・・。くすぐったくて、死にそうだったわ！

――で、どう思ったの？

――うん、その上に、たくさんたくさん嫌なことがあって、そして死んでいくんでしょう。わたし勘定があわない気がする。でも、嘆いても仕方ないもん。心を軽くすればいいのよ！　笑っていたら、

口を開けていたら、こわばらなくていられる。浮力がつくもの。飛んでいける！

わたしの少女は、埃にまみれたバッグの微かな傷を優しくふく。

――わたしは春の靄が好きよ。靄に包まれ、花吹雪になって飛んでいくの。だから、わたしは、いないのよ。

少女は影のように黒くなる。手紙は続いている。

〒［……急では、あなたも困るでしょうから、よい返事を一週間、僕の一生をかけて待ちます。それから旅立ちます……］

――これって、プロポーズなの？

少女のわたしがいなくなって、自由が縮小していくのがわかる。自由だけは捨てきれないでいたのに……。

――あなたに裏切られて、いいえ、わたしがそう思っていたってことに、なるのかもしれないけど。今、あなたは成功者として世界の上澄みにいるのね。会いたくはないかとおっしゃるの？

――負けるのが嫌か？

――変わったのね、自分が勝ったと思っているんだ！　あれから二十年変わらない方がおかしいのかもしれないけど。わたしにとっては、少なくとも、そんな単純な勝負ではなかった……。

――僕は、きみに、僕を捨てたきみに、勝つためにだけ生きてきたんだよ。僕を見限ったきみを見返すために戦ってきたんだ！　それを、それを、今頃になって、僕のプロポーズの手紙を見ていなかっただなんて・・・・・。そんなまやかしは許さない！　何があっても！

――と、おっしゃっても、あなたがポストに投函してから二十年後、わたしはあなたのお手紙を、今、手にしているの。これは真実よ、現実なんです！！　あなたは突然アメリカに行ってしまった。わたしにはその意味がどうしても、わからなかった。わたしが捨てられたのだと理解したとき、会社からも解雇されていた。密告したのはあなただって囁くひともいたわ。わたしは世間から逃げ出したのよ。何一つ信じることができなくなった・・・。

――僕はきみの大事な、大事な、魂ちゃんを、どんな遠くへだって、吹っ飛ばして見せるぜ！　それを囲って生きてきたなんて言ったって、隙間だらけ、穴だらけなんだよ！！　人生は動的でありたいものさ！

電話の向こうで彼は不良少年のように饒舌になる。

――わたしの心に、あなたは、何時プラグをさしこんだのよ？

――僕も空中というものは好きなんだ。何もないようでいて、だって掴めないだろう。硬くもない、色もない、つまり形を持っていないから、隠れるにはいいんじゃないかと思ってみたのさ。つまり、

魂みたいなものはね、空気なんじゃないかな？　大事にするのよって言ったって、僕、真面目に考えられないもんな！！

彼が、あなたを故意に辱めて平気だなんて、信じられない？　悪ぶっているのは動顛している証拠、誰か傍にいるのかもしれない？　向こうで受話器が誰かに奪われている。

――娘は、あなたの娘は、男に脇の下をくすぐられて、笑い転げて死にました。打ち所が悪かったんです！

彼の妻らしい女が笑った。

――こんがらがるな！　この女の娘だよ！　きみの娘であるわけないじゃないか……。

眠れないのかもしれない、眠らないのかもしれない。時間を数えながら、彼を殺すことを考え続ける。こんな気持ちは生まれて始めて……。わたしは彼を殺したい！　彼の妻も！　彼の子供も！　わたしは飛び移るあなたへ。

彼の息づかいが高まるのがききとれる。優しい唇を感じながら、

『僕は幸せ、僕には何時も変わった歌声についていく、ついていきたい衝動みたいなものがあったんだ……』彼の声が蘇える。

あなたは砂時計の砂が下に落ちきらないうちに、何回でも素早く倒立させる。彼の胸が離れ、わたしはまた、独りぼっちになった。

――不意打ちというのは汚い手だなあ。それが分かっていれば、最後に言い残す言葉が僕にもあったはずさ！　僕はきみを忘れたことなんて、なかったのだから‥‥。

わたしは彼の病室にいる。どうしてそうなるのか、わたしには分からない？　彼の臨終の床に、妻や子の姿はない。彼の長い脊椎を医師は手でまさぐっている。位置をきめ、指先で確かめ終ると、両手でささえて、ルンバールの太い針を打ち込む。医師が太い注射針のなかから、細い銀色の針を引き抜くと透明な髄液があふれ出る。なんという美しさだろう、透明な管が垂直に取付けられ、髄液は光りながら管をのぼっていく。主治医は圧があがっているのだという。一本も二本も！

彼は昏睡のままだ。顔は顔になっていないから、彼の顔は確認できない。遠い日のプロポーズの手紙をわたしが受け取った三日後、彼は昏睡状態に陥る。

何故そうなるのか、わたしにはわからない？　何時かの過去が、わたしの知らない過去が挿入される。犯人は、あなたね！　何故？

病院のなかには既に深夜が来ている。冷たく黒い闇の外は、ひたひた寄せてくる潮で、昼の汚れを消して磯の香が流れている。何時もと同じ時刻、海まで強いライトの行列が出現する。

〒[母と一緒に住むことになりました……嫌、これでいい、ここに母一人で住むことになりました……]

目に見えないために宙に浮いていた思いが、そんな言葉に着陸する。

わたしは自分自身の少女を待っているのに違いないが、現れる気配はない。外から来る筈がないのに、外に向って聞き耳を立て、ロボットみたいに時々手をぎこちなく動かして髪を撫でつけ、鏡の中全体をよく見届けようと、バク転したり、遠ざかってみたりする。待っているのは他人ではなく、自分なのだから、何の用意もいらないのに、下に落ちている微かな糸くずを拾ったり、ドアノブをアルコールで癇症に拭いたり、自分の口をつけた茶碗をとんでもなく汚いものみたいに、こする指がコリコリいうほど磨き上げる。

――窓から犬を棄てるような人を殺したからって、何が悪いの？　そんな酷い人を生かしておけないにきまっているわ。ええ、もう、時効は過ぎたのよ。これは脅迫の手紙よ。こんな手紙、届かなくてよかった！　自白する気にでもなっていたら、ことだったわ。

――さあ、犬に対してだけ人間性を取り戻すといった性格をどう解釈したものかしら？　良心があるなら、自白すべきよ。何らかのつぐないをすべきよ！

――ああら、嫌だ、あなた、わたしたちは常識の圏外にいるのよ！　あなた、犬を一段下にみていない？　その方が問題よ！

開封された手紙が物議を起こしている。

――前科があるんだろう？　知っているぞ……、などと脅しているのと大差ないわ。無実の罪をきせようっていう魂胆じゃないかな？　自分の名前を聞くとき、見るとき、思いっきりポーカーフェイスでいなくっちゃいけないよ！

女の誰かが男の誰かと腕を組んで歩きながら話している。

かって自分の書いた字であったとしても、長い間見たことのない自分の名前を見ることで、頭髪が吹っとび一本残らず消え去るような興ざめがくる。

〒[お祖母さまお元気ですか？　昨年は襖が4枚続きでふわっと、部屋の中を飛ぶほどの台風がありましたけど、あの時から投げ出されたままになっていた、庭の倒木を今日焼きました。

風で倒れた木は幹がびりびり裂け、年輪がはがれているみたい。材木にならないから焚き火をした

んです、燃やし続けるのがなかなか大変で、こつがいるんですよ。
始めたのは朝だったのに夕暮れてもまだ燃やしつづけ、わたしは、その灯りで夏休みの宿題をしました。
誰が書いたのか、閉じてある原稿の全部の厚さは５０センチもあったので、一綴りづつ裏返して、それに計算したんです。
だって母さまは、こんな原稿、今の時代には、とても通用する内容じゃないのよ。と言っていたのを思いだし、再利用したと言うわけです。だがら計算し終った紙はつぎつぎ火の中に入れました。そしたら少年が出てきて、炎をじっと見つめていて、急にいらだち、枝で殴りつけるように火をかき回し、『火の中で、キョキョが燃えているぞ、キョキョが燃えているぞ！』キョキョと聞きましたが、本当は人の名前を言ったんです。キョウウといったのかもしれません。急に炎がとても大きくなり、わたしは紙を置き去りにして、後へ飛び退きました……」
わたしは封筒を確かめてみる。三十二年前の消印が揺れる。
〒「……『まあ、いいさ。おばあ様はもう亡くなったんだし……』少年はどうやって発するのか説明できない妙なまさつ音を靴裏で作りながら言いました。『ばあ様を殺したのはお前だよ。おじい様が一生かけて完成した原稿なんだぜ。命より大事にしていたんだ！　３０００枚もあったんだ。貴重な

写真も挿入してあった。軍神と言われた人の伝記だったんだよ。その紙の裏に計算なんかして廃物利用のつもりだったんだろう。その人が、山本五十六だくらい、お前だって知っていたんだろうが？　生前たった一人、お祖父さまにだけ、伝記を書くことを許してくれたんだよ。おばあ様は何も言わなかったさ。戦争に負けて、世の中がひっくり返ったんだ。さすがのおじい様だって、時代にだまされていたのだろうから。手を加えなければ出版は出来なかったのだろう……。でも僕だって覚えているよ。フロックコート姿で山本五十六に会いに行ったときのお祖父さまの凛々しさを！　お祖母さまも思い出していたんだろう。心臓が溶け去るような寂しい顔をしていた。それなのにお前たちは……』そう言ったんです。で、考えてみたんですけど、もしかしたら、わたしのせいで、お祖母さまは母さまを苛めたんですか？

お祖母さま、あなたが母さまをいじめたやり方を、わたしも応用してみます。

栽培を始めるんです。机の一番上の引き出しは深くて暗いから仕掛けは要りません。お祖母さまは、お皿にご飯を入れて日陰に置けば四日で芽生え、二三日で五ミリ、四五日で一センチ。八九日で三センチになると、おっしゃっていました。毛足の長い見事なカビがお皿の上に銀狐の尻尾のように、こんもり盛り上がるのですよね。わたしは十日目にさっととり、それから風に吹き飛ばされないように、そっと運びます。お祖母様の場合、『こんなに酷いカビだらけの食物を与えられて殺されそうです。助

けてください！！』と、交番に運んで、あの人をこらしめて貰ったけれど、わたしはテーブルまで運んで、自分で食べてしまいます。お祖母さまの意志を引きついであの人を困らせてみたいのです。そんな大切なものに、わたしは宿題の計算をし、妹は下手な人形の絵をたくさん、たくさん書きました。……」

わたしにはあの人とは母だと分かる。銀狐の尻尾を皿に盛ったような毛足の長い見事なカビの記憶はある。老婆の作ったものなのか、単に自然に生えているものを見たに過ぎないのか、硝子についた細かい水滴が陽炎のように消えていった場所は？　台所、温室、戸棚の片隅など？

どうともいい得る記憶の多様性、頭は干からび、記憶は屈折する。レースのカーテンの襞が幾段ものねずみ色をつくり、更にこけ色にくすみ、森閑として生き物など全くいないような夏休みの真昼、祖母あてに、原稿の裏に手紙を書いたのだ。ともすると、わたしの少女には老婆を殺した前科があるのかもしれない。

もし今、わたしの少女が鏡を見たら泣きじゃくるだろう。見ないことで救われているが、何か不満で、どこか無力で、過去の記憶から拾い出す慰めや脅しは何の役にも立たない。

本物のわたしを消して、過去の少女？　未来の老婆が？

わたしは少女から老婆に変ったのだ。だから自分同士で遊びが出来て、記憶で濾過した骨と内臓を

失った張子の少女に呼びかける。
――あなたはわたしの何代目の少女なの？
老婆は聞き続ける。
――　一代目？　二代目？　五代目？
記憶はわたしの中にあって断片を繋ぐ。朝から夜までの陽射しの移り変わりで、記憶の粒子の微妙な変化を見なければ、緑のそよぎも、レースのさざなみも、実物か蜃気楼か判断できない。記憶想起が幻想に浸ろうとするに等しい失敗を繰り返し、飽きることなく、日が昇り、昇りきり、沈んでいき、没し、深夜露さえ結ぶ。わたしは、記憶のさまざまな色彩の変化を見ようとする。
あの頃、何年前のことだったろう。確かな年月も分からなくなった、眠ったとも言えない位の、どっちともつかないあやふやな年月。積み重なったとも、消え失せたとも言えない一瞬。少女から中年女になった年月。額を叩くと粘着するぺったりした手の中の空気が、海ホオズキのように潰れる。
少女時代のわたしをわたしが追いかける、いかにもぎこちなく。
――ファイト！　あなたは笑う。
――十年前の消印に未練が浮上してくるの。待ちに待って来なかった重大なこと、その未着の為に失った素敵なもの、ええ、探し出します、必ず。その差出人は？　あの人の本名は何と言ったっけ。

忘れ去ったのではない、わたしの頭の中に引っ掛っているから出てこないのよ。
――記憶再生装置が壊れているの？　昔の勘違いでしょう！
向き合って言えないこと、電話で話せないことを手紙に書くものだったと言うのに。サービス期間のとっくに過ぎたダイレクト・メールばかりが山を作る。
――　一纏め一纏めにして！
誰かの細く短い白髪は光って弾み、茶褐色の髪のなかに潜りこみ、行方知れずになる。
低いところにある町並みは、屋根のあいだ、あいだにパセリほどの緑をあしらって、地面らしい色合いはどこにも見えない。一部だけが雲の影を映して紺色に見え、何か怪しい液体でも零しているような。急がないと、どの家も住所も名前も人も消えてしまう！

我が家のドアを開けると玄関で待ち受けている見知らない男がいて、わたしを待ち受けていながら、待っていなかったという身振りをする。
――貴方はだーれ？　わたしから電話が？　そう、なら、あなた宛のお手紙はこれです。

――何年前ですか？　私宛ですか？　誰が書いた物なんです？　ほう、ほお、私の過去が永久不滅だと言うことですか？

歓喜に取り付かれていながら、男は初対面の手紙を皮肉な微笑をこめて見ている。

――去る者は日々にうとしだが、みんな然るべくやっており、みんな然るべき場所で生きているというのに、これはまた……ことがうまく運んだというわけですか？

――もう一通？

いって男はわたしを盗み見る。

――これはどうも、お望み通り受け取らせていただきます。何十年もさまよっている幽霊みたいな凄い手紙が届いたというなら、手厚く葬ってあげましょう。果してそんなものが残っていてくれますかどうか？　それも二通も……にせ物を掴ませられるんじゃないでしょうね？

わたしの老婆は時のざわめく郵便鞄の口を開けて、届けるために、行けそうな処までは行って来たと思う。

――それくらいの年月は、あっというまに過ぎて、わたしなど何ひとつできませんでしたわ。

――みんな忙しくしていても、本当はひくひく呼吸をしているだけなんです。それだけが暮すことなんですよ。おばあさん！　誰だって同じことです。人生なんて、あっというまのことなんです。時

にはあーあってのもありますが、それとて突き詰めれば、あっでしょう。おばあさんは、再び恋の始まることを望みますか？

――あなたは？

わたしは言ってみる。質問に困ったら、そのままお返しすること。それくらいわたしだって心得ているのよ。この男はわたしに何を言わせたいの？

男の額の生え際は後退している、目は二重で厳しい見開き方をしているが、すぐに視線の方向が変り、瞼が被さって二重が埋もれて見えなくなり、皺が思い出したように目尻にくっきりと現れる。

――失礼！　煙草を吸っても……。

ライターや煙草を取り出そうとして、男は手紙を取り落としてしまう。わたしは男が拾い上げる気があるかどうかを見守っている。

郵便を受けとったら、わたしの前で封を切ること。読むことで誰が最も苦痛を感じたかを観察しなければならないから。

そんなにぼんやり聞いていては駄目！　警告よ！　殺したいという欲望が起らなければならない内容なら、本来届くべき時から、時効ほどの時間のずれはあっても、いまが昔であるように熱く怒ること。必要あれば報復すること！！

――あなたはその方の怒りを、時間の溝に落ち込ませたまま、永久に浮かび上がらせたくないとおっしゃるの？

わたしは両腕で顔を隠し、あなたは前に出る隙を狙っている。物見高く他人の恋を引き継ぐ気かしら？

男は落ちている手紙を取り上げると、乱暴に塵を払う。あなたが身構えるのがわかる。憎々しいこと！　感じられる敵意。この男は嫌だ！　男の皮肉がわたしを不安にさせる。

と、次の瞬間、男の喉から突然嗚咽がこみ上げ、その目から涙が湧き上がる。次から次へ、ぼうだの涙とはこのことを言うのかも知れない。

憎々しげな風体が豹変したのだ。滝のような涙が頬を流れ落ちる。こらえきれない嗚咽がたちあがる。

――どうして、あなたの前でこんな手紙が読めるんです？　ここで読む気はありませんよ。

わたしはとまどってしまう。

――そのかたは、亡くなられたのですか？

――嫌、生きています！　立派に！　僕など忘れ果てて‥‥。この手紙は拒絶の手紙なんですよ。わかっているんです。来なくってよかった！　僕は、多分、見なくて救われていたんだと思います。

――……でも、そうとは言えないのでは？　彼女からのラブレターかもしれないでしょう？　二通ですもの。愛されていたとは、考えられないのですか？

――私の釈明が欲しそうですね。しかし、あなたがこれを持って来られたのは……もしかしたら、あなたの未来をこの手紙に、見つけようとしていらっしたのではありませんか？　それとも、届けなければならない立場が恨みなのですか？

泣きながら、男は反撃にでる。あなたが、みじろぎするのがわかる。

あたりには誰一人いない。またも鞄がばたばたし、執念深くわたしにつきまとってくる。

予定を変えるより先、配達予定表が消されている。手紙と配達意欲とのつながりが消え、消印の日付がすいすい現在に近づいてくる。折角の古い過去が、憎しみを新品にして嫌われようと小細工しているのだ。

――私の表現が曖昧だからって、怒ることはないのでは？　大抵のことは、計りかねるものなんでしょう！　どっちでもあるような、ないような、言いかねるような……。

逃げなければ……。わたしは男の過去や、自分の少女や、郵便鞄から遠ざかるために駆け出している。

――行き場がないのよ。何処にも！

わたしは目のくらむほど恐怖している。

――怖がるのは止めて！　命からがら逃げ出したのは、あなたの想像力だったのだから。わかってやりなさいよ。誰かが腹の立つほど恋をしているときには、おかしな面があるものなのよ。

――自分に自分が騙され続けてきたわけ？　黙認してきたというわけ？

わたしはまだ老いていて何か飲んで気を紛らすしかない。ワインを飲むと喉が炎をあげて燃え上がる。いまコップの中に映っていた老婆が燃え、燃え終わり、溶けて、溶け残った骨が胃の中で穿孔していく。

想像をなぞりながら、顎を握りこぶし2個重ねの上に置き、細目を開けて、郵便の入っているバッグを見る。わたしのバッグは何時の間に郵便鞄になったのだろう？

目の前の鞄が、わたしに向かって膨れあがる。皮がオレンジ色に変色し、匂いさえ発し始め、わたしは困り果てる。鞄の中から硬いものが突き出している。尖って根を持った炎症。鋏で鞄を切り取ってみるか？

――これは性質の悪い皮なの！

鋏は鞄の側面中央を芯として円を描き、片面を黒い影にして、きらきら動くが、皮は切れてはいない。

手には豆が出来ているというのに、鋏は弱く皮は硬くて、わたしは手の中の豆を見、じりじりする胃と潰瘍の関係を考える。みんな鞄の中身に起因するのよ。

今のうちに中身の手紙を出して見なければ‥‥。どんな凶器が出て来るか？　それが見ものね！わたしは真剣な目付きで首を傾げ、鞄を開けようとする。決してそちらは見ないで、飛び出してくるものを掴まえる準備をはじめる。

べとべとしたものが滲み出し、ぴくっと手を引っ込める。わたしは神経の鈍磨した本物の老婆ではないのよ。慌てて鞄の口を閉じてしまう。

そういえば肩にかかっている鞄に、さっき、吐き気が二段構えで来ていた。確かにいま、その喉のあたりで、吐く勇気と怖れがひくひくし、我慢のならないむかつきを一段、二段と押し上げ、吐き気は老婆に伝染してしまう。

老婆のわたしは、この鞄を置き去りにして出掛けることを考える。わたしには出掛ける自分の姿が想像でき、青のニットシャツの下で揺れる胃袋がわかる。

何のために、何処へ行くの？　本当は出掛けたくなくって、吐き気を耐えているのに‥‥。

臆病になってくるわたしは、そのまま忘れっぽくなって、吐き気も気味悪さも忘れ、こわばっていた体を解き、ふっと自由になって一人で笑う。

――寂しげな姿は止めにして！　わたしの少女は見栄っ張りなんだから！
世界は老婆を忘れ、１８０度回転したように他の関心事に移っていく。
――見えないものがからっぽとは限らないのね。
あなただ！　突然自由が拡がってしまい、わたしの視野におさまらなくなる。

雨のなかでわたしは宙に浮いている。雨はあらゆる色彩を殺してしまう。
――よくもまあ、こけにしてくれたもんだな！　ぼくの誇りがまっしぐらに落下していくのがわかる。・・・わかっているさ！　凹んでいるのも、傷ついて血を流しているのも、みんなこっちだ。それにしても、こんなことで敗者として引き下がっていいものかどうか？　非はあちらにあるのに・・・。無謀な投資、不正経理、役員報酬の巨大化、役人との癒着。もっとも許せないのは祖父のめざした企業精神の空洞化！！　会社の未来など何一つ描けずにいるのだ・・・。
男は雨に濡れて会社の門扉を足蹴にする。
――それにしても、彼らは、なんと、猜疑心と敵意に満ちていることか！　その暴力に対して、そ

の思い上がりに対してどう対抗したら、よいのか？

男は門扉に身を預けて二つ折になる。まるで、蒲団干しだ！　酒でも入っているのか顔がコンクリートの地面を舐める。

わたしは傘をさしかけ、手紙を男の顔に向かって差し出している。逆さのまま、わたしの思考のあとをのぞく男の目が気になる。

――受け取ったら、手放してはいけないと、そう、言われていたんです‥‥。どこを探してもそれらしいものはなくって、それが、これです。宛名は母！　借用証です。

――何！　借用証？　あなたから？　ああ、あなたのお母さんから‥‥。おれの父が？　会社が？何年前の話です？　三十年前といえば、会社創立期のことだな。これは祖父の字。印鑑にも見覚えがある。手違いで配達されていなかったのか？　簡易書留なのに？　何と罪つくりな‥‥。

若い男は体勢を立て直すと、じっと少女のわたしに見入っている。

――いいでしょう。僕が会社から、元金に利子をつけて、とってあげます。現在の金に換算したら、それはかなりなものになるでしょう。

――これがなかったために、わたしは何もかも諦めなければならなかったんです！　家のほかには、これが全財産でしたから‥‥。

――お祖母さんがでしょう？　いいですとも、僕はあなたから取り上げたり、騙したりはしない！　僕は、創業者の孫です。信用してください。ただ現在この会社のなかで、反旗を翻しているところです。たった一人の叛乱中です！　ですから、嫌だったら、他の社員に申し出ることもできますよ。そうなさいますか？

――そうなの、そうなんですね。お話は耳に入りましたから……。でも、いいわ、いいです。あなを、信じます。もしかしたら、これを契機にあなたも復活出来るかもしれませんもの。放置されてきたのには何か理由があったのでは？

――そうかもしれません。多分そうでしょう？　お借りしたのはお母さんからですか？　あれ、おばあさんかな？　なんだかこんがらがるなあ。おれ、あなたを知らないから？　でも、いや、いいんですよ。その借用証は間違いないものですから。持っている人に権利があります。

彼は褪色した青シャツの袖口を丁寧に巻き上げ、口を丸く開けたままだ。

たしかに母の後見人に似ている……。わたしは声を呑む。

――ああ、そう、貴方は……。

この青年は母の彼ではなく、彼の息子に違いない。一世代の年月を潰し去るのも、膨らますのも自由自在だ。

――どっちであっても構わないけど……。これを、会社側に提示して現金にかえて下さい！

わたしは少女になることに成功しているのに違いないから、中年を垣間見せることは出来ない。一世代遡って利子が支払われること！　といっても、遅刻した劣等生みたいに、幾分肩身の狭い思いもくる。

何時間もかかって、わたしの少女は現れたとも、いきなり来たとも思える。睡眠のような静かな拡がりの中から現れたとも。

雨は降りつづいている。会社を囲む生け垣は、みどりの葉を刈り込んだあとから、日陰を解消した葉裏の奥、雨にもうたれず、今、遅咲きの花を一気に開花させる。

――借用証が思い道りに届かなかったのは、不運には違いないけど、あなたにお会いできて、ほっとしているの。田舎の不動産を手放したお金だと聞いてはいたけど、遅配だなんて、説明のしようもないもん！

わたしの少女は秘密を口軽くさらけ出してしまったことで、今話さなければ……という思いから遠ざかっている。

彼は、三人いるかのようにわたしを三つの方向から見る。

――少女と、老婆と、ずっと不在の中年女が見えて？

彼は胸の扉を開けるように、スーツの前を開き、暗い幾つかのポケットを探り、首を傾げ、あたりの空気を煽るように勢いよく閉じる。ポケットの暗黒のなかで山彦が叫ぶ。

――　一体どうやって音をたてたの？

わたしの少女が手品でも見たように興味津々になる。

車が何処かで同じ音でドアを閉じる。男は変身でもしたように、自分の出口を塞いでいるのだ。

――なーんだ、君じゃないか！

――人違いです！

あなたは重力から逃げて川の上を歩いていく。

――ね、ほら、歩けば歩けるのよ。トウ、トウ、トウ、トウト、トウ、ト。疑っているのなら、輪切りにしてくれます！　ＣＴみたいに！

黄色い菱形の光が、男の顔の上を滑っていく。

――人はまず、生きてから、死ぬべきで、死んでから生きるべきじゃないよ。僕は死んだにしては余りにも多くのことを覚えている。あなただって一度は死んだのだよ。僕と一緒に死んだのだから！何時でも僕が証人になるさ！　忘れたのか？　胸にプーケを飾って、口移しに毒薬を飲み込んだことを！！　あのとき、あの子供がいなかったら、僕たちもいなかったことになるんだから！

子供たちの声が追いかけてくる。あの子供は？
――パク、パク、パク、パクパクパク、パク！
――パクじゃない、パパだ！
彼は他人の家を通り過ぎる影。
わたしはもう、何も言わない。
――誰だい？
――さあ？
彼らに抱えられていく少女姿の老婆は恐らく近いうちに、息を引取るだろう。今、
――かあさま！　かあさま！
わたしの呟いている声が、喉で湧き上がり、ゴボゴボ嗽のような音を立てる。
――おかしな唄を歌わないで下さい。間違いですよ。〈消すには〉ではなく、〈生きるに〉と唄うのでしょう。少女生きるにと皆唄うわ。
誰かが追い駆けてきて告げ口している。
あまり早く歩くので、抱えられている少女姿の老婆は靴を落としてしまい、黒く磨き上げられている靴は、後光を発して飛び立っていく。

――子供の頃、出遭えなかった虹を、今度こそ、しっかりと、この目に刻まなければならないのよ！

汚物が上がってくる感じで喉がふさがれている。

誰かは他人の家を通り過ぎる影。

わたしは傘をステッキにすることを肯定し、体の重みを支えながら、そこにいる老人に気づく。

――お祖父さま！　お祖父さまじゃ？　ずっとお聞きしたかったんです。何故止めなかったんですか？　あなたの原稿にいたずら書きをしていた、わたしたちを！　何故、怒らなかったんです？　あなたの一生をかけた原稿に落書きしていた、わたしと妹を！！

――そのことで怒ったりはしないさ！　終戦前、原稿を大手の出版社に持ち込んだときには、戦争で紙が払底していてね、いくら、長官のお墨つきでも、長編を出す余裕など、この国には、どこを叩いても無かったんだよ。・・・山本五十六の乗った飛行機が撃墜されたのは、そのすぐ後だった。そして、敗戦！！　・・・彼を、静かにしておいてやりたかった！！　お前たちにもやがてわかる時が・・・・。

祖父はわたしに背をむけていて、その表情は捉えられない。その長い背がたわむ。あなたが祖父の思考の糸をたぐるのがわかる。

次から次へ迷路を越え、わたしの足はだんだん遅くなって、認知症のようなものが来て迷い始める。

この機会に若さが休養をとるというのなら、それでもよいのでは……。老いることを哀しめば、心は安らぐの？　いや、すべてが進んでいくのよ。

何故そうなったのか？　わたしには、今、郵便鞄に詰め込んだ郵便物を、誰から誰へのものであっても、構わず開いて読むことが解禁されている。

――欲張りすぎよ。こんなに抱え込んでどうするの？

若返ることの狂気は公認されても、顔を赤らめることはない。大地はもう墓穴を掘らない。わたしは嗚咽をこらえていた。わたしの少女はちらほら現れ、斎場を華やいだ雰囲気に変えてしまう。変身を待たされていたのが自分自身であったというより、鞄や、陽射しや、花やコンクリートであったというように、少女の手から先、覚めた大きな目から先、空けて待っていた空白に向かって飛びついていく。

わたしの少女は鞄を素早く拾い上げ、埃にまみれたかすかな傷をしなやかな指先で拭き、老婆が左から先に、地面を叩く歩き方で妙な具合に摩滅させた踵を、右から先に下ろす歩き方で、減り方を訂

正しながら歩いて行く。
老婆の時、この靴裏が摩滅していくような嫌悪感を意識していたが、少女も同じ位この靴に違和感を覚えているに違いないのに、若さで、お構いなしに急いでいく。
わたしは中年だから、レールが敷かれている筈なのに、何故か、自分が少女を尾行しているような思いになる。
わたしの肋骨が武装でもしたように、鎧になる。
――わたしは戦争をする気はないのよ。わたしは戦争を放棄した国に生きているのだし、しかも女なんだから。手紙の遅配のために、あなたに返事を出さなかった、たった、それだけのことで、報復を受けなければならないなんて、間違っているわ！
わたしは手紙の消印の、一週間後、突然解雇されたことになる。その理由は、ストーカーだという密告！　今にしてわかる。彼に刺されたのだと・・・。
彼が、それに触れた瞬間、わたしは気を失ったのかもしれない。はっとすると、手足がわたしの存在の断片のように、わたしから突き出ていた。
殺したい男に殺された不覚は、泣いても泣いても泣ききれるものじゃない。
――そうでしょう。そうに違いないわ。殺しても殺しきれない男がいたのね。それも知らずに、今

日まで、のうのうと、生きてきたなんて‥‥、信じられない？

殺した男の眉間に憤怒の皺が集まっていく。わたしに愛を告白し続けた口。わたしは会社を頸になった後、人並みに働いてもいなかったし、引きこもっていることも多かった。しかし、それが罰を受けるにあたいする罪だったかしら。生活は動的でありたいなどというものではないわ。だって、生活は乗り物ではないのだから‥‥。

ピストルは何故か、わたしの右手に握られている。‥‥あなたね！

わたしは彼の車を奪い、スピードを上げる。

――キューン。

急ブレーキをかけてパトカーが止まった。

わたし自身の深みから影が湧き出る。鈍重なものたちを、神経をすりへらし、指紋をすりへらして、もう振り返ることはない！

――――第２部――――

飛行機は機首を下げ、大地に向かってゆっくりと降下をはじめる。わたしには彼の息遣いが早くなるのがわかる。激しい動悸は自分自身を破壊してしまう。

〒［助けて下さい。爆死するのは嫌です、僕を、僕の才能を救って下さい！！……］

あのとき、冬だったのだ、きっと。外が冷たくなって、窓ガラスの内側に水滴が真っ白で、明けて陽光が射すと少しずつ滴り落ち、陽炎の羽になった。

〒［……この美しい朝が僕の死ぬ日だと信じられるか？　この明るい昼が僕の殺す日だと信じられるか？　これが敵の娘に恋をした報いだとは！！　もう、着陸態勢に入った、さようなら。キキ！　愛をこめて！！］

差出人の名はない。焼け焦げた一通の葉書に、わたしは宛名を必死で見ようとする。
テレビ画面のなか、飛行機が炎を引き摺って滑走し、黒い人影が競ってころがり落ちるのが見えた。と、爆発音がして飛行機は炎で巨大に膨れあがった。確か五年前のことだ。
黒々と焼け焦げた死体らしきものを引き摺って男たちがいく。日輪を散りばめたプリント模様のプリーツが一杯に拡がり、運ぶものたちの足に巻きついていく。
――秘密は何時だって打ちあける相手を探しているんだ！
光は闇を探って、さまざまな秘密の前で後退りする。
――彼から正気を奪ったのは誰です？　何故、最期に当たって、笑っていたのでしょう？
――　一撃は抱擁の後で笑いながら。愛を口にしながら、忠誠を誓いながら加えられる。彼は才能や恋や敵の前で自爆したんだ！　雲の上を飛んでいたのに・・・・。夢を雲に投影させて見ろよ。あったらの話だが！
――キキさんですか？
首を傾げている為に女の眼は黒々とした翳になっている。若い女なら一度は願うだろう容姿を彼女は見せつけるように、丈高くなる。

わたしが葉書を差し出すと、翳の中から尊大な美しい眼が現れる。

――何？

女は手を引っ込めたまま、横着にも顔を逆さにし、眼だけで文字を追おうとする。黒焦げの葉書が飛び跳ねて、女の顔に命中している。

――何をするの？

――別に、わたし、なんにも？　葉書が勝手に跳ねたんです。

――あなた、これ、読んだの？

――さあ・・・・。

――さあって？　これは、五年前、彼が最後にわたし宛に書いた葉書だわ。どこで、これを手にいれたんです？　・・・・・でも、彼は生きているのよ！　立派に生きているわ。わたしは、彼の遺志で、彼の研究を引き継ぐことにしたんです。論文、今日ネイチャーからアクセプトされたって、連絡があったところよ。あなたなんかには分からないでしょうけど、研究者にとっては自慢できることなのよ！！

女は喜びを隠しきれないでいる。紅潮していく肌が匂うようだ。赤味は胸元から頸に、頬から目まで昇っていく。

――で、お父様は？
わたしは言ってみる。
――父をご存知？　父は自業自得！　彼の論文を自分の名で発表してしまった上に、それを黙認することを、わたしと彼の結婚の条件にしたのよ。彼はそれに耐えられなかった！　いいえ、彼の才能が、それを阻んだの、そう思われます。父は彼の指導教授だったから、そういった慣習は昔ならあったのでしょうけど。でも、少なくとも共著にすべきだったのに・・・・・・。飛行機もろとも師弟で爆発！！　わたし、気がついたら、独りぼっちになっていました。
女は肩をすくめ、眼をあげてわたしを見た。あなたの影法師が大きくなる。
なら、わたしと一緒だ。わたしにむしゃぶりついていた恐怖が何故か落ちている。柔らかくなって、口笛を吹きたいくらい！　わたしはわたしの少女に変貌しているのに違いない。
――ですから、自分に生きる権利があるかどうか、迷うときがあります。
女は遠くを見ながらいった。この女の不幸そうな感じは魂を持っているしるし。わたしの散漫になった頭が笑い声をたてながら、女に向かって両腕をさしだしている。
薬品臭がした、配達は終わったのだ。わたしを爽やかな余韻が包む。
その時、あなたが叫ぶ？

――待って！！　キキは、父親とおなじ罪をおかしては、いないの？

次の瞬間、わたしの少女が何をしたのか？　または、あなたが？　それがわたしには理解できない。

足元に転がっているのが死体だなんて、わたしにはわかっていた。黒焦げの頭を踏みつけないように、触れないように、一足ごとに飛び上がったり飛び降りたりした。転がっている頭は、それを楽しむように位置をかえる。キキは呆然とそれをみていた。

――自分に自分が見えない構造は幸運なことさ！　目玉は身体の中に食い込んでいて、よそ見しか出来ない。いくら飛び出しても、半回転して自分を見たりはしないものさ。相当のごまかしをやらかして平気でいるんだ。許しあっているんだな！

――どんなに、はかない存在であるとしても、蘇ることを！　死んで行くものが、死ねないものたちが、死さえ与えられていないものたちが、わたしを見つめているから・・・・・。

――その調子だ。この生きることに稚拙なものたちは、みんな、願っているんだ、変身することを！！生き続けることを！！

死体らしきものを引き摺っていく男たちの足元で、昆虫が飛びたっていく。黒焦げの死体も風に煽られ、影のように、後へ後へ軽々と運ばれていく。

わたしは自覚して老婆になって、ごく静かに遠慮深く腰掛けている。鞄を抱えて、次第に大きく目を見開きながら、半ば意識を失うことに慣れようとしている。気にすることはないのよ、黒焦げになって死んだのは、わたしなのだから・・・。

このあたり、まだ新旧不揃いの家々が、平野に向かって攻め込む構えを見せ、季節外れの氷屋の旗が斜めに突き出し、もうすぐ倒れそうだ。わたしは待機し息をひそめる。

――十五年前に女房が置き去りにした子供を、当時氷屋をしていた、この家の娘が二三日誘拐したことがありましてね。子供を手なずける事で僕の気を引こうとしたのでしたよ。まあ、そんなわけで、以来我が家はうまくいっています。遅配でよかった！　そう思いますよ。手紙を見たら、いろいろ思案したかも知れませんから・・・。

男は妙に白い手で、手紙を読みもせず躊躇いもなく千切って、見る間に吹き飛ばしてしまう。手紙は風に乗って生き物のように宙を浮遊し、この男の子供らしい少女が二人、歓声をあげ、手を伸ばして手紙と戯れる。

――ママ、ママ、ママ、ママ、ママ、マ！

〒[体を悪くして、入院しています・・・] 手紙の文字が千切れている。
――ママ、ママ、マ、マ！
〒[・・・愛をこめて！！] 千切れた手紙が跳ぶ。
〒[入院中のわたしは行きたくても行けないので、子供たちを連れて・・・] 千切れた手紙を少女が掴んだ。
〒[必死で、これから皆で生きていくための資金はつくりました・・・] 少女の頭をかすめて千切られた手紙が舞い上がる。
――ママ、ママ！
〒[・・・来て下さい。待っています！！] 少女たちが手紙くずを追いかける。
こつこつ、こつこつ、死んだ女の骨が彼らの間にぶらさがり、揺すれて鳴る音？
それは歌ではなく、休みなく老化していく体の中で、大きい骨が白骨のように乾いた音を出しているのだろう。氷屋の旗の蔭にいる、もと氷屋の娘は旗に絡まれて転倒してしまう。
――もとの鞘に戻るだなんて、そら豆だって、できやしない！！
またも、空港に向かって降下していくジャンボ機が、開けっ放しになっているママの口に吸い込まれる。

――いくら珍味だからって、胃や胸が痛くなるに決まってるのに。ママったら何時からおやつに飛行機を食べるようになったの？

少女は、着衣を棄て、買い食いをし、悪友と遊び、老いさらばえることの狂気は当然のこととして見逃され、通行人は氷屋の老婆をまたいで歩いて行く。

――愛したのではないわ、執着したのよ！　物音の方へスパイの耳が走っていく。

――ほっといて！　あっちにいって！　ほっておいてといったら、ほっといて！　この家の周りには旋回している気流があるのよ。旋回しているのがママだなんて、わたしたちには、わかっていたわ。

老婆のわたしは調子をとりながら、手を前後に振って歩いて行く。手がよく振れると言うことは気持良さそうではあるけれど、わたしの周りの景色が動かない。

……どうかしてる、歩いても歩いても何も遠ざかっていかないじゃない？

わたしは度肝を抜かれ、追い詰められた目付きをし、食い止めようもなく終わりの来ない休みなしの身もだえのように手を振り続ける。何時の間にか郵便鞄はまたも、わたしの肩に掛かってい

て、前後に大きく揺れ、わたしの両手を動かす原動力になっているのだ。
腹を立てて叩きつけようにも手は老婆に奪われていて、わたしには手がない。郵便物は暴行を受け雪崩落ち引っ叩かれて、其の底で押し合いへしあいをはじめる。
わたしは郵便配達夫ではないのよ。まして、配達を怠っていた怠け者とは違う。老婆のわたしは、反り返り、腕を左右に振り上げたまま硬直して止まる。
車道を高校生のブラスバンドが練り歩く。クラリネットを吹き鳴らし、ドラムを叩き、トランペットが吹き渡り、シンバルの一打で通行人は失神する。
――これは騒音よ。邪魔をしないで！
それより緊急をようするのは……。わたしの能力の限界がこんなに早々に見えてこようとは思わなかったな！　わたしはブラスバンドを追い払い、思い余って行き交う人々に助けを求める。
――鞄が、わたしを追いかけて来るんです！！　助けて下さい！　緊急をようするんです。
――肩に勝手にかかってしまうだなんて？　あんたの妄想で、あたしと関係ないじゃん！　でも、お気の毒。なんなら、肩でもマッサージしてあげよう！
――違います！　そんなことじゃない。この鞄をわたしの肩からはずして下さい！　はずして欲しいんです！　この鞄はわたしにしつっこくつきまとい、ベッドの中にまで入り込んで、気がつくとも

う、勝手に肩にかかっているんですよ。今、鞄ったら、わたしを転倒させようとしたわ。足を払ったなんて見え見えなんだから！

人々は互いに目で合図をおくりあい、わたしを小ばかにしたように払いのけ、顎を上げて行ってしまう。わたしは道路に派手に尻餅をついている。

手紙は千切られても、配達はまた一つ終わったのだ。

――失礼ですけど、気のせいでしょう？

ものみだかそうな、中年女が戻ってくる。

――いいえ、現実です。わたし、この鞄とは、ごく自然なあっさりした関係に戻りたいんです。

――戻ればよろしいじゃないですか？　人は鞄とそんなに親密な関係を結んだりはしない！

――でも、鞄の中の手紙が配達を要求して勝手に動くんですよ！　わかります？　届けるところに届けてあげなければ、終わりが来ないのでしょうか？　何故わたしのだけでなく、他人から他人への手紙まで、どうして、こんなにいっぱい詰ってしまったのかしら？　不思議なんです？

――ご事情は知りませんけど、あなた、おすまし顔で、よくまあ、そんなおかしなことを！

――鞄に押し込んだのはわたしですけど、そうさせたのは誰かなんです。澄まし顔だなんて、ひどい！

わたしが少し前の自分と遠い。反省しても、反省が自分のなかで一続きではないと思う。わたしの少女が原因なのでは？　それともあなたが？

――そんなこと、気にしないで！　ほら、あの檻の中、ブランコしている猿のみっともないお尻を見て。パンツを穿かせたくなるでしょう！　貴女の鞄を替わりに檻に入れてブランコさせてあげたらいかが！

中年女が去って、わたしはせかせか歩き、人もまばらなところまで来ている。またも背で鞄がばたばたし、まといつきはじめる。

わたしが予定を変えようとするより先、予定表が消されている。

――かあさま！　かあさま！

恥かしげもなく助けを求めてしまう。

なるべく無表情に、鞄の口から飛び出している一通を抜き取ってみる。中途半端のまま手紙の中に畳みこまれていたらしい祖父の声が来る。

――…お前が悪かったと、そう、本当に思っているのなら、お前も書いたらいい。われわれが生き続けるとは、多分そういうことだよ！！

祖父はずっと考え続けていたのかもしれない？　自分の血が子孫のなかで思いもかけない、異端な毒を持って来ていることを感じ取っていたのだ。原稿用紙を裏返した手紙は、分厚いために何度でもわたしに戻ってくる。

〒[・・・お祖母さま、お祖父さまは何を心配していらっしゃるのかしら？　わたしはわたしなんだし、未来は少女のわたしのものなの。誰も昔は若かったんでしょうけど・・・。ああ、何と言ったら分かるのかしら。あなたの過去にあった関係を再生するには、あなたの過去の少女でなければならないわけ・・・・]

少女のわたしから老婆宛に書いた手紙は、自分が書いたものと肯定できるが、何にこだわっていたのか説明できない。

とりあえず、今、わたしが、わたしの少女に、老婆のわたしに言いたいことは・・・。

――鞄を甘やかしては駄目！！　それ一言でいい。

わたしはその一行を書きたくて、格闘のすえ、鞄を地面に放り出して遠のいているが、隙があれば押さえ込んで奥底にあるボールペンを取り出そうと睨んでいる。

別の方法で少女に告げる方法はないか？　老婆のわたしは地面に石筆で大きく書く、子供の落書のように。

――鞄に心を許すな！！

老婆のわたしは反逆の種子を育てることに夢中になる。幾つもの命を生き、躍って唄って生きて死ぬ。樹脂が噴き出ている幹に寄りかかり、白や黄色の病葉が風に払い除けられた地面や、木の葉の浮いている川面を見つめる。そして、その底で夢見る一匹を意識する。

もう老い先長いという気もしないし、そう綺麗であることもいらない。疲労のために落ち窪んだ体をもの静かに木に預けて待ってみる。

重くて持てなくなった荷物を下に置いて、迎えに来てくれる孫娘を待つ祖母だというように。待たれる少女と共通のクリーム色の服は樹脂でべとべとし、もう少しで、とろりとした飴色の滴りがわたしの髪に届きそうだ。老婆とコンビを組むことが厭になって、もし、わたしの少女が現れなかったら……。最期まで老婆のまま鞄に翻弄されるのだろうか？　それとも中年に戻るのだろうか？

こうしていると何となく老若が、わたしの目のはずれにわかれわかれに移動していくのが分る。樹脂の滴りは今、髪まで届いてはいないが、わたしの少女が出現するまでには届くだろう。

いや、よく見れば、もうその樹脂の丸いしたたりは埃にまみれ、琥珀になってわたしの足元で固まっている。

赤い扉が見え、干からびた奇妙な匂いが擦れ違い、形をなさない体がアイボリーのほのかな日輪模

様に包まれて、両脇を支えられて行く。
――気が遠くなったらしい。仰天すると、気を失ったり、精神錯乱に陥いることもあるんだよ。
抱える者たちは調子よく唄う。
――ばばあ消すには刃物はいらぬ。苦しき浮世に背を向けて、あの世楽しと言えばいい！
少女の細い足がマスコット人形のようにぶらり揃って、前に後に振り出される。
道路を横切っていく鳥の大群？　わたしは、はっと立ちすくむ。向こうを過ぎる電車が逆光のために黒くなって吹っ飛び、葉裏を返して揺れる樹木と重なり、鳥の大群の飛翔に見えたのだ。
一人になるのが怖い、誰かそばにいてほしい、
――幽霊だって構わないのよ。いて下さるだけでいいんです。ええ、あなたでも、きみでも！！
白い蝶が、わたしの髪にさっと、体を寄せて舞い上がる。
雨上がりの陽光と風、人々は流行のレインコートを着て、後のスリットを誰もが同形の三角に折って行く。
濡れたビニール傘を透かして日は増殖し、わたしの眼に眩しい。とりどりの水玉を傘の周りに宙吊りにし、足元に蒼い影が生まれる。
わたしは傘を閉じ、柄を持って雨雲が散っていった空へ、水滴を戻そうとする。

もう、気の遠くなるほど高い巻雲まで。
わたしは傘の先で空を回してみる。
巻雲をかきまわし、空をかきまわし、その挙句、おまけのように綿飴を作ってしまう。
わかった！　わたしは、この傘の柄を上にあげて持っている限り少女であり続け、下に向けてステッキにするとき、灯りの電源は老いに入れられてしまうのね！
綿飴の綿を髪に置いて、わたしは老婆にさま変りする。
体全体がざわめき続け、老若どちらともなく、灯りがポカポカ点いたり消えたりし、傘が勝手に飛び回り、少女と老婆の間で戦いが始まる。
――こうし続けている限り、老いに屈することはない筈でしょう！！
鮮やかに陽光を照り返す少女の服の色、見かけは皺一本ない琥珀色の肌、でも、お転婆の証拠のちょとした掠り傷の中から、わたしは誤って、剛毛のような言葉を吐いてしまう。
――あと何年！！
それは忍び足でやってくる。生きてきた年数と、余命を比べると、遥かに余命は少ないのだ。ないに等しいと言ってもよく、少女であること、中年であることさえ、万対一の僥倖であるのかもしれない。負けだわ！　行っては帰る誕生と死の間、老若往復できるなら、それもよい。

――老人になることは病気ではないのです。ただ、年をとることが、思い通りに来るのではないということが、病気であると言えるかも知れません。

誰かの老婆は秘密の半分を口軽く曝け出し、がら空きの十数年をゆったりと息抜きする。

〒[……ユースホステルは朝起きて見ると、登りつめた雲の上にありました。十七人が女で十五人が男でミーティングがはじまると、ホステラーの老人は、旅をするのもいいが、あなたがたも、もうすぐ老人になるのだから、象のように生きねばならん！　と、わかったような、わからないような話をしました。若者たちは老人をいたわって微笑んだまま、黙っているのでした。わたしも心が大きくなった気がしました……]

手紙の少女は山のユースホステルにあって、祖母に優しい心遣いをみせたつもりだ。

〒[…山を降り、バスに乗って駅につくと国鉄の順法闘争でダイヤは遅れていて、懐かしい蒸気機関車に乗り換えました。山陰の海は遠くに沖の島が藍色に見え、その向こうには大陸のような雲が山をつくっていました…]

何年前になるのだろう？　そこには現実らしい年月が居座っている。手紙などこんな何気ない旅からの報告や、着きました、元気です、遊びに来て下さい、待っています、で、人生を変えるほどの手紙などまれだったに違いない。

〒［・・・・順法闘争でダイヤがみだれていましたが、車中、もと労組役員だったというおじさまから面白い話を聞かされて、みんなで盛り上がってしまいました。企業だけでなく労働組合の幹部だって、色んな形で搾取しているのだそうです。びっくり手当ってのをご存知ですか？　闘争のあとで処分が発表されるでしょう。でもその前に、役員と専従でない人も含めて、びっくり手当が支給されるのだそうです、勿論組合費から。何故って、びっくりするからですって。まだ処分の発表もされていないのに、何故びっくりするのでしょう！　組合の役員に立候補するほどの人たちが？　以上高校生のわたしたちも随分博学？　になりました・・・・］

しかし、もうすぐ本物のわたしの少女によってそれらは訂正されるのかもしれない。

わたしにむしゃぶりついていた恐怖が何故か落ちている。

自信をました少女は春風に煽られて、花びらと一緒に上下動している。こんな日には気の遠くなるような眠気が、ねむの木の葉を縮らせ、試験勉強もしないで、少女は四葉のクローバーを探しつづける。

――口笛を吹きたいくらい。猫の死体などへのカッパよ、何故死体が怖いの、死んでいるのに？

身動きする猫の滑らかな横腹、堤防に蹄の音がして、乗っている調教師が二階からものでも見るように、少女を見下して過ぎていくと、川面で、陽炎がふらふらと立ち上がる。蒸気は忍者のやりかたで今も空に昇っているのだろうか？

――朝の中へ昔を投げ込むのは誰―れ？　捨てるのは男だけにして下さい！

罠にかかった内気な心臓が小鳥のように恥らっている。

〒［毛利サラ様　　きみが学校に来なくなって・・・、美しいきみの姿が見えなくなって、一週間がすぎ、僕の中にぽっかりと空洞が生まれました。それが日に日に大きくなっていきます。これでは僕も学校に行く意味を失ってしまいます。生きていることがこんなにもむなしいとは！！　僕はきみを遠くから見つめているだけで、何一つ力になってあげられなかったことを、どんなに悔いたかしれません。どうか許してほしい。

そして、少なくとも味方が一人いることを信じて、学校に戻って来て下さい。

待っています！！　待っています！！

前田　小太郎　」

――これを、見て、見て！！　小太郎さんからよ！！

老婆姿の少女は躍り上がる。涙で顔がくしゃくしゃ。

――二年前にこれを見ていたら、わたし、喜んで学校に戻っていたわ。間違いなく！！　小太郎さんは女の子たちのあこがれの的だったの。わたしだって夢見ていたんだから・・・。でも、わたしの両親は転校を決断したんです。三流の女子高よ。誰もわたしを見ない、話しかけてもくれない、振り向きもしない。環境はもっともっと、ひどくなったわ。自尊心を傷つけられ、封印された数々の恥の記憶。わたしは定時制高校にうつり、なんとか息をついたんです。どうしてこんなことになるのかわかりません？　わたしが何をしたというの？　わたしがそんなにも不愉快な顔かたちをしている？　今、わたしは顔を消してハンガーにかけられ、クローゼットに整理されているわ。光るものを何一つ持たないことは隠れやすいもの。個性をすて、若さをすてて、老婆姿の少女になってなんとか、高校三年生になりました。前田小太郎さんはどうしているかしら？　懐かしいなあ！　会ったらとおっしゃるの？　あなたにはたったの二年でも、わたしたちにとっては長い長い年月よ。わたしも彼に恋していたことが、素直に信じられる。今日、わたしがどんなに嬉しかったか、あなたにわかって？　夢見心

地なんです！！　足なんか、ほら、地についていないでしょう。‥‥でも、わたし、生きている限り、彼とは二度と会いたくはない！　わたしはもとのわたしではないし、多分わたしと彼とでは、なにもかも違ってしまっているもの‥‥。

人々の擦れ違う駅のプラットホームで、老婆姿の上着の裾が、くるりと巻かれてするりと伸びる。人と人の間に起こる気流の悪戯にしては不思議な動き。

そこにいる乳呑み児は空を飛ぶエンゼルの形で、危うく母親に抱えられ、睫の長い目で、じっと中空を見つめている。

――あら、あら、あら、あら！　周りにいる大人達も母親も、つられて同じ方向を見て、乳呑み児の視線の先を探している。

チャンス！　老婆姿の少女の裾は孫の手を秘め、するりと翻りながら乳児を囲む人の群れを一巡りする。少女の上着の内側は、ポケットだらけで、札びらが薔薇の花びらの重なりになる。

わたしが彼の後を追って校門から入ると、前田小太郎は少女たちに追いかけられ、見る間に四方から囲まれてしまう。彼は諦めたように少女たちの差し出す花束を抱えあげ、タレントのように、サイ

ンをし、にこやかに握手を繰り返している。手馴れたものだわ！　これが、サラの恋人なの？　あの手紙など忘れ果てて、これでは、やりたいほうだいじゃない？　すでに二年の年月が経過しているのだ。わたしは顔を引き締めて、彼に近づいていく。

――毛利サラさん、サラさんをご存知ですか？

彼は子供っぽい憎しみをこめた目で、わたしをはっしと睨んだ。

――勿論、知っています。でも、それが何か？

――サラさんは今日、二年前にあなた、前田小太郎さんの出されたお手紙を受け取りました。遅配だったんです。

――そんな！！

彼の大き過ぎる眼が探るようにわたしの上を動く。

――わたしが配達したんですよ。その事実だけお知らせに・・・・。でもお元気そうでよかった。サラさんは心配していましたけど、そんな必要はなさそうですね。

小太郎を囲んでいた少女たちが一斉にけたたましい笑い声をあげる。

――ハハ、ハハハハ、ハ、ハハ、やだあ！　やだあ！　毛利サラ、サラだって！！　それがなーに？小太郎さんの手紙だなんて嘘ばっかし！！

――あんなの！　こまい！　トロイ！　コケ猫じゃんか？　あんなやつに小太郎さんがお手紙出すわけないじゃん！！　オバハンよ！　あの娘はとうの昔に、この学校を落第して出ていったんだよ！！

手を叩き、股を叩き、野生の獣じみた猫背になって、彼を保護する形で、わたしを囲みなおし、一人は体を左右に揺すりながら、ジャブをおくってくる。

わたしは、それを無視して眼をあげ、黙って彼の行動を待っている。

――きみたち、いいかげんにするんだ！　お客様に失礼じゃないか！　もう、授業がはじまるぞ、急ぐんだ！　急げ！　風紀委員につかまるぞ！　僕は話があるから、後から行く。

彼は猛獣遣いよろしく花束を振り回し、情容赦なく少女たちをひっぱたきながら、校舎のなかへ追い込んでしまう。

彼の黒目に陽光が止まって、きらきらする。まさか、涙ではないでしょうね？　役者なんだな？

――彼女、元気ですか？　ずーと心配していたんです。お家にもいってみたんですけど、取りつく島もなくって・・・。

――元気でしたよ。そう思います。

――彼女が来ることができないのなら、僕が会いにいきます。何処にいったら逢えるのでしょう？

教えてください。どうしたら本当の彼女に行き着けるのか？

――サラさんは、お手紙が二年前に届いていたら、学校に絶対に戻っていたわ。有難とう！！　嬉しかった！！　と。そう伝えてほしいといっていました。でも、今は、生きている限り、……彼女はあなたに会いたくはないそうです。

彼は、余りの驚きに何もかも忘れてしまうやり方で、しゃっくりをやり過ごしている。時間が飴みたいに引き伸ばされ、あなたがわたしの眼からはみだしてしまう。

彼がわたしに失望しているのがわかる。彼だけではない、みんな、わたしに失望していた。こんな女は何の力にもならない！　このでしゃばり女が！　彼はわたしを無視し苦渋の表情を浮かべると、校舎に向かって闘牛のように突っ込んでいった。

わたしは一人校庭にとり残されている。

何のためにここまで、しゃしゃりでて来たのか、自分でも分からなくなる。

捨て去られたような孤独感で、校舎に背を向けふらふら歩き出した。

その時、エレベーターが断末魔の悲鳴をあげ、声が追いかけてくる。

――大変だあー！　工事中のエレベーターシャフトに、誰かが堕ちたぞ！！

音のするほど張り詰めた神経の上を土足で綱渡りして行くような、両手を広げ、顎を上げて決して下をみない。わたしが彼を追い詰めた？　それとも、それは、彼の決心だったのか？　死に方は吟味され、用意されていたのでは？　そう思うことでわたしは不機嫌を捨てる。

サラは、彼女は、すでに彼を捨てていたのだ。ものを考えないようにしていれば、何時だって幸せでいられる。

――完璧だわ！！

病院の住所を目指し、何度タクシーに乗って何度行き先を告げても、わたしは馬鹿にされたように墓地に降ろされている。小太郎は息を引き取ったのか？

――確かに、みんな終局に於いて、たどりつくところが墓地であるとしても、今、わたしの行きたいところが墓地であるわけないでしょう！！

運転手は哄笑し、目に理髪店の標識みたいな渦巻きをつくっていて、それは凹方向を指し示し、わたしに過去への道標であって未来のものではないと思わせる。

墓地は彼岸花が自生し、多くの人々の無念に飾られ、苦痛はもはや鋭さを失い風に遊びながら傷口をなめる。

わたしの少女が花を摘みはじめ、墓地で遊んだ幼い日が木影の揺れる陽だまりではじける。小さな掌で撫でた御影石の滑らかさや、冷たさ！　墓の石垣、正面のくさりで漕いだブランコのきしみ。覗き込んだ灯篭の穴から見た青い空、墓地が親しそうに少女にすりよっていく。あなたがそれを止めさせようと立ち上がるのがわかる。

――怖いなあ、怖いですねえ、自分を支持し、堅持していかなければならないものが、みえないとはねえ！　致命的という気がする。

日輪をちりばめたプリント模様のマントにつつまれた老婆姿の少女らしきものを引き摺って男たちがいく。

――若い者が、何故死に急ぐのでしょう！　しかも昨日はエレベーターシャフトで、今日はからっぽのプール、飛び込み台からですよ。壮絶すぎるんじゃあ。生きているものにとって、ショックが大きすぎはしませんか？

――高い知能指数を誇り、飛びぬけた容貌に恵まれたものたちが、この世ではこんなにも不幸だったというわけだよ。生が死を目指している以上、やむを得ないとしても・・・。何故彼らは穴をめざす

のか？

スクリーンのなか、男たちは老婆姿のサラを引き摺って、脇道に脇道にそれていく。道路端にとぐろをまいている蛇たちが鎌首をもたげ、草いきれのなかで狙いをさだめる。

――彼らは本当は人間ではなかったのでしょう？　人間であることが不幸だったのでは！！

――甘やかしたら駄目だよ！　仮にも、人間だった以上、反撃一つせず、黙ったままで、空腹のまま飛び越えたらだめだ！　生死の一線は一生をかけて飛び越すものなのだから・・・・。

――僕たちは、生きたかったのに、自分の意志と関係なく殺されたものたちを、たくさん、たくさん見て来たんだ。爆撃のあとで、黒こげの死体を泣きながら引き摺った記憶は、今になっても残っている！　小学生だった！！

かなりな間隔で建てられた、鉄柱を五個持つ鉄塔が箱舟を乗せ、大陸の大移動というかたちで動いていく。箱舟はゆるく回転し、視角の関係か、鉄柱の間隔が狭まったり、本数が殖えたり減ったりする。鉄塔だけでなく、わたしのいる地層そのものが、海も引き連れて向こう側へ動くようだ。

地震なのか、ガラスの破片が周囲のビルから雨のように降り注ぐ。
其の上を飛んでいくヘリコプターは、鳶が餌を狙っているように急降下し、目標の場所を撮っては素早く舞い上がる。
これは、天災から逃れる準備が出来たということか？　箱舟とは？　地球の、宇宙の、終末が近いと察知した誰かの手によって用意されたのかもしれない。すべて、秘密の膜の下。
わたしの体を作り上げている光の粒子は、何時もの半分しか灯を点さず、半分は休止している。其の部分が墓穴だということなの？　生きている印の灯は急激に、とぼしくなって来ている、存在を現わすのが目的なのだから、暗黒の部分までは照らせないのだろう？
――暗黒星雲みたいな墓の中身が、老婆なの？　だったらあなた方は？　ええっ？　宇宙人じゃん！
少女たちは嬉しそうに笑いすぎて息をつまらせる。
――なら、あなた達も宇宙人にしてあげましょうか？　やり方は簡単よ。例えば五十年前の消印のラブレターを届け続ける！
少女のわたしは海風に吹かれて、つばの広い緑色の帽子を深々と被り直し、赤茶色の細腕を組んで両肘を掌で掴む。天変地異から身を護るためには、わたしも何かを決断しなければならないのかもし

れない。なにを？　何で？　どうして？

――しめつけちゃ駄目！！　窒息するってば！！

少女は悲鳴をあげ腕組みを解いて鞄を押える。鞄の中では、コボコボ受信音らしい音がし、傍観している少年姿の男たちは、なにか怪しげなことが起りつつあると予感し、それを見究めるのだといわんばかりに一列に並んで海を見ている。箱舟が鉄塔の縁で、光を反射させ、かもめが狂ったように翻っては、箱舟に口づけを繰り返えしている。

――中にいるのは何？　誰？　わたしの？

――神様は決断しつづけていらっしゃるのですか？　首をちょんぎるみたいにいさぎよく？　迷うこともないのですか？　それが神様らしいだなんて？

わたしの少女の唇から言葉が生きもののように飛び立っていく。

少年姿の男たちは、葉書や、封書を手にしたまま、ついには日が暮れて、鉄塔のシャンデリアで輝きながら、大陸がゆるゆる行く海を見つづける。

ＫＡＭＩＳＡＭＡ　ＫＡＭＩＳＡＭＡ

少年がしわがれ声で叫ぶと、手紙が２、３通足元に落ちる。

ＴＡＳＫＥＴＥ　ＴＡＳＫＥＴＥ

少年たちが声を張りあげると、封書や葉書が雨のように降りかかる。
体を作り上げている光の粒子が半分なくなったら、それっきりなんだから。朝になれば少年たちも老爺のやり方をしなければならなくなる。
――じじい消すには鉄砲はいらぬ、恥の浮世を下に見て、あの世優しと言えばよい！　花の吹雪に身をまかせ、酔った、酔ったと躍りだす！　ヨイヨイ！
歌声がひときわ大きくなる。
少女姿の老婆が軽々と連れ去られていく。擦れ違う少年姿は、わたしに頭の上から足の先まで無遠慮な視線を走らせる。
――レディぶった婆さんよー！　よぼよぼしてるのに気づかないのですかい？　こりゃまた、ひどいねえ！！
彼らはボーイソプラノ、ためらいのあるふらつきで、ばばあ消すにはを、少女消すにはと言い替えて唄い上げる。
――少女消すには刃物はいらぬ。冷たい浮世に分け入って、恋の一つもすればよい！　人の情けに身を委ね、ひらひらひらと舞い上がり、嬉し、嬉しと歌いだす！！　ヨイヨイ！
少年たちはわたしの傷つき具合を見届けようと、勢いよく振り返えっては、口笛を吹く。

少女たちは口を尖らせ派手に唾を吐き掛ける。
わたしのかすれた声がそれを遮る。
――本当は、わたし歳なのよ。その証拠にその歌を平気で唄って見せたって構わない！
――そんなことが出来るなんて、ご臨終です！！
周囲から笑い声があがる。身も心も溶けて流れそうだ。
――おかしな歌を唄わないで下さい。それは、大間違いよ！　消すにはではなく、生かすにはでしょう！！　死んでいるものを、またも消してどうするの？
手紙に気を奪われて周りが見えなくなって、座り込み、遂には横になってしまった老婆を、人々が気軽に踏みつけて行く。
汚らしい臭気の風下で、老婆は手紙の文字に迷い、文面に腹を立て、怒りに衰弱して、ただ、つぎつぎ通り過ぎて行くもの達に石ころみたいに超えられてしまう。
ちょっと熟しすぎた杏色のスカートの風は、老婆の乱れ髪を煽り立てる。
古い過去に踏みつけられ、破り捨てられ、もう既に、赤いビーズの眼鏡の紐が切れてしまう。
手紙から出た災いが、彼たちや、彼女たちに及ぼした災いの全部を、あなたは早や回しの映像でみつめている。

――助からないよ！　おお、怒り声は聞きたくない！
――助けてください！　この耳を破ってください！
――どうぞ、怒りを鎮めて下さい！
――鋏を持って怒っています。毎日、わたしに向かって切りかかります。電話線はもう切りました。殺されます、助けてください！　助けに来て下さい！

誰かは手の中に未開封の古い手紙を何通か持っていて、トランプを切るように手の中で切ってみる。どれが幸運の手紙で、どれが不幸の手紙であるのか？　何年前の消印を選ぶことにするか？
選ぶごとに迷ってしまう。あれは、何年前のことだったか？　すっかり分からなくなってしまったわ。うたた寝とも言える、どっちつかずのあやふやな、積み重なったとも、消え去ったともいえる年月。老人である子供たちが歩みをとめている。
二本ずつの骨で出来ている証拠のかすかな割めの筋を足に見せて立ち、老婆はわたしの少女を待って、彼らを視線で捕らえ続ける。
――儲かってるの？
――儲かり過ぎて不自由なしさ。

低い声で話している青年は舗道に、木片で作った六角や三角のサンダルを並べている。脇にソフトクリームの自動販売機があって列が長い。

――このお姉ちゃんの次だったじゃないの。前に出てはだめよ。

叱っている男の子の母親は十代にしか見えない。お姉ちゃんと言われ、振り向きかねているうち、母親は上着とショートパンツの間に浅黒い背中を恥かしげもなく露出させ、わたしの前に割り込んでしまう。わたしは物見高く、日焼けした肌に際立つほくろの数を数えはじめる。

男の子は、わたしに寄りかかり、人懐っこく平和にゆらゆらしている。

――僕のお姉ちゃん。ママとパパの子になってくれない！

――そう、そうなるのもいいわね。

わたしは母親に聞こえないように声をひそめる。弟は3歳、わたしの母は未成年？　この糖衣錠を素早く丸呑みしてしまう。

わたしはいま、若さを点灯して少女なのに違いなく、周りの誰も首を竦めてはいない。

少女になれたことで緊張し、自動販売機の操作に戸惑い、ソフトクリームがでんでんむしになって伸び上がり、頭が折れてコップから溢れ、わたしの持っている手が慌てて、物売りの青年のズボンまで、コップごと吹き飛ばしてしまう。

――ごめんなさい！　拭き取るまで、乾くまで我慢して！！

彼は少女の正体を見破ろうともせず、何一つ起こらなかったみたいに、これと言った秩序もなく並べられた売り物を見守っている。

仲間らしい数人が彼の店の前に集まっているが、誰もわたしを責めようとはしないし、売り物を手にとったりもしない。

助かったわ！　このごろの若者は確実にやさしくなっているんだ！！　そう思ったとき、

――婆あめ！　呆けてんだよなあ！！

青年は叩き売りよろしく、だみ声を張り上げ、鞭を持ち直した。

内閣総理大臣様　２２年前の消印がある。

〒［前略、国民がある程度の年齢に達しました場合、国はその死に方について、老人個々の選択に対して、協力を惜しまない！　そうあって欲しいと切望して止みません！！！

象が姿を隠して死に向かうように、静かに、楽しく・・・！！　それが医療費や年金で悩む国にとっ

ても利益があるとなれば、国策としても万々歳ということと存じます。
あたら、若い人たちの貴重な時間が、体が、心が、老人によって奪われ、蝕まれ、磨り減っていく現実を目の当たりにするのは、老人としても、つらいものがあります……」
――これは？　こんなことを書いて、姥捨て山になる危険を、どう担保するか？　それが問題だなあ！！
――国によって忽ち殺されてしまうんじゃないか！！　これは禁句だよ。
――そうかなあ、いい線いってると思うけど？　静かに、楽しくがいいやね！　いずれ、選択のせまられる時がくるさ！
手紙は四方を窺いながら、老人から老婆へ、老婆から老人へ、不安と同感を載せてリレーされていく。
誰かも誰かも誰かも、手紙を掌の間に挟んでいるが、自分の運命を開拓できるほどの、手紙にまだありついてはいないのだ。自分宛のものや他人宛のものを、通知表をみる陰険な学童のような見方で、後ろ向きや斜め向きや、くるりと反対方向に歩きだしたりして、覗き見している。
飛躍的に人生を変えるほどの手紙に、まだありつけなかったものたちが、人生の転換を願って散っていったものたちが、藁に縋る思いで出発点に戻ってくる。

赤いドアは開けっ放しになっていて、通路を行く雑多な人影も見え、買ったばかりの漫画を読み読み道路を歩く児童のように、手紙を読みながら集まってくる。

〒[岩の島がありました。海にチカチカとホテルの灯が映っています。屋上から太平洋に飛び込むことも、日本海に飛び込むことも自由なんです。自由だということは、いずれにしてもいいものです。一緒に飛び込む気はありませんか？]

結び目は幾つもあるらしく、飲み込んだ言葉が胃につかえて痛みになる。地図を探してもそんな地点は見当たらない。彼が自殺したと聞いたのは、この手紙が投函された日から数週間後だった。あのとき、もしも、行っていたら、彼を引き止めることが出来たのではないか？　誰かはもしもに翻弄される。この手紙が届いていたら、今の誰かも無かったのかもしれない。そう思うことで、誰かは無造作に手紙を過去に送り込む。不安や淋しさは「生」の共通項でくくられる。

ひとりの考えさえ、いままで纏まったことなどなかったのに、気持が一つと言うように、みんなで、あの歌をのびやかな節回しで楽しそうに唄いあげる。

――ばばあ消すには刃物はいらぬ。つらい浮世に背を向けて、あの世楽しと言えばいい！　人の情けに身をゆだね、ひらひらひらと舞い上がり、うれしうれしと歌い出す！　うれしうれしと唄いだ

す！！　ヨイヨイ！

――じじい消すには鉄砲はいらぬ、恥の浮世を下に見て、あの世優しと言えばいい。花の吹雪に身をまかせ、酔った、酔ったと踊りだす！　酔った、酔ったと踊りだす！　ヨイヨイ！！

――これって、本当は、お年寄りへの応援歌なんでしょう！　わたしはそうおもってきたけど‥‥。だから、すっ頓狂に明るい！！

――そうなの？　消すって、そういうこと？　むごい歌だとばかりおもってきたから、悪くって、可哀想で、目もあげられなかったわ。気が気じゃなかった‥‥。

――悪意のうたよ！　そうに、きまってるじゃない！　人間が善意であるわけないでしょう！　ああ、思い出した。あなたの留守中に、女の子が尋ねてきて、郵便受けにカードみたいなものを差し込んで帰っていったわ。あなたも人並みに郵便受けくらい覗いてみたらどうです！

きびしい声がわたしに向かって投げ込まれる。

――カードですって？　それって、ごめんなさい。わたし紙を捻りながら、歩いているうち、食べてしまったのかも知れません！

黒い顔の中にチラッと見えるもの、突如、誰かの老婆も、誰かも、誰かも、わたしと心安くなり、嬉しくなり、家に引き返せない気持になる。

誰かたちの間に、哀惜の情に近いものが生れ、引き返したら、周りが無と交替してしまいそうな気がする。
ライトが一斉に消え、もうすぐ夜が白みかけ、景色が水ぶくれしてくるだろう。
わたしは変身の惨めさを置き去りにしようと走ってみる。
足が少女になり、頭が老婆で、足で、頭を蹴飛ばしてわたしは駈ける。少女の足はあっけなく草臥れて、老婆の上半身はこと切れそうだ。
――誰かと握手したいなら、目を閉じてから手を出すのよ！　あなたの息が吹きかかる。
わたしは素直に目を閉じてから手を差しのべる。
――ああ、思い出した！！　心に引っかかっていた、あの手紙のこと！　ここで、始めてわたしが手にしたオーストラリアからの手紙よ！　あれには犯罪の臭いがしていた。ＳＯＳが発信されていたのよ。地獄谷に転がり落ちていくような、不思議な音がしていたわ！　ソルックル、ソルウル、ルルツレ、ソルゥレ、ソルックル、ルルツレ、ソルックル……。ああ、あれは、わたしたちに、助けを求めていたのよ！　それを探しだしてみたら！　そしたら、その少女を、皆の姉妹みたいに、恋人みたいに、子供みたいに、助けることができるかもしれない……。耳をすましたら聞こえてくるはずよ。あの不思議な音が……？

誰かたちは不思議な音に耳をすまし、目を全開にして少女を気遣い、競って手紙を探しまわる。まるで、それぞれの最期の望みを賭けるように・・・。

――まあ、早い！　ああ、これ、この手紙です！！

わたしは変身を待つ間、少女の手紙をみんなの目の前に押し広げる。続きものの夢が、わたしに力を振るい続けているような・・・。

〒［伯父様のおすすめで、とうとうオーストラリアに来てしまいました。広い広い草原をカンガルーがビューン、ビューン、一飛びに跳んでいきます。目を凝らせば凝らすほどその速さにびっくりしてしまいます。許されるなら、わたしもカンガルーの袋に入って跳んでみたい！

お祖母さま、泣いていらっしゃいませんか？　気のせいかな？　お声が聞こえたような？

どんなに皆に勧められても、どんなことがあっても、お祖母さまとご一緒にいるのだったと後悔しています。本当は旅行になど出かける気分ではなかったのに・・・。わたしのいないうちにお祖母さまの身の上に何か起こるのではないかと心配でなりません。

外出は控えていて下さいね、飲み物にはご注意ください。油断してはだめよ！！　心を赦しては駄目です！！　こんなことを書かなければならないこと残念でなりません。一週間後には帰ります、待

っていて下さいね。
わたしは元気でいます、お友達も出来ました。飛行機でご一緒だったんですよ。お祖母さまをご存知だとか？　大村信也さんとおっしゃいました。
それでは、何かあったら、弁護士の山水さんにすぐにご連絡ください。
お祖母さま大好き！！　大好き！！　早くお会いしたいです！！
オーストラリアから、愛をこめて。　　ゆき　」

十年前の消印。遅すぎるが、ほっておけない不吉な匂いを、誰かたちはテレパシーで感じとっているのだ。祖母を保護したいゆきに共感し、犯人に対する憎しみを太らせ、もうふらふら。誰かの抱えている黄色いばらの花びらの上を水滴が滑った。
――わたしにも何かできるかしら？　このお祖母さま、もう、生きていらっしゃらないのかもしれないけど？
――仕事は色々あるよ。はね返したり、吸い込んだり、曲げたり！　騙したり！！
――そのお祖母さん、元気だったりして？　もっと、違った展開があるのかもしれない？
――急がなければ！　十年だよ！　ゆきさんがくじけないでいてくれたら、いいのだが？

自分の望むように生きることが、許されたためしのなかった誰かたちと、わたしは、
――この指止まれ！！
オカッパ頭の老婆の振り上げた手に、次々に手を重ね、少女を助けるためならと、見極めのつかない自由のなかへ飛び込んでいく。
互いに無力を認め合い、寄りかかりながら‥‥。

三郎丸家の玄関に通じる長い私道を、わたしたちは膝まで伸びた雑草を薙ぎ倒しながら進んでいく。
やがて、深緑のなか、三階建ての洋館が見えてくる。
わたしのピンクの口紅を塗り直したばかりの唇は、ゆっくりと口角をあげる。
――三郎丸ケイさんのお宅でしょうか？　ゆきさんのお手紙をお預かりしてきました！
家政婦だろうか？　使用人らしい女が引っ込むと、老婆がひとり、よろよろと駆け出してくる。
――足元が危ない！　老婆に向かって、手が何本も何本も差し出される。
――何故？　今頃？　ゆきの手紙が届くんです？

三郎丸ケイは八十歳など、とうに超えているのだろうか？　突然の孫からの手紙に、からかわれているのではないかと疑ったのか、わたしを見上げる不審の目が険しい。

――本物ですよ、十年前のものです。理由があって配達されていなかった郵便物が発見されたんです。筆跡をご覧になったら、おわかりになるのでは・・・。

――これが・・・ゆきの手紙？　筆跡は・・・、ああ、あの娘のものです。いいえ、そう思われます。・・・すみませんが、わたし、来週白内障の手術なんですよ。どなたか読んでいただけませんか？　できるだけ、ゆっくりとお願いします。

――わたし読む！　これでも、昔、美声で売っていたのだから。

オカッパ頭の老婆が、眼鏡をかけ、笑いながら手紙を引き寄せた。

声楽の素養でもあるのか、手紙を読む潤いのある声が吹き抜けの玄関ホールをのぼっていく。ゆきという孫娘は何処にいるのか姿をみせない。大正時代か昭和初期に建てられたらしいモダンな広い洋館に、ともすると家政婦と老婆の二人暮しなのかもしれない？　老祖母が生きているということは、ゆきの読み違いだったのか？　少女の勇みあしか？

わたしと同行した老人姿の中年男がわたしの足を踏みつけ、老婆の方へ顎をしゃくる。老祖母は目を閉じてはいるが、体が大きく前後に揺すれ、嗚咽が行き場を失って、伸び上がり、ビートを刻んで

尾翼から、また震えながら吸い込まれる。
――ああ、わたしの孫は・・・、ゆきは、・・・わたしのことを・・・こんなに心配してくれていたのに・・・・・・・・・・・・あの娘は、あの娘は、殺されたんですよ！！　殺されたんです！！　この手紙を書いた三日後、オーストラリアで、暴漢に襲われて死亡したんですよ。・・・・・・おかしいと思ってはいたんですが、なにしろ外国のことで、証拠がなんにも発見できなくて・・・・・・・。
どうか、この手紙を弁護士の山水さんに届けて下さいませんか！　他の人に見せては駄目よ！！いいですか、誰か体力のあるかたはいないの？　お願い、助けてください！　わたしはもうすぐ九十歳になりますが、これをはっきりさせなければ、死ぬこともできない。・・・十年たっていても手立てはあるはずです。きっと！！
――わたしが届けましょう。信じてください。たとえ、自分のためには何にも出来なくても、あなたの孫のゆきさんのためなら、出来ることもあるかもしれません。体力なら、大丈夫です。多少は知識もありますから・・・。
中年男は、手紙をとると、電話帳から山水弁護士の住所と電話番号をすばやく写し取る。
――その大村信也というのが、・・・・・怪しいのでは？　わたしと親しいなどといって・・・・・あの娘を安心させてしまったのではと・・・。

――もしかしたら、敵の秘密を握ったために‥‥。そうなんですか？
――そうかもしれません。いいえ、そうです。‥‥あの頃、わたしが狙われていたのですから。あの娘は、まさか自分が狙われているなどとは思ってもいなかったはずです。無防備だった！
老婆はいらだちを押さえきれなくて、座りこんでしまった玄関ロビー、大理石の床を叩き捲る。
――お孫さんに、確定的な証拠を握られた、またはそう信じて消されたのでしょうか？
――でなければ、わたしを殺せばすむことですもの‥‥‥。あの子は、ゆきは、まだ十九歳でした、むごいことです！！　‥‥‥でも、よくまあ、届けてくださいました。わたしは、毎日あの娘の帰るのを待って、死ぬことも出来ずにきたんですよ。ありがとう！！　ほんとに‥‥。あの人たちは、ゆきさえ抹殺してしまえば、相続権は自分たちのものだと安心しているのでしょう。わたしがゆきを引き取り、可愛がっていましたので、それがあの娘の命を縮めてしまったのかも‥‥。いくらあの人たちでも、ゆきを殺した上に、もう一人殺すのは危険だと、自重しているか、時を見ているのでしょう！　わたしが長生きし過ぎて困ってはいるのでしょうが？
――ゆきさんは、ひとりぼっちだったんですか？　いくらなんでも可哀想よ。十九歳だなんて‥‥。犯人は誰！！
わたしの少女が、ゆきに同情している。このきらめきはなんだろう？　予感を持って、今、全開に

なっている少女の瞳は、拡大する光に焦点を狂わせる。止まっていた光は、わたしの少女の真上を拡散しながら通過していく。

少女のすんなりと伸びた足が地面に触れていないのにわたしは気づく。

深夜が来ている。ひたひた寄せてくる潮があって、昼の汚れが消え、磯の香りだけが流れてきて、かあっと強いライトの列が連なる。わたしは自分の家の玄関ドアに近づき、郵便受けをそっと覗き込んでみる。

決して、わたしの少女が訪れてはならない、待っていたのは変身であって、こんなカードではない。強いライトを目に入れた後で、文字が見えない。部屋に入って郵便受けを閉じようとすると、ドアの向こう側から小包を突っ込もうとする荒々しい音。見えない誰かが無理矢理押し込もうとしているのだ。自分の領分を大きく荒らされている思いでわたしはすくみあがる。

小包が郵便受けの口から中へすっぽり落ちる。押し込んだのに、まだ向こうの人物の手が突っ込まれたまま、何かを取り返そうと蛸のあしみたいに動きまわる！

――とって下さい、小包と一緒に落っことしてしまいました！

慌ててその手をつかむが、一瞬早く、わたしの持っていたカードをつかみ取られてしまう。

――あなたはだーれ？　なんでこんなに遅い時間に配達しているんです？　わたしのところに小包が届く筈などありません。

小包はバラ色で、空色の蝶の模様が浮き出している。ドアを開けたときには、外の人物は既に向こうを歩いて行く、海に続くライトの行列に沿って行くようだ。あまり明るすぎるから、次第にその人物の存在さえおぼろになる。

わたしの老婆は小包を抱え、その後を追い駆ける。何時の間にか肩に鞄があり、より重みを加える位置に動き、這い登ったり、這い落ちたりして転倒させようと企んでいる。

奪われたカードに比べたら、鞄のなかの気の抜けた手紙など価値がないのかもしれない。

その人物は光に飛び込んでいく虫みたいに、光に浮いて、光を踏んで、吸って、光にむせて咳をして行く。

丸い影になったり、青白い炎になったりして素早い。

――待って下さい！

漂白されたような足に向かってわたしは叫ぶ。

――あれを返して下さい！

わたしの老婆は、振向いた黒い顔の中にちらっと輝く点に、心安くなり、嬉しくなり、突如家に引き返せない気持になる。引き返そうと二三歩歩くが、何時かみたいに、哀惜の情、このまま別れたら、二度と分かり合えるものに出会えない気がする。

ライトの眩しさに融けながら、わたしの老婆はその人物にとりつく。

――しっかりつかむ力があるなら、手をつないで放さないでいてください！

前をいく人物が跳び上がった、青い咳だけが走っていく。

老婆のわたしは手を繋ごうとして、空を掴み、置き去りにされた惨めさを解消しようと走ってみる。

今、鞄に目を固定すれば、――旅に出ました、――着きました、――おめでとう、――有難う、――全快しました。毒を失い、誰にも何にも影響のない日常があるだけ。この中から自分のものを見つけたとしても、歴史が変わるものでもない。日付で気の抜けた手紙は、嘘や、おべっかや、安っぽい感傷をのせて無力になる。

――わたしの受け取ったプロポーズの手紙みたいに、互いに傷つけあうだけなら、何の意味があるのよ。届かない方がいい！！

わたしも誰かたちも、届かないための灰色のポストに次々配り損ねた古い手紙を投げ込んでいく。

老婆の向こう側、獣の皮の鞄が、宝物のようにベッドの上に飾られているのが見える。
高速道路は車のライトの列。三色すみれはミッキーマウスの顔。丸い大きい耳を広げたり縮めたり。わたしは排気ガスを吸って咳をし、ガソリンの匂いを吹き出し、一番大きなライトを吹き消そうとするが、自分の命ごと吹き消しそうな大量の息でなければ消えそうにない。
これからは若さの輝きを意識する工夫がいる。大胆に体をたわめ、はねる弾み、一寸したコントロールミスで大揺れし、持っていた小包を手放してしまう。
バラ色の小包は灰色のポストに向かって飛び立っていく。何匹もの空色の蝶が舞い上がり、空にとけて見えなくなる。
以前あそこでは海鵜の子が親鳥の口の中に体の半分を突っ込んで、食物を要求していた……。今、鉄塔が箱舟を持ち上げ、ゆっくりと移動をはじめる。わたしの老婆に電流が通じ、耳に、右から左、一本の電糸が通って引き抜かれていく。電糸の通過は次第に下に降りて喉を切られ、両手を挙げた脇の下を貫いていく一線になる。むくみ充血した目、弛んだ肌、足より前に出ようとする首、老婆は少女を待ちくたびれる。
何時の間にか、わたしの手に握られている彼のプロポーズの手紙が、ざわめく。
――何故、自分自身を忘れるのよ！！　あなたが呻く。

――鈍重のものたちを、二度と、振向かないと！　そう決めたのは、あなたよ！！
――気にすることはないのよ、例え殺しても、彼は生きてはいなかったのだから。
――彼が本当の意味で生きていなかったのなら、これからこそ、生きなければならなかったのだから、わたし、重罪を犯したことになるのでしょう？
――殺さなければ、あなたの方が殺されていたのよ！　でも、その方がいいのなら‥‥。
――どうしてわかってくれないの！　彼はわたしを愛してなんていないんだわ。それに、こんなこと、誰にも言えないもの！　そしてわたし、何処にもいられないのよ‥‥。

真綿みたいな月が三つ、西から昇って忘れずに東に沈んでいった。乱視になったのかもしれない。

甲の高い足が何時までたっても、山水弁護士事務所の前で足踏みしている。そんなことをしていたら、逡巡しているうちに一生が終わってしまう。老人姿の中年の男は肩からずり落ちそうな上着を、肩を揺すって何度でもせりあげる。見かねた誰かたちの手がどんと、背中を勢いよく突き放した。

山水弁護士は中年の男を前にしてとまどっている。どこかで見たことのあるような風貌をしている。弁護士の脳細胞のコンピューターがチカチカ音をたてつづける。

――はあ、三郎丸ゆきさんのお手紙ですか？　お祖母さんの三郎丸ケイさんに宛てたお手紙？　ほう？　そう言うことになりますか？

――はい、郵政の怠慢から、投函されてから十年後遅配されたものです。ケイさんから、先生に届けてほしいと！

――そうですか？　ひどいものですね。大村信也、恐らく偽名でしょうな？　亡くなったときの調査では、日本人らしいボーイフレンドと一緒だったという、証言もあったにはあったのですが・・・・。何しろ外国のことで、思うような協力は得られなかったんです。ゆきさんはおくてのお嬢さまでしたから、旅行中の行きずりの友達に過ぎないのではないかと思ってしまったのですが。となると、これは大変なことになりますな！

――ゆきさんが心配していたように、やはり、ケイさんは狙われていたんですか？

――長い間毒薬を盛られていたのではないかと思われます。ゆきさんが気がついて、薬を一切絶ったところ快方にむかったんです。それは秘密にしておりましたが、まさか、今度は、ゆきさんの命が狙われていたとは・・・・・信じられませんね。

――ゆきさんが何か決定的な事実を握っていたのでは？

男は調子をとり戻している。

――そうですね、調査してみましょう。ケイさんには安心して任せてくれるように言って下さい。とにかく決着のつくまでは、もう十年は長生きしてもらわなければなりませんと、そうお伝えください。勿論大至急ことは運びます。アハハ、これは彼女へのラブコールということで・・・・。

それから、あちらで撮った写真など、遺品を調べて下さいませんか？　それらしい人物が写っていないかどうか？　何か証拠になるようなものはないか？

――旅客名簿も調べてみましょうか？　協力者は沢山いますから・・・任せておいてください。

――秘密は護って下さいよ。敵に知れては元も子もありませんから！

中年男は、つきものが落ちたように、手際よく話し続け、微笑さえ浮かべて唾をのみこむ。

――僕、もとは弁護士をしていましたが、事件に関与して辞めてしまいました。調べてくだされば わかることですが・・・・。

自分から正体を明かすことにした途端、老人姿の中年に若さが戻ってくる。

――覚えていますよ。そうではないかとおもっていました。あれはお気の毒でしたね。みんな同情していたんですよ。若い女は怖いですな・・・・・。それでは、ケイさんのため、お互いに一肌ぬぐこと

に致しますかな！
――われわれは、ゆきさんのために動くことにしたんです。
それまで、手持ち無沙汰に、二人を見守っていた誰かたちが嬉しそうに頷きあっている。
――はあ、皆さんは、ゆきさんのお友達でしたか？　ゆきさんは人気者だったんですね？
――いや、皆で、勝手にそう思っているだけなんです・・・。
――ハハハ、ハ、ゆきさんは可憐でしたからね。ご本人に聞いて見なければわかりませんかな？

わたしの少女が発光しているのがわかる。もぐりこんできたゆきを、わたしは扱いかねている。
――光が怖い！　死は生きるにふさわしいものではなかったわ。
ゆきが言葉を選んでいるのがわかる。ゆきが何を思ったのか、突然唄いだした。
――夏休みには、とうもろこしの赤い毛に、ブラシがつかえているだろう！　緑のケープをめくりあげ、黄色い歯を見せて、笑うだろう！　エヘヘ、オホホホ、アハハ、ウヒヒヒ、みんなみんなも、お化けになって笑うでしょう！！

――夏休みには、ひまわりが、お日様追って目を回し……。トホホ、スクスク、テヘヘ、スクスク、みんなみんなも、セイタカノッポになるでしょう！！

わたしの少女も声をあわせる。

――懐かしいわ、こうしていると、ボーンと耳が鳴って、耳から熱くなった海水が溢れでてくる。話を聞くのは好き、耳が喜んでると思えるもの。そのためにわたし、他の人より大きな耳を持っているのよ。

わたしの少女が紅潮した耳を、十字に引っ張ってみせる。

――そう！　雲に浮いた路地は、幻を乗せて凹みもみせない。その脇には時々魚のはねる二本の小川が流れていて、カラスとんぼが水面をかすめては舞い上がっていたわ。あめんぼうの長い肢のあいだから、モールみたいな浮き草の明るい緑が、揺すれながら夢見ていた。岸辺のいたどりの葉は日に日に大きくなって、茎を手折ると、スッポンと音がはじけ、わたしはその茎の穴から世界を見ていたの！　子供たちの胸には勲章草が、背中にはいぬこづちの実が、へばりついていた……出陣の前には、わたしの好きな夏の頭に、王冠を飾るわ！！

ゆきが身震いするのがわかる。何を決心したのだろう？

飛んでいるとも飛んでいないとも判断出来ない透明な羽虫がわたしの上に舞い降りてくる。

――あなたのご両親は亡くなられたの？
――ええ、交通事故で‥‥。
わたしの少女とゆきは長い間無言でいる。
――親友になってあげてもいいのよ！
――その気になれたらね。
ゆきが笑う。わたしの少女が頷くと淡い幸福な気分が漂って、ゆきを縁取っている光が揺れながら、夜の翳を追い込んでいく。
――わたしはね、大人になったら虹のすそまでいってみたいの！　虹のすそまでいってみよう！そう思いつづけて生きてきたのよ。その他には何一つ夢見たことなどなかったのに。　昔、子供の頃よ。野原の一本道を虹に向かって、たった一人で歩いて行ったの。歩いても歩いても虹は遠くて、近づいて来てはくれなかったわ。もう、足が痛くなって、はだしになって歩いても、たどり着けなかったの。大人になったら行ってみよう！　そう思ったのよ。今でも、たった一つのわたしの夢！！
わたしの少女の声がオクターブ高くなっている。
――そう、美しい夢ね、うらやましい！
――そんなことない。　現実感を欠いているでしょう？　それがわたしを生き難くしているような

気がするんです？
――でも、わたしの夢にくらべたら……。
ゆきが逡巡しているのがわかる。死んでいるのを忘れそうになる。
――ゆきさんは無垢な感じ。いいえ、わたしが言ったんじゃない。みんなが感じたのよ！
――それは、はずれ！　おおはずれ！！　わたしは怖い人なんです。　わたしの話を聞いたら、みんな逃げていくと思うわ。まあいいか？　殺されてから、見栄張ってもしょうがないかな？
あなたが、ゆきをうながし、そっと手を重ねたのがわかる。
――わたしは子供のころから、明るい子供ではなかったのよ。その証拠にどんなに輝かしい未来も夢見ることなどなかったわ。だから正反対の夏が好きなのかもしれない。勿論花嫁になりたいと思ったことなど一度もなかったな。
たった一つ夢見つづけたのは、一アールの土地を買って、一アールっておかしいでしょう。でも、そう思ったんだから。芝生を植え、墓を一つつくる夢なの。墓には地下室をつくって、あらかじめ棺をいれておくのよ。わたしはその時がきたら自分で入っていき穴を閉じ、睡眠薬を飲んで棺のなかに入るの。誰にも知られずに、そっと！　わたしはしっっこくこの夢を持続しつづけたの。そのためにはほんの少し働かなければならないと、子供心に覚悟していたのね。何故、わたしがこんな夢にとり

つかれたのか不思議なんです。そのころは、まだ両親も健在で、大きな家に住んで、不自由ない生活をして、外見から見れば、可憐なえくぼをへこませて笑い転げていた少女が、そんな深淵を隠していたなんて、われながら、恐ろしい気がするの。それがたった一つの夢だったなんて、結局自分の未来にある確実なこととしての死しか想定できなかったなんて！

ゆきはそっと、息をついだ。

――中にはいってからどうして、穴を閉じるか！　それだけがわたしの人生の課題になったの。芝生を敷き詰めて、そこに白い平らな墓。その他には木一本、花一本ない。

あきれたでしょう！　これを話したら、多分友人からも、恋人からもそうすかんを食うなんて、子供ごころにもわかっていたのね。だから、十九歳になっても人に話すことなど、なかったわ。その必要もなく不用意にも突然殺されてしまって‥‥。やっぱり、夢破れたというべきなのか、わたしにはわからない！

――そう、それが、ゆきさんの夢！　思春期にはみんな死にたくなるのよ。わたしには興味深かい。ゆきさんと正反対みたいでいて、かえって、共通点があるみたいな気がする！！　みんなは何かを感じとっているわ。ゆきさんのためならって集まっているのよ。そんなこと、一度も考えたことのなかった、孤独で不運なひとたちが。わたしもだけど‥‥。

幸福にはなれなかった！　でも、せめて！　そんな想いで、助けの手が何本も何十本もゆきに向かって差し伸べられる。内臓も頭も足もカラカラに乾き、繊維になった思いで、みんなは、さやさやと音をたてる。

――羞恥のために一歩も踏み出さないうちに、わたしの人生は空白のまま見送られてしまったのかしら？　結局お祖母さま一人護ってやることも出来なかった！！

まどろみもしないで待ち、草臥れて誰でもいいから待つことになり、ずっと以前みた映画みたいに真夜中、訪問者がつかつか入ってくる靴音を聴く。

若々しい長身の男は何ヵ月ぶりかで自宅に戻ってくる。酔っぱらっている。

――不審尋問など、しないで下さいよ、どうぞ、しないで下さい。何人殺したかなんて、気になさらないことです。どんなに美しいものを、無垢なものをこの手にかけたか聞かないことです。貴女は僕の友達じゃありませんか。忘れましたか？　殺し屋は疲れるものです。言って下さい、お休みなさいと！！

男はいってベッドに転がり、大の字になって寝込んでしまう。少女姿の老婆は恐怖している。酔っ払いを追い出す方法は？　顔を見られる前に老婆は透きとおるか、縮むか、とけるか。こんな男とかかわり合わないためには、チャンスにこの顔をまん前に突き出せばいい。それで終わりなのだと分っている。

男は逃げていくだろう、わかっているわ。それなのに、誰かの老婆は若い部屋で、主を見届ける任務を課せられているため、自分を偽ってひそんでいる。力ないものになって、安静を自分に命じる。その周りで誰かたちが息をつめる。

夜の中で煙る小さな灯は次々に消え、海へ向かって並ぶ強いライトの行列、それは殺人光線のように一段と冴える。それは、この男をベッドごと海へ引き摺っていく為のルートとしてあるのだと分ってくる。

――だらだらと決意を先延ばしするのは嫌です！

わたしの少女が現れない前に、海を招いて海に男をすてる為の行動を始める。男を乗せたベッドごと引き摺る。高機能ベッドの車輪は、音一つきしみ一つたてない。何時のまにか何人もの手がそれを引っぱったり押したりしている。気付かれないように、何気なく話してみたりしながら・・・。

――急に老け込んだような辛さで、寂しくなっていたんですよ。いいことなんて、とんとありませ

んでしたわ。あなたは？

みんなの後ろからついていくが、彼らがあまりにも早く歩くので、少女姿の老婆は靴を落としてしまう。黒く磨き上げられている靴は光を反射して金色。

わたしは長い一呼吸をしてから、耳を澄ます。オカッパ頭の老婆が声をはりあげた。

――わたしたちは貴方を存じあげていますよ。お名前は大村信也！！　いいえ、通称は大村信也！本名は八品秀吉！！　誰に指示されて三郎丸ゆきさんを殺した！！

みんなは一斉に目覚めている。覚めることの出来るのは老人ではないということが分かってくる。ゆきの仲間たちはベッドを引きずって、海に向かって一目散に走り始める。

――第３部――

長い腕を広げ、黒い影がベッドの上に立ちあがるのが見えた。海に飛び込もうとして男は転倒している。またも派手に飛沫をあげながら転倒してしまう。

あの男の驚愕が伝わってくる。男が周囲を見回している。発光体が男の視野を通り過ぎた。

――助けてくれ！　僕じゃない！　助けてくれ！　きみを殺させたのは、三郎丸公平だ！　僕じゃない！！

男はベッドを揺する。漸くバランスを保っていたベッドが沈み始める。

薄闇を光線が走りまわり、交叉し、角度を変えながらベッドが持ち上げられ、立ち上がる海が、突如、闇を割く強烈なライトに切り刻まれ、ベッドの柱に縋りついている男が照らし出される。海上保

安庁の巡視船がせまっていたのだ。
船体にぶつかった波が黒い海に白い波紋を拡げていく。海上を漂う、鈴なりの頭を持つ黒い穴の回りを蛸の手足が縁取って、イソギンチャクのように開いたり閉じたりしている。
わたしはその中央にいる。いくつの目といくつの鼻と、いくつの口を持っているのか？　その数に気押されて自分自身に届かない。
誰かたちは心の縁のぎざぎざを互いに埋めあい皮膚と皮膚を繋いで、とぐろを解きながら、長い蛇になって白い波を押して動きはじめる。渚をめざす誰かたちには、その先頭にいるのがゆきだとわかっている。
わたしは、舌を動かして自分の声をさがしている。頭のなかで打つべき句点がブランコみたいに揺れ、かすかに感じられる空気のおののき。まだ遠くで泣いている、あなたからのシグナル。
――どうして欲しいのよ。
勝利に向かって進む光と音は、突然わたしを齧りはじめる。そして口直しのように幻が飲み込まれる。
何があったかわからないのに、何かがあったと思わせるなにかが、海から陸へと流れていく。
今度こそ、配達は終了したのだ。後は待つだけでいい？

――　一生待ち時間だったわ。これではあの世に行ってもバスを待っているわね。

笑っている四角、光っている三角。光に縁取られて楽しさが発酵する。

恋している犬が右手と左手から来て、わたしを無視し夢見るように連れ立って歩いていく。

わたしの少女はキスするすべを知らないのだ。張りつめた瞼が音をたてるかと思われるような瞬きをする。

――引力から開放されること、これは進歩の為の第一条件だよ。その気になれば、あらゆる引力からだって開放されることができる。そして革命は達成される！

――革命って？　何を指しているのですか？　永遠の命、そんなもの？　それとも、何にでも変身できる自由？

――どんなに、しゃいでも、孤独でも、ときに、群れることを恐れなければ、飛ぶことも、くぐることも自由になるさ！！

蛇や獣の死骸らしきものを引き摺って男たちが行く。昆虫の死骸や抜け殻を回収して少年たちが走り回る。日輪をちりばめたプリント模様のプリーツが一杯に拡がり、運ぶ者たちの足にまといついて行く。小鳥たちは天空で、一斉に血を吐くほどに鳴きわたり、昆虫はその一生をかけて翅をすり合わせ、蛇たちは地上で競って怒張した鎌首を上へ上へと持ち上げる。

――弔い合戦だな！

風がそよぐ度に無数の白い花がゆっくりと舞い降りていく。荷電されたしびれが表皮の下を、もどかしいほどゆっくりと移動していくのがわかる。

わたしは、社名がクローズアップされたオレンジ色の壁の前に、微笑を湛えて座っている受付の女に近づいていく。

――社長に面会したいのですが。

――どちらさまで？　ご約束は？

――ない、アポはとっていません。わたしは、三郎丸ゆき！　社長の姪にあたります。至急お会いしたいとお伝え下さい。

――ご約束がなければ、ご面会はできかねます。私的な御用でしたら、ご自宅の方へお越しくださるのが筋では？

――筋って？　若いのに、へんなひと！　ここの社長は社員に愛されてはいないのね？　お会いし

たいことがあって参りましたと、そのように伝えて！　‥‥社長がこちらにいらっしゃるのはわかっているのよ。

ＢＢＢＭバンク受付の女は、場違いなわたしの少女に警戒の色をにじませる。三角のテナントが受付の女の鼻息でかすかに揺れている。

――あなた、そんなに不親切にして、後で社長に怒られても知らないわよ！　くびになるかも？

わたしの少女はオーバーに頸をすくめる。わたしは、わたしの少女がこんな風に渡り合っていくことに驚愕してしまう。

――はあ、それでは、少々お待ち下さい。お伝えするだけはしてみますから‥‥。

受付の女は、更に逡巡したあと、漸く足を引き摺って後ろのドアノブにとりつく。

社長はどう出るか？　楽しみにもなる。まさか、警察に知らせはしないだろう、知らせることは余りにも危険だ。逃げるだろうか？　それにしては気になる女の正体？　実態を自分の目で確かめて見ようと思うに違いない。

そう思ったとき、受付の女は戻ってきて、わたしを第三面会室に導いていく。終始、ポーカーフェイスで無言だ。

荒々しく社長が入ってくる。社長秘書らしい男たちが社長の大きな掌で遮られている。ケイのアル

バムにあった男だ。丈は百八十くらい、顔は写真よりもケイに類似している。そのことがわたしの踏み出そうとする鼻柱を砕いてしまう。本当の親子だったのだ！　ケイにとっても複雑な想いがあるに違いない。わたしは血の繋がりのない子供なのかと思っていたのに、逡巡すると、ゆきがわたしの前に出た。

――ああ、伯父様、暫くでした。ゆきです！　三郎丸ゆきです！　お元気ですか？

ゆきは思いっきり明るい声を浴びせている。

――ゆきだって！　それはない！　ハハハ、ハ、それだけはないんだ！！

男の目が四白になって、眉が霜降りの前髪に隠れた。

――あれから・・・伯父様に勧められて、オーストラリアに飛んでからってことですけど、十年たちました。そこで、帰国することに致しましたの。本当に帰ってきたんです。で、ご挨拶に伺うようにとお祖母さまが五月蝿くおっしゃるものですから・・・。

三郎丸公平は巨体を揺すってから、ソファーにズドンと乱暴に腰を降ろした。その勢いで、わたしの前のコーヒー茶碗が十センチほど場所をずらした。まずは、品定めに移行したらしい。立上っていた眉間が開く。

――きみは一体何者だ！　ぬけぬけと、ようまあ、言うねえ！　なんのまねだか知らんが・・・。気

はたしかか？？　まあ、いいだろう、話してみるがいい。そのうちに、化け化けの皮がはげるだろうさ！　さあ、その後から何が出てくるか？　蛇がでるか、ジャガでるか？　見ものだねえ！！

――あら、伯父様は、わたしが、お分かりにならないのですか？　わたしそんなに変わりました？　もっとも、十年ですけど！　お祖母さまは、「大人らしくチャーミングになったけど、面影は子供の頃のままだねえ」っておっしゃいました。

――ところで、幾つになる？

三郎丸公平は試すように唇の上に人差し指をたてた。結構楽しんでいるのかも知れない。どこかで笑いを堪えているような、そんな気配も感じられる。

――二十九歳になりました。もうすぐ三十です。

公平が鋭く掬い上げた視線を、揺するようにゆっくりと回すと、何故か、わたしに眩暈がくる。

――そんなになるかな？　で用件とはなにかね？

――これからは、お祖母さまとご一緒に暮らすことにしました。大学院に行こうと思います。ついては保証人になっていただけたらと・・・・。

――ほう、大学院か？　やっぱりな、結局は金だ！　で、専攻はなんだ？

――向こうではこの間まで、病院で研修医をしていました。

駄目！　そんなことを言ったら、すぐに、つじつまがあわなくなるじゃない！　わたしの少女があせっている。

――ほう！　それでは専門家だから、遠慮なしに質問したい。一度死んだ人間が十年たって現れるということは、医学的にいって、どういうことかね？　見解を聞かせてもらおう！

――それは・・・、それが事実なら、医学的には、死は否定されます。死は誤認された又は、犯罪として仕組まれた疑いがある。そういうことになるかと・・・。

――それは、並の人間のする推理で、医学的とはいえないな！

――と、おっしゃるということは、あら、わたし、伯父様のなかでは、既に死んでいるんですか？

――そうだよ！　十年前、オーストラリアで暴徒に襲われ、立派に死んだ！

――立派に死んだ！　それは伯父様の願望？　わたしはこんなにぴちぴちと生きているのに！　伯父さまには、わたし幽霊に見えます？

――ああ、見えるね！　見てご覧！　その証拠に足がないじゃないか？

公平はわたしの足を指さしている。してやったりと鼻翼が広がっている。こんな女の一人や二人と思っているのが透けて見える。

――伯父さま、眼科にいらっしゃって下さい！　こんなに綺麗な足が見えないなんて、汚いものば

かり見ていらっしゃるからかしら？
ゆきが、むきになって切り返している。前進しても後退はしない決意が感じ取れる。
――冗談はもういい。何の目的があって乗り込んできたんだ！　警察は呼んである、もうそろそろ、つく頃だが・・・。
――それはない！　おどしても駄目です！　伯父さまは大村信也をご存知ですね？
公平が肩をひらいた。仏頂面が口を絞りあげると、反動のように目が飛び出してくる。
――さあ、しらないな、それがどうかしたか？
――信也は友人です。十年前、彼から依頼されて、三郎丸ゆきを死んだことにして欲しいと・・・。わたしは奨学金と交換にそれを受け入れました！　よって、死んだのはわたしではなかった。これが事実です！　お分かりいただけましたか？
――そんな馬鹿な！　きみ！　指紋も、死体のＤＮＡも合致したんだぞ！　医師がそれくらいなことが分からなくてどうする？
公平は歯止めがきかなくなり、切り札を早々とさらけ出して笑い声をあげる。
――それはまやかし！　金を出せば偽造することだってできます。なんなら、大村信也から真相を聴いて下さい。それとも、なにか不都合でも？

――なんだと！　そんな必要はない。きみ、若い者が科学を信じなくてどうする。科学はだまさない！！　詐欺をもくろむならもくろむで、もう少し頭をつかうんだな。その程度で、天下の社長を脅迫しているつもりか？

公平は女とみて軽くいなすつもりだ。時を測っているのかもしれない。

――そこまでおっしゃるなら、是非お聞きしたいことがあります。伯父様は、どうして、そうまでして、わたしを葬りたかったのですか？　やはり、遺産ですか？　それなら、わたしはお金など、欲しいなんて思ってもいなかったのに‥‥！

――遺産、勿論それもあるさ、母がゆきに全財産を残すといっていたからな。それをどんなことがあっても阻止したかった。びた一文ゆきに相続させる気はなかった。

――嫉妬ですか？

――そう、そうかもしれないな？　ゆきだけではない。ゆきの父、太平は僕とは親子ほど歳の違う兄弟だった。母が不倫のすえ生んだ子供だよ！　年老いた父はそれを実子として入籍したんだ。それをいいことにして、母は猫かわいがりして、父の死後、弟を擁立して、会社にも口出しをし、ことごとに長男である僕をないがしろにしてきた。‥‥弟夫婦が交通事故にあったと聞いたときは嬉しかったな、天罰だと思った。ところが今度はその孫だ！　僕にも、子供がある。みんな美人で頭もよい。

どう見たって、ゆきよりは遥かに上だ！　それなのに、母はゆきしか見ていなかった。僕にはそれが赦せない。母に対する鬱憤を晴らしたかったんだよ。　まあ、それが、失敗したのなら朗報だろうさ。あの鬼婆にとってはな！

――そう、それが本音ですか？　やはり関与していたんですね！　お聞きできてよかった！　同じ殺されるにしても、その原因が何にも思い浮かばないっていうのも、おかしなものですものね。

ゆきの声が沈んでいる。わたしの少女が素早くゆきを背に回して身構えた。油断しては駄目よ！

――そうか、推理ものとしては、そんな展開があっても面白いが、そういうわけにはいかないんだよ！　十年前の事実は揺るがない。ゆきは、暴漢に殺されたのだ！！　ぼくは何時までも推理ごっこに付き合っている程、暇人でもないし、物好きでもないんだ。それでは、これで失礼するよ。わかっているね！　死んでいるものを殺しても罪にはなるまい！　そのくらいの覚悟はできているのだろうから！　全く、アクロバットだな、馬鹿な女だ！！

社長が合図すると屈強な男たちがわたしを取り囲んだ。見る間にわたしの足が浮き上がる。

最後であってたまるものですか……。叫ぼうとする口の中へ猿轡が詰め込まれる。生の威厳などとうに捨てているのだ。わたしの光りの粒子は男たちに乱暴に押さえ込まれ、存在さえ不明になる。

――大村信也が逮捕されたぞ！　ゆきさんはどこだ！！　受付のあたりで、誰かたちの声が入り乱

れている。
パトカーの音が近づいていた。

薄皮でもはぐようにケイの表情が明るくなってきている。オカッパ頭の老婆をケイは、何とも自然にゆきと呼び、老婆は日増しに若返っていく。誰かたちも、やってきては庭を魔法のように蘇らせる。樹々が勢いをまし、花々が咲き乱れ、わたしが顔を近づけると花は綿毛のような羽虫になって舞い上がる。

ここは擬態の王国。人間である誰かも、わたし自身も、かりそめの擬態！　現に少女だったり、老婆だったりしていたのだから。

――こんなに暖かい親密な人たちに囲まれて生きていくなんて、考えてもみなかったなあ！

誰かたちがかき集めた枯葉から、幸福そうな吐息を乗せて、嗅ぎなれた煙が立ち昇っていく。

――生きていく方便を、孤独にしか見つけられなかった者にとって、これは七不思議さ！！

――これって、はじめて友達ができた幼いころの喜びに似ている！

少女姿の老婆も、青年姿の老人も、老人姿の中年も、老婆姿の少女もいる。警察の視線を気にしながら時の過ぎるのを待っているのだ。わたしは彼らを避けて、飛び石をたどっていく。

――家の死人たちが言うのさ、一人くらいは生き残っていなくっちゃあ、話にならんよって！

魔法の足は踊りつづける、息絶えるまで‥‥。本当にその時がくるのだろうか？　わたしの心もとない未来が淋しそうに体をすくめる。

気づくと築山の上の見晴らし台に導かれている。正面視野、驚いたことにあの鉄塔と、箱舟がばっちりとおさまってしまう。角度を変えてゆるゆると大地は移動を続けていたのだ。

作為か、天変地異か‥‥。危険を予知した獣や蛇たちが鉄柱にむしゃぶりついているのが見える。どの鉄柱も足をからめ、体を巻きつけた動物たちで満杯だ。箱舟の中から無数の昆虫が飛び立つのが見える。この儚いものたちは、何から逃げようとしているのか？　何をはじめようとしているのか‥‥。不思議な時間が疲労を背骨にそって運んでくる。

かろうじて下降を食い止めていた、わたしの細い足が赤い花のめしべにからまっている。わたしの灯がパッパッとフラッシュバックしている。こめかみが動悸をうっているのがわかる。わたしの苦悩に誰が感応しているのだ？

疑問を宙ずりにしたまま、わたしが庭の散策からリビングに戻ると、ケイが元弁護士と話し込んで

いた。その打ち込み方が、普通でない気がする。
わたしは邪魔をしないように、そっと二人の後ろのソファーに掛け直した。
――勝訴したとしても、セクハラ弁護士として起訴されたレッテルは、確実に恥として居残ってしまう。何故、恥は僕を標的にするのでしょう？　僕自身がその恥に耐えられないのに……。
――恥ってなんのことです？　わたしにはわからないな。わたしはわたしなんだし、他人に自分の判断を譲ったりはしない！　その為にどんなに生きにくくても！
――……そうですか？　ケイさんは、そうなんだ！　多分ここにくるみんなも、自分を解放しているなら、こんなにも異常に蓄積されてしまった僕の恥の観念など、理解出来ないのかもしれない！　悪意が四方八方に罠をかけているなら、飛び上がるしか抜け出す方法はなかったのだが……。僕にはそれができなかった。勇気がなかったんです……。でも、僕は幸運にも、ゆきさんのことで、みんなに背を押されて飛び上がったんですよ！　体が昇っていくような、そんな気がしました！　不思議なものですね……。
わたしは老人姿の中年の男が、今、青年のように生き生きとしていることに驚いてしまう。再び弁護士としての、仕事をはじめる気になったのだろうか？
――これからも、一度貼られてしまったレッテルは強力にあなたに刃向かって来るでしょう。でも、

それが何かしら？　勝訴したのでしょう！　恐いものなんてもう、何一つないのよ！

みんなも、わたしも、あなたを頼りにしだしているわ。もう、逃げられないと思う。決心はついているのでしょう？　あなたには、みんなの、ついの棲み家を！　自由に通じる扉をここに開いて欲しいのよ！！

ケイが明晰であることに、わたしは驚いてしまう。九十にもなっているのに？　三郎丸公平が言っていたように、ただものではない、そんな気がする。彼の捨てゼリフの鬼婆にも、多少の愛情と、畏敬が込められていたのかもしれない。

もと弁護士は、はっと振向くと、わたしに向かって手を振り、ついでのようにその手に握られている手紙を突き出した。五年前の消印がある。しっかりと握り締めていたのか幾分体温と湿気をおびて、わたしの手になじんでしまう。

〒［ある日、わたしは試験の答案用紙を堆く積んで、採点のアルバイトをしていました。単調な作業にわたしの大脳は時に温もってぼやけてしまう。眠気が襲ってきていたのです。もうろうとしていて、ふと見ると、答案用紙をめくっているわたしの手が、とまどっていました。そこには、「佐川先生、二枚目」と書いてありました。目はそこで動かない。わたしは慌てて前の答案用紙を繰りなおしまし

た、用紙のうえ、横文字で「一枚目」二枚目の次には「三枚目」と、いわゆる丸文字で書き込まれていました。なにも書くこともないのに？　一枚目三枚目には先生の名はありません。これだから、女の学生は油断出来ない。受け持ちの教師が採点したら、甘くせずにはいられなくなるでしょう。それにしても、わたしはその微妙に計算された行動に、同性として舌を丸めてしまい、もう一度、模範解答とつき合わせました。厳しい女の目でつき合わせてから、赤線で、「佐川先生二枚目」を囲って注意と朱書しました。そして、わたしの日誌には、「もう一度、目を通すはずの佐川先生の目が、大きくなるでしょう。でも、悪い気はしない、きっと！」と書いて、念のためにその学生の名前を書き込んだのです。

佐川先生が弁護士になられたことは、セクハラ事件が取りざたされるようになって、始めて知りました。わたし、ずっと、探していたんですよ。大学関係だと思っていましたから、わからなくて・・・。先生に限ってそんなはずないのにと、わたしには信じられましたから。何とかお力になりたいとあせりながら、何一つ出来ないでいたある日、被害者の女の名前が気になりだしたのです。日誌に辿り着くまで、試行錯誤しました。日誌の名前が被害者の女性と同名であることに驚愕しました。わたしの問いにあの女性は「佐川先生が、わたしと無縁のまま通り過ぎることが、我慢ならなかった。それに抗議しているのよ！」と告白しました。先生は突然の状況変化に、腑に落ちないことも多かったので

はないかとおもっています。先生を好きだったからセクハラ事件をでっち上げ、どんな形ででも繋がっていたかった女性に、わたしは自分の姿を重ねていました。だから、表面には出ずに弁護士に材料を提供したのです。

離婚までなさった先生のご迷惑を考えなければ、あの娘が可哀想でなりませんでした。でも、あの答案用紙の「佐川先生二枚目」に限るなら、巧妙な逃げ口を用意し、採点を有利にしようとする、ずるさが、わたしには我慢なりませんでした。とても、先生を好きだと告白したものとは考えられなかったのです。そのことを問い正すと、告白してあった筈だとあの娘は言いはりました。答案用紙の裏紙は「スキ、スキ、スキ、スキ、」で一杯にしたのだと・・・。

先生のお元気になられるころには、わたしも勇気をだして答案を書きたいものです。

それでは、お会い出来る日まで。

×××年6月7日　　佐々木　しおん

そこには、軽いフットワークで、ずっしりと人生が居座っているように、わたしには見える。これでは重くて、この男は一人では飛べなかったはずだ。でも、見方の違いからか、男に深みが出てきたような気がする。

――これに、気づいて、いらっしゃったのですか？
わたしは聴かずにはいられなくなる。
――彼女のこと？
――いいえ、違います。その答案をご覧になったのですか？
佐川元弁護士は長い間、無言でいたあと、消え入るような声をだした。ぼそぼそとしてよく聞き取れない。わたしは目を見張って推定する。
――はい、見ました、そして、大きく減点しました！　と。

――きみからの電話のあと、僕はすべてを捨て、何もかも、やり直そうとしたんだ。入り婿で入った会社社長の特権は失われたのだ。新しく入った職場には、序列があるらしく、僕は列の一番後ろに並んだ。することもなくて、僕は親近感から、前の丸い頭を撫でたり、そっと、叩いてみたりした。すると頭は突然切れてしまい、僕を組み敷き、僕の上に乗っかったんだ！　僕はそんな恥を我慢できない！

顔のない男が、わたしに向き直る。

――あなたはかって、僕の顔を見たことがありましたか？　僕は何時も一人ぼっちだった、ずーと、あなたと一緒にいたのに！！

――わたしは恥かしがりやで、あなたの顔を真っ直ぐに見ることができなかったの。だから反動として、そっぽを向いてしまう。でも、わたし、そんなに悪いことをしたのかしら？　女の心理をわかっていれば、そんなこと、みえみえなのに・・・。今朝、わたし、蟻たちに出会ったのよ。彼らは前進していて、時々頭をよせあい、わたしの危険性について、ささやきあっていたわ。前進して来るものが過去だなんて、わたしには信じられない？　頭はなくても、あなたはあなたなのだから。目に見えないからって、存在を主張できないというものではないと思う。まして、それが恥だなんて？　わたしは傘を持たない人も、見えない人も好きよ！！

――僕は、幼児のころから、あなたと一緒だった、でも、あなたは、僕に気づかなかった。僕はずっと、その他大勢の中にくくられていたんだ。大学を出、あなたを追って同じ会社に入社して、はじめて、あなたは、僕の存在を知ったのだよ。僕はそれを、黙ってきたんだ。何故って？　寂しいからさ！　逢いたかったからさ！！

押しつぶされていた彼がジャンプするのがみえる。ベッドのばねが大きな音をたてた。

誰かたちの放棄した人権や、獣権や鳥権や虫権や魚権が投げ出されている。誰も魂を探したりはしないのだ。

――いつか、消える虹の曲線を夢見つづける、きみのもとに立ち帰るさ！

手の皮がむける程手を洗いつづけていた女が、三白眼を大きくしてわたしを振り向く。

――つるむのは罪よ！

――誰？

――つるむって、な―に？

わたしの少女が問い返している。

総てが言葉になりきらない！　総てが言葉になりきれない！　人間になりきれない！　そんな想いでわたしの老婆は無口にキルトをはぎ合わせていく。

輝く皮膚の下で骨がゆっくりと動くのが見えた。意識はあるが何かが欠損している。夢は否定しあって陽の目をみることはないのだ。眼球の表面を何千人もの群衆が過ぎていった。

――何時だって、先頭に立っているのは馬鹿か気違いにきまっているさ。正常な人間は他人を支配したいなんて、考えないものさ！

先頭に立っていたのはゆきで、わたしではなかったのに‥‥。
――あなたと、わたしは、同類なのよ。悪知恵があなたの身上なら、わたしが善人ぶっても始まらないのね！
突如、車という車のタイヤがコンクリートに接して燃え上がり、炎をあげて突っ走る。わたしは思いっきり、アクセルを踏む。
――ブレーキとアクセルを間違えたら駄目だよ！！
彼が叫んでいる、想いは長生きできない。道路をきらめかせて回って行くのは、タイヤたちだ。わたしの足は車の天井でコンクリートと出会う。わたしが半回転すると、道路は下に、空は上にあって建物や樹々は土の上だ。自然が収まるべきところに静かに収まって、下降していたわたしの血液がようやく心臓に戻ってくる。
人声が入り乱れていた。
生きていたのかもしれない。あらゆる方向から賛辞が囁かれている。
――わたしはいないのよ！　誰に？　誰の？
――とにかく、話し続けましょう。こんな日には、言葉があるというのは救いなのだから‥‥。
わたしの知らない死の家で、わたしの耳が双方から希望を探っている。澄んだ音色で希望が体の上

を転がっていくのをわたしは聴く。
――彼の腕の中で死にたい！！
物見高い人々の敵意が感じられる。わたしの瞼が痙攣する。
――何を感じているの？
――何を恐れているの？
――何を期待しているのよ？
わたしは死んでいるのに。おかしくておかしくて涙がでた。１１９番が出ても、声がでなかった。
――どうして彼を殺したんだ？
――嬉しくて嬉しくて殺したんです！！　彼は自分に暴力をふるうのでした。それが見ていてつらい！　多分わたしに振るいたい暴力を、自分に加えていたのだと理解しました。
目をふさぐ両手、誰？　誰です？　そんなことをしてよいほど親しい人は、わたしにはいないのに……。

――わたしを貫け！　あなたはいう。

遅配された彼からのプロポーズの手紙が、またも、わたしの手の中で複雑なざわめきをつくっている。吹きでるガスの音が耳のなかで一杯になった。

誰かたちは無口で、静電気をおこしながら乾燥した大気のなかをゆっくりと移動していく。誰かの犠牲の上にだけ、生活の安全は確保され、それを享受する立場になるか、それとも犠牲を払う側に回るかは・・・。まさに、くじ運なのだ。

わたしの汗ばんだ髪が一筋、強い力で引っ張られる。頭皮に痛みだけ残したまま、毛根の白い脂肪をつけ引き抜かれた一本は、踊りながら床を這っていく。空中を漂い、花の一枝と一緒に手折られ、細い指でケイの白髪と一緒に編まれている。オカッパ頭の老婆は満足そうに鏡のなかのケイに向かってVサインをする。

白髪の中にわたしの赤茶けた髪の毛が艶やかに光っている。

今、ケイを輝かせているのは、死期が迫っているからかもしれない。絶対と思われた太陽は孔だらけで黒点は大きくなってきている。太陽は傷んでいるのだ。太陽もケイも老いたのだろう！　後は堕ちていくばかりだ。

呼応するように、陽は急に沈み始める。オカッパ頭の老婆がわたしにむしゃぶりつく。

――あなたもこの家に帰って来て！　母屋と離れがみんなの為に開放されたのよ。みんな警察を恐れて、目立たないように出たり入ったりしているわ。でも、張本人はあなただったのだから！　わたしも、みんなも、あなたに共感して、あなたといるのが嬉しくなって、あなたについてきたのよ！！

――違う！　それは、ゆきさんで、わたしではないわ。本当よ！　その証拠にケイさんはあなたを選んだじゃない！　此処に、理想郷が生まれようとしているのね！　応援団もついているじゃない！未来の配置は決まったのかもしれない・・・。漸くみんなにも幸運が回ってくるのね。わたしだってここにいたい。でも、わたしは、わたし宛の手紙を受け取ってしまったから、残念だけど、出て行かなければならないのよ。誰かが泣いているから！

暮れかけた西の空に、無限の光が重厚な層をつくり、わたしの壊れかけた灯を不明にする。

――生きていて下さい！！

オカッパ頭の老婆が叫んだ。

――お化けだぞ！

――死んじまえ！

バックシートから声がかかる。男たちが笑い声をあげる。

疑惑の毒ガスが体内に充満する、深呼吸した。もはや呼吸を欲しない胸のなかを空気の塊がごろご

ろ音をたてる。

何ともいえない野生の叫びで目をさました。それが自分の声であるとは信じ難い・・・。すすり泣くのは誰？　わたしではないよ？　わたしの老婆でも、わたしの少女でもない。

ということは？　彼が泣いているのだ？　何故？　まさか？　わたしに殺されたから？

わたしはもう、鏡を何十年も見ていない、鏡への恐怖はそこに自分が存在しないこと。前に立ちはだかる誰か？　邪魔をしないで！　わたしの前で何を隠しているの？　自分が自分の前で行方不明になる感覚！　それが怖い！

――道理だって変化するのよ。善悪だって逆立ちするわ。どんな悪人だっていい！！

わたしが泣いている。

――音量を調節して下さい。

わたしの少女がいう。

――アクセルとブレーキを間違えたらだめだよ！！

彼が叫んでいる。

――若年寄りっていうのもあるでしょう？

――それは、侍か、お相撲のことでしょう。若年寄りだって若いのは若いのよ！

わたしの灯は混線をはじめる。もうピンクもブルーも寿命は近いのかもしれない。中年をカバーして同時に少女や老婆があらわれ、根幹の空洞に震えが集約していく。

自然が陽光を受け止めて息を吹き返し、わたしの灯は消える運命にあるのだろう。太陽系にあって、それは、すんなりと受け入れられてきたのだ。もうすぐ、わたしの灯は消える、それまでの間、わたしは生きて来た証拠として、目を開けて夢を見る。

蝶の羽ばたきに、驚いた赤いメダカが輝線をつくって穴に隠れた。若草色の蛙が水蓮の葉の上を、腰を上げて跳ねまわっている。塩辛とんぼが水面をツイッ、ツイッとかすめ、幾何学好きの水澄ましが水面に飽きもせずに円を描き続ける。

道路では子供たちが蛭に泥をまぶして捏ね回し、両手を張って、ゴムのように伸ばしては、得意そうな顔を上げてわたしを見た。あれが、彼だったなんて！　鼻翼が広がって吐息が聴こえる。

――トン！

泥だらけの顔が川底に二つ並んだ小さな横長の穴に狙いをつけ、藁を突っ込んでいく。持ち上げる藁の先には黒々と輝く鴉貝をぶらさげている。

――でかいなあ！　きらきら貝だぞ！

興奮した子供たちの歓声に、川底で泥をかぶっていた、なまずが巨体をゆすって姿を現わし、どじようやヤゴがその泥を被って行方不明になる。

ピンクや赤やブルーや白の金平糖のような花をつけた野草が、地震が来たのかと勘違いして震え上がり、花火のように小花が跳ぶ。

野草は小川の半分を占領して盛り上がっていて、帯のように何処までも何処までも続いていく。風が吹きわたると、揺すれる草からハッカのような匂いが微かに巻き上がる。

わたしが覗き込むと、川面に青い空が映って、白い雲が金平糖をまぶして、ゆっくりと動いていく。

川沿いの道を、背の高い老人が、太陽に向かって歩いていくのが見える。広い背中、右肩がどう見ても五センチは下がっている。その昔、雄弁会で鳴らした朗々たる老人の声の後で、小さな男の子と女の子が、口移しに声を張り上げていく。意味もわからず、口も回らないのに、何時か、暗唱してしまっていたのだ。

――夜のとばりは、今や天地をこめんとしている。その時、一人の青年が、エックセルシヤと大書

した一流の旗を押立てゝ、アルプス山下の一村を出で、氷雪を踏み、寒風を冒して勇進してきた！

あとは、一節づつ子供たちが得意そうに声を張り上げる。

――父老はこれを見て袂を控えて、青年よ、道は暗く、暴風は天を捲き、激流は怒号して危険であるから、止めよと戒めた。しかし剛毅の青年は、銀鈴のごとき声を張り上げて、進達を高吟してそこを去った。

女の子が小石につまずき、緊張して声をつまらせる。

――可憐なる、少女は、これを見て、若うどよ。日は暮れて道遠し、此方に憩わせ給えよ、と、優しく呼ばわった。青年の若い目には涙の露が浮んだ。しかも彼は、健気にも進達を高吟して邁進していった。

年長の男の子が労わるように、妹からそれをひきとる。

――農夫達はこの様子を眺めて、声を揃えて枯れた松の枝と、怖ろしい雪崩れに気をつけよと警告したが、不屈の青年はただ頷いただけで、尚も踵を廻さず、ただ進達を吟じながら、勇ましく突進した。

最後はそれがきめられたことのように、みんなで声を揃える。見物していた悪童が一人何を思ったのか、列の後ろに連なってしまう。今にして思えば、これこそ、彼だったのだ。

――暴風は益々荒れ狂い、乱雪は面を打ち、凝氷は眉を結んだが、勇敢なる青年はなおも踵を廻さず、只、進達々々と、大喝連呼しながら山を蹴って登っていった！！

老人の声と子供たちの声が重なって、哲学の道が湾曲していく。ロングフェローの詩で、老人は何を伝えたかったのか？　生き行く信念を、戦う勇気を！　絶望の勇気、孤独の猛進！　子供たちは、老人の背で、背伸びをしながら、まだ見ぬ世界を覗きこむ。

遠い日の花々が、今、わたしの胸の傷口に次々に渦をまきながら流れ込んでくる。

わたしの少女は息をとめ、始めて小川を飛んだ時の勇気をもって、何かを飛び越そうとしている。あれ以来あれほどの勇気をもって、わたしは人生に対峙したことはない気がする。

そして今、最期の一線を越えようとしているのだとわかっていた。

――泣くのは止めて！　何故自分を責めるのよ？

――あなたは何時も僕から逃げようとしていた。それなのに、今頃になって、僕のプロポーズの手紙を受け取っていなかっただなんて？　僕の手紙が届いていたら、あなたは僕のプロポーズを受けてくれていたのですか？　今頃になって、僕が諦めて、あなたに対して悪の限りを尽くした後で、あなたは、何を誓うつもりですか？　あの時この手紙があなたに届いていたら、僕の人生は変わっていた

のでしょうか？　あなたは今でもそれを待っていたのだと、そう、言うのですか？　そんなことを素直に信じられるほど、僕はもう、ウブではないのですよ！　裏を見ようとしてしまいます。それが本当ならあなたは僕を殺すでしょう！　何回でも！　殺しても殺しても殺しきれないに違いない！

愛が力なく捻じ曲がっていく。急に晩年がわたしの頭上に滑り落ちる。それでも、不思議に、空気の中でわたしの光の粒子たちが、なごみあっているような・・・。

――あなたに、やられっぱなしというのも？

――どっちが被害者なのか？　僕はその為に殺人をおかしたのかもしれないのだ。他人を殺すなんて日常茶飯事になった。あなたを諦めた日から、自分の死でさえたいした意味をもっていなかったのだから・・・。

――そして美人の夫人と二人の子供に囲まれているのね！！

わたしは自分を護るために大声をあげる。彼のプライドを傷めつけて、わたしと同じ苦悩を与えたくなる。彼は図に乗って、何時かわたしと遭う日のためにジムに通い、体を鍛えてきたのだとぬけぬけと言う。

――復讐のために？　それでは、支離滅裂じゃない？

――そんなことで、緊張を維持してきたんだよ。根っこでは、やがて来るだろう日を夢見ていたん

だと思う。
苦痛は鋭さを失い、彼の声が歩き回り、時間が超特急で隔たっていき、わたしは何を迷っているのか分からなくなる。
僕は殺人を犯したのに違いないと彼は言った。言う度に確信を増していくようにわたしには思える。僕は殺人を犯したに違いないが、やがて、犯した、に変化していった。失恋して悪人になっていった彼の自己満足が感じ取れる。陶酔さえ見て取れた。
人間の無神経さに、露骨な敵意に、わたしの少女は、わたしの老婆は抵抗できるのか？　二人が混乱している。
――わたしの本分とは何でしょうか？　生きることですか？　死ぬことですか？　全うするとは、どうすることを言うのでしょう！
――問うことなどしないのに、何故、次々答えを要求されるのか、僕には分からない。止まっていること、止まり続けていること。何処にも僕がいないと同じように、止まっていることが不満であること。止まっていないことが我慢出来ないこと・・・。現実には僕は、花火を打ち上げ、生死を越えて、多くの死体を引き摺ってきたのだ。総てが匿名で過ぎた歳月を僕は取戻せるだろうか？
わたしの深奥に涙がたまるとき、わたしは彼の視線を意識する。わたしの光の粒子が又もフラッシ

ユバックして、パッパと光る。
救いはないのだ。狂雨がコンクリートの上を走り回る。一瞬に向かって挑もうとする無数のリズム。
――何を甘えて泣く、トリルにも限界があるんだよ！
――もともと、人生は、生まれたからには死ぬという、決まりきった不幸に、はじめから翻弄されているんだ！　どんなにあがいても、たてついても、笑いつくしても、死から逃げ出すことは出来ない。それが、人生なのだから・・・・。
この人生に鬱憤を晴らす時間はまだあるだろうか？
――僕の行動は総て、そこから発していたのだから・・・・。馬鹿とあきれられても仕方ないさ。生まれてから自分を否定されたことのなかったものにとって、自分を甘やかされ、甘やかして生きてきたものにとって、自己中の反社会的人間として生きてきたものにとって・・・・。総て、きみのせいにして落着したのだ。
――思って見ることと、犯罪を犯すことは全く違うのだから。あなたは一体何を言っているの？　何を考えているのよ。失恋など人間誰でも通過点として潜り抜けていくのよ。いや、あなたも通過していたじゃない、立派に！　止まっていたのはわたしであって、あなたではなかった！　でも今という時に、何故そんなに総てわたしへの想いに凝縮してしまうの？　あなたは・・・？

わたしは言いかけて口をふさがれてしまう。
――ああ、自尊心に触れてはいけない。それを傷つけては駄目！　それだけはいけない、誰にも自尊心はあるのよ。それを護って生きているのだから・・・。
あなただ。あなたが彼に何故こんなにも寛大なのかわたしには、わからなくなる。何時かは、彼に過去の死をつないでわたしに臨終を看取らせた？
――敵意を振りまいて抱きしめて、ぞくぞくするその血に飢えているんだよ！　きみが女であるだけで、何故、こんな、殆ど抵抗不能な引力が働くのだろう？
彼は、プロポーズの手紙を書いたときの年齢にもどっている。有毒な言葉が散りばめられて飛び跳ねる。
時間は飛び越すことや、後戻りすることに平気になっているのだ。そのうちに連続することの意味さえ失ってしまう。
――悲恋で死んだものと思われます。
細い首に彼は吸血鬼みたいに唇を寄せてくる。わたしは無抵抗に首を差し出したままでいる。
錯乱の瞬間、また、その時が来たのだなと理解していた。初めてではない。わたしはわたしからどんどん遠ざかって行くのが分かる。それでも夢の名残か、ゆったりと、幸せな気分にふんわりと包み

こまれていた。
そのとき、あなたが腕を広げ、宙に飛び立つのをわたしは見た。

自分から罠に飛び込んでいく馬鹿がどこにいるの？　騒音をともなって新しい日が動いていく。わたしは、わたしの中を歩き回っている群衆をみる。何故、他人に自分を明け渡すのか？　わたしの未来が、わたしに別れを告げているのがわかる。
――恥なんて何処にあるの？　恋人に捨てられた恥！　そのためにわたしを斬ったの？
――もう、何も隠してはいないさ！
――あなたは、自分のもっていないもののために戦うの？
ブレーキが叫びをあげる。何度でも…。

わたしは火葬場の煙突のなかを、ゆっくりと昇っていく。子供の頃シャケの焼ける臭いだと思った臭いも気にはならなかった。

通るべき道を通って、わたしに、今、生き返った生物として何かを決めなければならない時が訪れているのかもしれない。

――わたしが誰であるにしても、決して驚かない。わたしの前には何時だって死が目標のように希望のようにあったのですから・・・。

すすり泣くのは誰なの？　わたしはそれを我慢出来ない！

――わたしの席には何時も誰かがいる気がするの。わたしが座るには、誰かを排除しなければならない。でも、殺してもいないのに、殺人罪になる気はないわ。

わたしの周りに透明な人や犬や鳥が増えてきている。

もうすぐ、プッツンと切れてしまう！

――今度こそ、お終いなのかな？

と彼は言った。わたしは笑って振向く。

――何故素直になれない？　あまりにも、生きることに稚拙なものたちを束ねて引き摺っていくのだよ。何、化け物も含めたら、生き方は多種多様さ！　今度こそ、自分の才覚で生を選択するんだ！自前の物語を創造すればいい！

――人間になりきれない、人間にならない！　そんな想いの切れ端を、僕たちは剥ぎ合わせていくんだよ！　掬い上げていくのさ！

死体を引き摺っていく男たちの研ぎ澄ました視線が凶器になる。巨大なスクリーンにクローズアップされた少女の顔のなかを死体らしきものを引き摺って男たちが歩いていく。日輪をちりばめたプリント模様のプリーツが一杯に拡がり、運ぶ者たちの足にまといつき、柔らかい街がわたしの足元で震えている。

大気も、大地も眠ってはいないから、あるのは今日だけ、今日は何処までも自由なのだという。

――それって、死がないということ？

引き摺っていくものたちも眠ってはいないのだ。

あなたは黙って、男たちが命を捜す手を見ている。

――涙で透かして見る世界は、逆立ちして見る世界は、びっくりするほど鮮烈だったわ。ふるふるの涙目で、ふらふらの頭頂で光が屈折する。そこにいたのは、あなたよ！　目にみえないからと言って、存在を主張できないと言うものではないはず！　体はなくても、あなたは、わたしなのだから！

庭の樹々をゆるがせて、幽霊たちはオルガンを弾いている。乙女の祈りが終わり、トルコ行進曲が過ぎると、わたしは、夏やすみをリクエストする。

――夏休みには、向日葵が、お日さま追って目を回し、アッチッ、チッチと実を焦がし、すっく、すっくと背を伸ばす。トホホ、スクスク、テヘヘ、スクスク、みんなみんなも、セイタカノッポになるでしょう！！

ゆきの声が楽しそうにはもっている。何故、ゆきはここにいるの？　薔薇の花びらが散り、紫陽花がしぼむと、我が家には向日葵の季節が回ってくるのだ。みんなは首をひねらせて太陽を見上げる。

あなたは萌黄色、もみじのプロペラの上で、ゆっくりと翅を閉じる。こんな帰り方であなたが我が家に戻ったからって、びっくりする幽霊なんていない。

――みんな死んでしまって、家も跡形もない。それなのに、母さまもねえさんも、いまでも、そんなふうに里帰りをしているのですか？

光が少女の顔面を走りまわっている。

――見えないものが空っぽだとは限らないのね。

突然自由が拡がってしまい、わたしの視野に納まらなくなる。わたしは一人であっても、恐ろしい

ほどの数の人々を内に持っていたのだ。その為に体も重く、目標も定まらなかった。自分を人と呼ぶものの中で、果たしてわたしは人だったのかどうか？

わたしの少女は意思表示をするように、黙って椅子を反転させる。セメントの荒い肌に、ところどころ塗り損ねた白粉のように、白がまだらに浮き上がっている。

――その家は川の畔にあったのでしょう！　大屋根の棟には、死んでも血の出ない、ポピーやパンジーや、貝殻草や、かすみ草が風に靡いていた！　知っていたのよ。ここがわたしの家だなんて！　川べりには白や栗毛の馬が、草を食んでいたわ。あの馬たちが、あの家を箱舟みたいに曳いていってしまったのね！

少女は唇についた泡をそっとなめる。

ぬくぬくと温もった大地の上に青桐が伸びていく。真っ直ぐに伸び、決して、いじけたりはしない。この桐はわたしの花嫁道具のタンスになるのだと母は言った。恋人らしい男の顔に金歯が派手に食い込んでいる、わたしの少女にはそれが我慢できない。

――臆病にも、チャンスもつかまずに死ぬなんて！

――あら、死が、チャンスかもしれないじゃない！

――理性を、若さを、知性を窒息させては駄目！　抑圧されてきた自我を解放するのよ！！

長い髪を揺すると人格が変わったような気がした。

どこかで、メトロノームがリズムを刻みつづけているのを感じる。それにクスクスと子供の笑い声がからみ、少年が覗き込んでいる。

――明かりを消して、ラジオの音を小さくして・・・。嵐が近づいてきても驚いては駄目だよ！

――ドドード、ドドード、ドドード、ド、赤いりんごは、あーまいぞ！　青いりんごは、すっぱいぞ！　ドドード、ドドード、ドドード、ド、赤いりんごも吹き飛ばせ！　青いりんごも吹き飛ばせ！　さあ声をあわせて！　そうだ！

ある日、わたしは雲の帽子を被った少年に出会う。ゾンデを打ち上げるのだと言って、大きな風船を手にしていた。

――あなたとは、何時か？　何処かで、出遭ったことがあると思うのだけど？　・・・そうだ、思い出したわ。あなたはお祖父さまの原稿を損なったといって、わたしを非難していた。あなたは、誰？

…もしかしたら、わたしの叔父さまなんじゃ？　そんな気がする！　サンゴ礁の島で玉砕したと聞いたわ？　怖かったでしょう！　若かったのね、まだ、大学生だったのでしょう？

少年は雲の間から切れ長の空色の目をのぞかせてわたしを見る。

――怖かったのね？　あなたは雲や空が大好きだったとお祖母さまは言っていたわ。たった一人の男の子だったのでしょう？　わたしが生まれたとき、名前をソラかクモにして欲しいと、だだをこねたのね。母さまから聞いたわ。…あなたが死んだとき、お祖父さまも、お祖母さまも死んだのだと、そう聞かされて来たものよ、愛されていたのね！

――お兄さんが、風の又三郎の映画を見てきて、わたしたちに、話してくれたのよ。外は嵐で、本当に風が吹いていたから。わたしたちは、もう、夢中だった。声を合わせて、歌ったわ。嵐を呼んだのよ！！　嵐なんて怖くなかった！　友達だった！

わたしの老婆が、遠くを見るような目をする。

――赤いりんごはあーまいぞで、わたしたちはもう嬉しくて嬉しくてたまらなくなって、胸を力いっぱい抱きしめたわ。青いりんごはすっぱいぞでは、みんなで口をとがらせて、枕を投げあったの。電気が消えて、ローソクを立てていたから、天井に大きな影が映って、どきどき、みんなの心臓が勝手な動悸を打って、膨らんだり、しぼんだり、いきづまったりしながら、歌い続けたのよ。嵐を呼ん

だの！！

わたしの目の前で、少年が突然倒れる！　後を追って次々に青年姿の少年たちが倒れていく。その数はもう、数え切れない！！　空爆の後で、艦砲射撃が始まったのだ。

雲のスクリーンにクローズアップされた少年の顔のなかを、つぎつぎに、死体らしきものを引き摺って男たちがいく。紺碧の海に浮かぶサンゴ礁の島、死体らしきものを引き摺っていく男たちの腕は白い毛むくじゃらだったり、褐色だったりする。日輪の焼け焦げた国旗がいっぱいに拡がり、運ぶ男たちの足に巻きついていく。

――かあさん！　おかあさん！　つぶやきは、引きずられていくうちに力尽きてしまう。

山のように積み重ねられた死者の層から、薄紫色の煙が立ち昇りはじめ、やがて高々と炎をあげる。煙は雲になって遥かな故郷をめざして漂っていく。

――かあさん！　おかあさん！

若者たちに、そよぐ花も、降りかかる花びらもない。異邦の女たちは、燃え上がるような花々が動物である証拠のように、血の色を捧げていく。

何枚かの皮膚の下で、ものを数えているように暑い夏の日は過ぎる。耳の奥で温もっていた海水が思い出したように泡立ち、エアコンが唸っている。忘れずに秋は廻って来るのだ。

窓ガラスの四角が、全部、空色でいっぱいになった。

――こんな日には広い空を、空色でいっぱいになった。

とあなたは言う。

――でも、運び去られた歌声は、もう戻ってはこないのね。

エレベーターのなかで気を失うように壁にもたれると、蛍光灯のなか、昆虫の死骸が影絵のように大きくなった。

――生きる決心がまだついていないのね！

三角のオレンジ色のペナントがひらひらする。わたしに、手足が何本も何本も生えてくるのがわかった。

――僕に、ひらめきがないとしても、きみの感性の方に問題はないのかね？

――あなたが後悔しているなんて、どうしても思えない。わたしは夢の国で幼い日をおくったのよ。

後ろめたいのでしょう？　顔に書いてあるもの。それとも精神が麻痺しているの？　魂があるから不幸だとおっしゃるの？

――手遅れなのかもしれない、何故？　こんなにも無防備に、断末魔まで何一つ予見できなかったのか？

それは二日酔いの続きのようにやってきた、頭は重く、目の焦点が狂ったように世界中がぶれていた。わたしは待機するように息をひそめている。甘美な犯罪！

歯に力を入れようにも歯は浮き上がっていて、歯はない。おびえていたのだ、子供のように独りぼっちだった。

幸運は何時だって熱に浮かされたまま走り去っていく。見極めはつかない、焦点はもっと奥の奥、覗いたこともない別世界なのだとわかっていた。

夢幻はめくられてしまったのか？

――僕が彼女にまだ一度も殺されたことがないなんて考えられない。胸に刃がくいこんだのも、車で撥ねられたのも昨日のことなのに？　今、生きていることが人間に対する侮辱のように感じられる。

――本来のあなたに戻ること！　あなたは人を殺したことなどなっかた！　それは悪になりたい子供じみた勇み足、自己破壊本能！　もうそんな虚飾は必要ない。あなたは、あなたであればいい！！

わたしは、目をつぶっていた。翅の生えてくるのがわかる。そう、もうすぐ……。

――わたしは夢の国で、幼い日を過ごしたのよ！

――なら、僕と一緒だ！　なんの矛盾も無いさ！　石垣には烏瓜が蔦のようにからまり、ところどころに、蛇の抜け殻を飾って、オレンジ色の烏瓜が陽気な顔を覗かせていた。車回りを歩くと中央に広場があって、あかざが、もみの木みたいに伸び、蔦がからまり、幾層ものとんがり帽子のお城をつくっていた。その中央、小さな椅子に、少女が一人腰掛けていた。

その少女の名はソラ！！

――誰？　誰なの？

今、僕は不思議な世界の中にいる。しかもそれは現実なのだ。

昂揚していく想い、抱きしめたい温み、蒼い波になるとまどい、まだ遠くで泣いている、彼女からのシグナル。

僕は彼女と新しい生活をはじめている。

会社から退き、家庭を捨て、このアパートメントに移り住んで、一ヵ月になる。
彼女のエメラルドグリーンのビロードのような翅が、何故か光を透かし、僕の肩に幾重もの襞をたたんで憩い、そっと頬を寄せるとき、僕はその愛しさにわれを忘れる。陶酔といってもいい。
今まで僕が彼女に与えてきた仕打ちを考えるとき、彼女の寛大さが信じられない。言い募った言葉の一つ一つが行為の総てが、短剣のように僕を刺してくる。そのために僕の失ったものなど、比較にならないほど小さい。
彼女は少女のような細い黒い腕を振って、僕に信号を送ってくる。
――散歩の時間よ！
僕は、いそいそと支度をはじめる。彼女は嬉しそうに、右に、左に、位置を変えながら、僕にまとわりついてくるのだ。
道行く人たちが不思議そうに、振り返っていく。
こんなとき、彼女は黒いつぶらな瞳を、サファイヤブルーに膨らませて輝かせるのだ、したたり落ちるのではないかと、僕はそっと、手を添えてしまう。
どう見てもそれは喜びを現しているように僕には思える。一人よがりではないかと、思い直してみても、彼女がかすかな翅音をたて、羽ばたきながら飛び立つとき、その喜びを受け取ってしまう。

陽光がグリーンの翅に微妙な濃淡をあたえ、打ち震えながら翅を閉じるとき、僕は彼女の吐息を聴く。

――そうか、嬉しいか！

僕は彼女の目や鼻の先にそっと、そっと、キスをする。

彼女は僕の肩に夢中で顔を埋める。

道路の両側には夏の花がまだ咲き競っている。彼女は花の間をひらひらひらと飛びかっては戯れのように。赤い花の雌しべに狙いをつける。彼女が吸蜜を終え、口吻を巻き戻しているのが見える。僕も誘われ、花のなかに顔を伏せ、めしべの蜜を吸い取ろうとする。

かすかな甘ずっぱさや青臭さが、ひんやりと僕の唇や鼻のさきをくすぐる。拭き取ると花粉のオレンジ色が鮮やかに指先を染めあげている。

――きみは口吻というストローを持っているんだもの、笑うのはフェアじゃないよ。

昔、山つつじの花の蜜をしゃぶり、ぺっと花を吐き出す山の子供たちに出会ったことがある。あんな風にやればいい。

花の香りを胸いっぱい吸い込むと、全身にしびれるような快感がくる。頭のどこかで、これが何時まで続くのか？　かすかな不安がおずおずとよぎる。

――相変わらず不器用なんだから・・・。よくそれで社長になれたものね？

――そうだな、僕にとっても、それは信じられないものだった。でも、総ては私情、小気味よく、僕を裏切ったきみへの報復で割り切れた。きみを見返すために、その為には人も殺した！　いや、人を殺すのもいとわなかった。詐欺まがいのこともした、裏切りも、傲慢も日常になった。金持ちになること、それしか考えなかった。どうして、そんなことを考えたのだろう？　それが、きみから最も遠いものだったからさ。きみの最も嫌っている、軽蔑している人間像に思えたからだと今は思う。僕は血を流していた、しかし、それが日常になり、それに慣れていった。失恋して金持ちになる人間などざらにいるんだよ。それなのに、プロポーズの遅配という、きみからのとぼけた電話で総ては豹変してしまった！　どうしたらいいのかわからなくなったんだ、まさにパニクッタな！　僕の上に巨大な圧力を加えているらしい空気の層はごめんとも言わずに乗っかたまま、僕を締め上げてきた。空気は鋳型、僕はもっと大きく自由の筈だった。こんなに身動きできないのは、大気のせいだ！　どいてくれ、僕の上から出て行ってくれ！

僕に僕の実体を返してほしい。僕が巨人であることを、彼女に知らしめてください。僕に僕の実体を戻してください。そうして、僕は曲がった光のなかを潜り抜けた。僕は独りになると、止めどなく泣き続けた・・・。何故だかしらない？

――それで、あなたは巨人になれたの？
――ああ、なれた、なれたと思う！　その証拠に、何も無い。きみのほかには・・・・。
――なら、何故、泣くのよ？
季節はずれの蝶がアスファルトを舐めるように走っていく。

僕たちは並んでベンチに腰掛けている。何時の間にか僕は彼女の翅音で言葉を聞き分けることができているのだ。生活をはじめた頃は、蝶に言葉のないことが、声のないことがどんなにか残念に思われたのに・・・・。
――きみは、何色の花がすきなんだい、アゲハ蝶は赤い花が好きだと聞いたことがあるけど？
明るいベンチの陽だまりに彼女の翅の翳が長い。
――赤い花の蜜は美味しいのよ、でもわたしは苦味のある青い花がすき！
――そうか、そう、花で味が違うのか？　そうなんだな、当たり前だといえば言えるけど、僕、そんなこと考えてもみなかったもの！
――そうよ、蝶の世界なんて踊って遊んで、のどかに飛び回っていると思っているでしょうけど、色々苦労しているのね。食べても不味い蝶に似せるために、お芝居までして身を護ろうとしているの

よ！　敵は沢山いるんだから・・・。
――ああ、そう、そうなのか。まずい蝶と、美味しい蝶がいるのか？　きみも闘っているんだなあ。そいで・・・つらくはないのか？　なんか僕の、してあげられることはないかな？
蝶がベンチから羽ばたきながら、僕の肩に飛び移り、か細い触覚を上下させて覗き込む。
彼女の眼の中で、光の粒子がブルーからピンクにゆっくりと移りかわるとき、僕は少女の彼女に出遭う。
――でもね、飛ぶことってすごい！！　それは想像を絶するものだったわ！！
彼女の瞳がサファイヤピンクに盛り上がる。
――蝶がこんなに飛翔できるだなんて考えてみたこともなかったもの。ああ、あなたにも見せてあげられたらいいのに・・・。
蝶は僕の肩の上で、何度も飛翔を繰り返しながら、くるくると転がるように回転しては、ふんわりと、着地してみせる。得意そうに口ひげがぱたぱたする。
――あなただってよく見ていたら蝶たちが上昇気流に乗ってどこまでも、どこまでも飛んでいくのがわかるはずよ。あの世まで旅することができるのだから・・・。
――待った！　待ってくれ！　それって、本当？　あの世はやっぱし存在するのか？　いや、ぼく

だって、簡単にそんなこと口にはするけどさ、信じていたわけではないんだ。でも、きみがこうあるってことは、そうに違いはないけど？　やっぱし、あるんだな！！　それに、蝶に、そんな飛翔力があったとは・・・、驚きだなあ！　僕の想像力を遥かに超えているもの。美しく儚いものとばかり思って来たけど、逞しいんだなあ！　地べたを這いつくばっている人間にとっては、そんなこと、夢のまた夢だもんね。・・・で・・・。

僕は言いよどんでしまう。儚い蝶の寿命が、頭からどうしても離れないのだ。それによって、これからの僕の運命はきまるのだとわかっていたから・・・。

――ああ、あなた、今、蝶の寿命はどうなるのかって、そう思ったのでしょう？

――いや・・・。

――それは、わたしにもよくわからない！　でも、これは・・・。

――ああ、ごめんよ！　僕の寿命だってわからないのに。僕は何を心配しているんだろう？

蝶はオーバーに翅音をたてて、僕の耳元に位置を変えた。そんなに近づいたら、僕の鼻息で吹っ飛んでしまう！

――ね、聴いて、聴いて！　わたしね、出遭ったのよ。不滅の魂たちに！！！

――ほう！　不滅の魂たちに？？？

僕は、仰天し、ただ繰り返して、彼女の期待している返答をだいなしにする。

――わたし、生前？　一寸おかしいけど、まあいいわね。そうじゃないかと思ったことはあったのよ・・・。でも、まさか、こんな風に魂たちが姿を現すだなんて、考えたこともなかったもの・・・。

彼女は宝物でも見せるように、気をもたせてじっとしている。でも、考え深そうなエメラルドグリーンの翅が、ささやく。

――・・・それは幾層もの、不透明な巨大な層をつくって、きらめいていたわ！！　・・・美しかったかと聴かれても、そんな感覚を越えていたもの！！　それは、開かれていたから、わたしはすくみ上がってはいなかったと思う。その核心は、熱とひびきのようなものだと、わたしは理解したの。その子供である光や波動が、次々に、可視の姿で命をつむいでいたわ。言葉で話すのをきいたのよ！！

――それって、命をつむぐって？　再生ってこと？

――そうよ、新品の命など存在しないのよ！！

――それは、科学的に説明できることなのか？　きみ自身が、単なる想像上の産物ではない以上、僕はそれを信じるけど・・・。そうだ、聞いておかなければ！　もしかして、もしかして、肉体を離れて、魂が存在するのなら、その精神物質または、精神作用について・・・何かわからなかったか？　魂の構造式は？　きみが、現にこうあるってことは・・・。僕にはそれは、科学的に解明できる筈だと思

うのだけど！！

――わかっているといったら、あなたはどうするの？

――だとしたら、それは、人生を、生物界を、覆すほどの驚異的なことさ！　それに、僕の背にも翅のはえる方法を見つけられるかもしれない！　一緒に飛んでみたいんだよ！　手を繋いで、さーっと飛び上がったら、どんなに気持ちいいことか！！

思うだけで僕の体は、不様に腰から浮き上がってしまう。嬉しくなって歯止めがきかなくなってきている。そうだとしたら、人間の未来にあるものが、様変わりする。人生に付き纏ってきた不幸の翳が払拭されるのだ。そう想って生きることができれば、幸せな可能性が拡がってしまう！！

彼女の黒い右肢が小刻みに器用に斜に打ち振られている。蝶はこんな風に意志を疎通させるものだったのだろうか？　僕は彼女の黒々とした胴の背を、そっと、そっと、愛撫する。

今、僕には愛する人が、いや、こんなにも愛すべき蝶がいるのだ。このふくよかな眼差し、それは、空の青だとわかっている。

ソラ！！　きみといることが、あなたといることがこんなにも嬉しいとは・・・。僕は頭の先から、手足の末梢の端の端まで、甘い感動に満たされてしまう。

人生は永遠だとは僕には思えない。でも、あなたは生きているのだ。どんな形であるにせよ、それ

が、科学を超えているのかいないのか、僕にはわからない！　でも、日毎にそれは自然になり、何の不思議もなくなっていく。

日常のように、風もないのにリビングのカーテンは波打っている。

あの日、目覚めたとき、僕には、世界は重い鬱陶しいグレーのカーテンに幾層にも覆われているように思えた。息ぐるしかった。何もかも捨てて何に辿り着こうとしているのか？　彼女の所在さえ、はっきりとは知らなかったのだから・・・・。

でも、あなたは生きているのだ、それだけでよかった。

昼、彼女を探して家を出ようとすると、インターホンの上あたりに、ベージュ色の蝶が標本のように貼りついているのをみた。よく見ると触角がカーブして伸び、蛾のように粉っぽくもなく、翅に斑点があって、何とかひかげじゃないかな？　それとも蛇の目蝶かな？　と僕は僕の少しばかりの知識を動員してそう思ったんだ。

ベージュ色の外壁と同色で、うっかりしたら、気づかずに見過ごしてしまうところだ。ああ、こん

な風に蝶も身を護っているんだなと、ふっと、僕はおもった。意地らしかった、鼻につんときて連鎖反応のように目の中が熱くなった。擬態だろう！

彼女の家に彼女は不在。郵便受けを覗いてみた。葉書が一通はみだしていた、僕は周囲を見回してから、それを抜き取った。

〒[お預かりした借用証の件、借用金と、利子を含めて、お申し越しの佐川弁護士の口座に振り込みました。尚、お言葉に甘えて、半分は会社の事業資金として運用させていただきます。お会いした上でお礼を申しあげたいのですが、連絡がとれず、先ずは書面にてご報告申しあげます。当方、お会いしてから潮目が変わり、日々力強く運命を切り開いています。有難うございました。]

後は会社名と署名があった。この会社ならこの人物なら面識がある、僕は急いで郵便受けに投函し直した。どういう関係なのだろう？　ともかく、彼女が金に困っていないらしいことでは、何処かで、ほっとした思いと、がっかりした思いが交錯していた。

表札は元のままだが人の住んでいるという気配は感じられない。近所の人々は何故か、首を振り、現在どなたが住んでいるのか知らないと繰り返すばかりだ。なら、前には誰が住んでいたのか聞くべきだったのかもしれない。途方にくれて暫く門に寄りかかっていた。

携帯電話が最近繋がらなくなっていたのだ。彼女の上に何かあったのでは？　身辺整理をすませな

ければ、彼女の前にでることなど出来ないものと、一方的に決めてかかっていたから・・・。不安が襲いかかってきた。

焦ってもいた、どうしたらよいのか？　果たして、彼女が僕との生活を望んでいるのかどうかさえ、わからなかったのだから。それより、僕を赦してくれるのか？　それもわからなかった。余りにも無謀だったかも・・・、だからといって、総てを捨てて来たことに後悔はない。落ち着くんだ！　ゆっくりと歩けばいい。ぼくは外食する気にもなれず、気陥ちして、まだ陽の高い時間に、とぼとぼとアパートに戻った。

外出から帰っても、蝶は同じ姿で、壁に貼りついていた。死んでいるのだろうか？

僕は部屋に入ってから、はっと感電でもしたように玄関に引き返した。

――もしかして、もしかして、きみ、きみなんじゃないのか？

僕は声に出して言って見た。

蝶は微動だにしない。かなり大型で、全長七、八センチはある。白目のない、黒い瞳には、つや消しでもかけたように、光はなかった。

――そうなんだ、きみじゃないか？　ああ、やっぱし、そう、きみなんだね！

僕は通路をいく人を窺いながら、希望的観測で、そうであって欲しい願望から話しつづけた。

――そうか、きみ、来てくれたのか？　そうか、そうか、よく来てくれたね！
蝶は死んでいるのだろうか、貼りついたままだ、心配になってくる。
――こんなところにへばりついて、他人に見つけられたらどうするんだ。蒐集マニアだっているんだよ！　さあ、家の中にどうぞ、入ってください！　遠慮はいらないよ、きみの家なんだから・・・。
話しているうちに、何だか催眠術でもかけられたみたいに本当にそう思えて来た。導き入れるために僕は指をそっとそっと伸ばしていった、指先に飛び移ってほしかったのだ。指先がちょっと翅に触れたと思ったとき、蝶は突然、翅を震わせながら元気よく飛び立ったのだ。ああ、生きていたんだ！　僕は嬉しくなった。目の中が光で一杯になって、途端、目をつむったのかもしれない。
目を開けたときには、蝶を見失ってしまう！　ああ、あんなに元気よく飛んで行ってしまったのか？　見なかったけど、見えなかったけど、どっちへ、何処へ飛んでいってしまったのだろう？　でも、死んでいなくてよかったなと、とまどいながらも胸をなでおろした。
あんなに元気よく飛び立って、どこかにぶつかったり、落ちていたりしたら、ことだな！　僕は通路からエレベーターホールへと、床から天井まで丹念に見て回った。何処にもそれらしい翳は見当たらなかった。見えなかったけど、見ることは出来なかったけど何処かに飛んで行ってしまったんだな。今までだって、蝶たちは何時だって、僕に挨拶などしないで、何処かに飛んで行ってしまっていたの

だから・・・・。

僕は名残惜しい気分でドアを閉じた。蝶は飛んでいってしまったのだ。戸惑いを宙に浮かして部屋に入って、ぼんやりしていた。そんなこと、あるわけないんだから！！

そのとき、胸のあたりがなんだか、ごそごそし、くすぐったくって、Tシャツの首から覗いてみた。僕のみぞおちに突っ込んで、何かがばたばたしていた！　驚いて裾を持ち上げると、勢いよく飛び出した蝶が、廊下から羽ばたきながら、僕を導くようにリビングルームに、ひらひらと飛んでいって、レースのカーテンに止まり、翅をたたんだまま震るわせていたのだ。

翅は陽光を透かして美しいエメラルドグリーンだ、さっきまではベージュの冴えない色だったのに？　翅は微妙なグリーンの濃淡をみせ、ビロードようの翅が幾重にもかさなり、信じられない透明感で羽ばたいていた。昼の光と爽やかな風が翅をすりぬけていくのを僕は見た。

――きみだね！　やっぱし、きみだったんだ！！　そうか、そうか、きみらしい、現れ方で、よくぞ来てくれたね、嬉しいよ・・・・。

僕は仰天し、有頂天になった。涙がこみ上げる。蝶はそれがわかったように形のよい髭を上下させ、幾重にか畳んだ翅を、扇のように開いたり閉じたりして意思表示をした。

そのささやき！

――ソラ！　そうなんだね、あなたか！！！

――そうか、きみも嬉しいか？　なんだか、遠くから来たみたいだね？　疲れてはいないか？

なんだか遠い匂いがしたんだ。いや、翅はきれいだよ。こんなに美しいものに僕は出会ったことはない！　ほんとうだよ！

――でも、もしかして、聞いたら悪いのかもしれないけど・・・、あの世から来たのか？　ということはきみは死んだの？　ええっ？　あんなに電話では、元気よかったのに？　ほんとに？　もう会えないのか？　一緒に今度こそやり直そうと、そうおもって来たのに？　いや、きみで不足があるんじゃないよ。充分に嬉しいよ、嘘じゃない！！

――でも、もしかしたら、きみは僕に殺されたの？　僕はきみに殺されて当然だったのに・・・？　きみのところに戻るために、僕は会社から身を退き、離婚をし、妻と、妻の子供との絆も断ち切ってきたんだ。きみのところに戻ってきたんだよ！！　そうか、間に合わなかったのか！！　泣けるなあ！！もしかして、きみも泣いているの？？

僕に世界中の慟哭があつまってくる。僕は慌てて、僕の涙から蝶を保護し、両腕で覆ってからしゃくりあげた。涙が止まらない、涙が止まらない！！　悔恨が胸を突き上げた。

きみはこんなにも儚いものになって、僕に遭いに来てくれたのか？　生まれ変わったのか？　変身

したのか？
蝶は僕の想いがわかるのか、サファイヤ色の角膜レンズを涙が流動でもしているように波立たせた。
驚いたことに、蝶の顔は、紛れもないソラの顔だ！！　ソラの顔に見える！！
――ああ、あなたは、こんな僕を赦してくれたのか？　有難う！！　これからは、僕と一緒にいてください！！　僕と一緒にいて欲しい！！
彼女は、エメラルドグリーンの薄翅を、差し込んできた西陽に金色に縁取り、リビングのカーテンから煌きながら、羽ばたきながら舞いあがった。歓喜の舞だと僕は思った。
あの日から、僕たちの、夢のような生活は始まったのだ。

――今度いなくなる時は声をかけてよね！　その時は僕も一緒にいくんだから・・・。
僕は一番の心配事を口にして、予防線を張ったつもりになる。
新生活をはじめたころ、僕が残念だったのは、蝶が鳴かないこと、蝶が言葉をもっていないことだったのに。今、彼女はさまざまな翅音をたて、深いみどり色の翅で羽ばたき、サファイヤ色の目をドーム型に輪郭をこえて膨らませ、煌かせるのだ。僕の呼吸にあわせて大きくなったり、小さくなったり。この六角形の細長い個眼の寄せ集めである複眼の目で、目の中がサファイヤブルーからサファイ

ヤピンクに移ろうとき、僕は少女であるソラと遊ぶ。
彼女は、繊細な触覚と、前肢を器用に動かして僕に触れる。打ち震えながら溢れ出るような想いを伝えてくるのだ。僕はその微かな音に耳を澄まし、その言葉を理解してしまう。
夜には、翅を拡げ胸毛に前肢を絡めて、僕の胸の上で眠る。

〒ソラ、ソラ、ソラ様、[愛しています、ずっと、ずっと、愛していました。これを受け取ったら僕のところに来てください！　明日旅立ちます。‥‥急ではあなたも困るでしょうから、よい返事を一週間、僕の一生をかけて待ちます！！！　それから旅立ちます。]
彼の手紙が巨大なスクリーン上をゆっくりと流れていく。
スクリーンにクローズアップされた少女の顔のなか、文字は、蝶のように次々に舞い上がる。

完